

書記生 年十級	書記生 年九級	書記生 年八級	書記生 年七級	書記生 年六級	書記生 年五級
三拾九錢	四拾九錢	五拾六錢	六拾貳錢	七拾九錢	八拾五錢
貳拾九錢	三拾七錢	四拾五錢	五拾貳錢	六拾九錢	七拾六錢
貳拾九錢	三拾五錢	四拾三錢	五拾元	六拾七錢	七拾四錢
拾八錢	貳拾五錢	三拾三錢	四拾元	五拾五錢	六拾二錢
百四拾四圓	百八拾圓	貳百四拾圓	三百圓	三百六拾圓	四百貳拾圓

第六章 官吏任用

●官吏選任ニ係ル沿革要領

明治元年八月四日布告賄賂私請ヲ以テ推舉登用スルヲ禁ス○同年十月諸官ニ令シテ初メテ登用ノ者ハ先履出任トシ才能ヲ試ミ後本官ニ任セシム○二年正月二十四日布告シテ人材公選方ヲ示ス○同年四月二十二日六等官以下ハ諸官知事副知事ノ見込ヲ以テ選任ス○同年五月八日諸縣判事ノ選舉ヲ民政部ニ委任セラル○同年二十七日藩士登用ノ節

ハ該藩ニ照會シテ任用セシム○三年六月轉任並免職ノ者選舉ノ時ハ前官ノ模倣ヲ照會セシム○四年三月辨官選ス判任官選舉ノトキハ平日ノ行狀才識等ヲ取調尚其管廳ヘモ照會ノ上登用スヘシ○同年四月七日布告庶ノ稱ヲ廢シ何等出任ノ稱ヲ廢ス○五年十月第二百九十六號免職ノ者更ニ登用スルトキ取扱方ヲ達ス○八年五月第七十六號達ヲ以テ各廳ニ於テ採用ノ者アルトキ管廳ヘ照會方ヲ心得シム○九年十二月第五百十五號ヲ以テ徵兵名簿ニ記載ノ壯丁官吏採用禁止ノ期限ヲ達ス○十七年十二月第五百二號達ヲ以テ判事登用規則ヲ定ム○十八年六月第十二號布達ヲ以テ舊海陸軍刑律ニ依リ森官及回籍ノ刑ニ該リ文武又ハ武官大小ノ員ニ補スルヲ禁セラントル者解禁年限ヲ定ム○同年十一月第六十二號達ヲ以テ判事登用規則第九條ニ但書ヲ追加ス○二十年四月閣令第九號ヲ以テ辭職ノ官吏再就職ノ年限ヲ定ム○同年七月勅令第三十七號ヲ以テ文官試驗試補見習規則ヲ定ム○同月閣令第十八號ヲ以テ前規則ニ關スル細則ヲ定ム○同月閣令第十號ヲ以テ高等試驗及實務練習ヲ要セス司法官ニ任用方ヲ定ム○同月閣令第二十號ヲ以テ郡區長ノ試驗科目ハ內務大臣ノ指定スル所ニ據ラシム○同年十一月勅令第五十七號ヲ以テ試補見習待遇並任用方ヲ定ム○同月勅令第五十八號ヲ以テ學務及學術技藝ニ關スル行政官任用方ヲ定ム○同月閣令第二十三號ヲ以テ在職判任官ニテ直ニ本官ニ任スルノ年限ヲ定ム○同年十二月勅令第六十三號ヲ以テ陸海軍士官並同等以上試驗ヲ要セス文官ニ任用方ヲ得セシム○同月勅令第六十四號ヲ以テ判任官高等試驗ヲ受ケ本官ニ任用方ヲ定ム○同月閣令第二十五號ヲ以テ文官試驗試補見習規則中司法省舊法學校正則部生徒ニ適用方ヲ定ム○同月閣令第二十八號ヲ以テ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者任用方ヲ定ム○同月內務省令第五號ヲ以テ郡區長試驗ニ關スル條規ヲ定ム○二十一年三月閣令第二號ヲ以テ文官試補見習ヲ命シタル者給料額ヲ定ム○同年十二月勅令第九十八號ヲ以テ文官試驗試補及見習規則中ヲ刪除ス○二十二年一月閣令第三號ヲ以テ北海道郡區長試驗ヲ要セス判任官ヨリ任用方ヲ定ム○同年三月二十二日閣令十號ヲ以テ高等商業學校卒業證書ヲ有スル者判任官見習ニ任用方ヲ定ム

第三十三 文官試驗試補及見習規則

明治二十年七月二十五日公布

勅令第三十七號

朕文官試驗試補及見習規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十年七月二十三日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第三十七號

文官試験試補及見習規則

第一 通則

第一條 本令ニ於テ文官ト稱スルハ奏任判任ノ文官ヲ總稱シ試補ト稱スルハ勅令第十三號學位令ニ依リ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケ又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ヲ卒業シ又ハ高等試験ヲ經當選シテ高等官ノ實務ヲ練習スル者ヲ云ヒ見習トハ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ヲ經當選シテ判任官ノ事務ヲ練習スル者ヲ云フ

本令ニ於テ司法官ト稱スルハ裁判官及檢察官ヲ總稱ス

第二條 第三條第四條ニ掲グルモノヲ除クノ外本令ニ依リ定規ノ試験ヲ經當選シタル者ニアラサレハ試補及見習ニ任命スルコトヲ得ス又實務練習ヲ終リタル者ニアラサレハ本官ニ任スルコトヲ得ス

第三條 三年以上分科大學ノ教授ニ任シタル者ハ高等試験及實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任シ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文

學部ノ卒業生ハ高等試験ヲ要セス試補ニ任スルコトヲ得

司法官タルノ資格ヲ有スル者ニシテ他官ヨリ司法官ニ轉スルトキ又ハ司法官タルノ資格ヲ有シ三年以上代官人タル者ハ實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第四條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス判任官見習ヲ命スルコトヲ得

第五條 試験ヲ分テ高等試験普通試験ノ二種トス

高等試験ハ試補ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニシ普通試験ハ判任官見習ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニス

第六條 試験ハ筆記口述ノ二様トス筆記試験ニ落第シタル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 試験ハ筆記口述ノ二様ニ就キ各科目ノ點數ヲ合算シタル一定ノ平均點數ヲ以テ合格ヲ定メ時々官廳ノ需要ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ合格者中ヨリ選抜シテ當選者ヲ定ム但一科目ニ付一モ點數ナキ者ハ合格者トスルコトヲ得ス

第八條 前條ノ選抜ニ當ラサル者ハ合格者ト雖モ再ヒ文官ノ任用ヲ望ムトキハ更ニ本令ニ依リ試験ヲ受クヘシ

第九條 試験ニ必要ノ參考書類及紙墨ハ試験室ニ備ヘ置キ受験人之ヲ携帶スルコトヲ許サ

第十條 試驗當選者ノ姓名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十一條 第九條ヲ犯シ若クハ不正ノ方法ヲ以テ當選シ他日其事ノ發覺シタルトキハ當選ノ効ナキモノトス

第十二條 第九條ヲ犯シタル者及第十一條ノ處分ヲ受ケ又ハ不正ノ方法ヲ以テ當選セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十三條 第十八條第二十三條第三十三條第三十六條ノ履歷書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條 試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 本令施行ノ後五箇年間ハ事務練習中ト雖モ本官ノ缺アルトキハ其練習ノ滿期ヲ待スシテ本官ニ任スルコトアルヘシ

五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第二 高等試験

第十六條 高等試験ハ各官廳ノ須要ニ從ヒ時々東京ニ於テ試験委員之ヲ行フ其期日及場所ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十七條 高等試験ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

二十一年文部省令第三號ニ於テ特別認可學校規則ヲ定ム

一 丁年以上ノ男子

一 外國ニ於テ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ二年以上其學科ヲ修學シタル旨ヲ證明スル證書ヲ有スル者

一 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 高等中學校及東京商業學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者

第十八條 試験願書ハ其時々官報ヲ以テ公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 第十七條ニ掲グル卒業證書及修學證書ノ寫

一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第十九條 高等試験ノ科目ハ試験ヲ行フ年毎ニ司法官又ハ行政官ノ別ニ依リ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官試験局長官之ヲ選定シ試験ノ期日ニ箇月前ニ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二十條 第三條第四條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技藝ヲ要スルモノハ別段ノ試験法ヲ定ムルマテ各官廳ノ需要ニ從ヒ試験ヲ經スシテ之ヲ任用スルコトヲ得

第三 試補

第二十一條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ定限ヨリ短カラサル期限間事務ヲ練習スヘシ

第二十二條 各官廳試補ノ定員ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二十三條 法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ニシテ行政官又ハ司法官ノ試補タランコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ取添共旨ヲ文官試験局長官ニ出願スヘシ

- 一 出願者ノ履歷書
- 一 學位又ハ卒業證書ノ寫
- 一 身分年齡

二十一年十二月勅令第九十八號ヲ以テ(取添)ノ下(高等)試験期日三十日前ニ(十一)字ヲ削除ス

第二十四條 行政官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ地方官廳一箇年半ハ中央官廳ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十五條 司法官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ治安裁判所一箇年半ハ始審裁判所ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十六條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習スルニ付テハ其主務長官ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第二十七條 主務長官ハ事務練習ノ終ニ於テ試補練習ノ功程ヲ所屬大臣ニ具狀シ其意見ヲ提出スヘシ

第二十八條 所屬大臣ハ練習期限中ト雖モ試補官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタルモノト認ムルトキハ試補ヲ免スヘシ

第二十九條 在職ノ判任官ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス缺員アル場合ニ於テハ直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第三十條 試補ノ命ヲ承ケ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習セサル者ハ試補ヲ免スヘシ

第四 普通試験

第三十一條 中央官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官廳ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々其官廳ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十二條 地方官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ又官廳ノ需ニ應シ府縣ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々普通試験委員長ヨリ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十三條 試験願書ハ本人自ラ之ヲ認メ其時々公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ普通試験委員長ニ差出スヘシ

- 一 出願者ノ履歷書
- 一 身分職業年齡及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十四條 普通試験ノ科目ハ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ普通試験委員之ヲ選定シ文官試験局長官ノ認可ヲ經テ試験ノ期日一箇月前ニ官報又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第五 判任官見習

第三十五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ニ及第シタル者ニ判任官見習ヲ命スヘシ

判任官見習ヲ命セラレタル者ハ所屬長官ノ指命スル所ニ就キ二箇年ヨリ短カラサル期限間事務ヲ練習シ判任官ノ缺員ヲ待テ本官ニ任セララルヘシ

第三十六條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ判任官見習ヲラントコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ添ヘ主務官廳ニ出願スヘシ
一 出願者ノ履歷書
一 卒業證書ノ寫
一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十七條 所屬長官ハ判任官見習官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタル者ト認ムルトキハ判任官見習ヲ免スルコトヲ得

第三十八條 本令施行ノ前二箇年以上各官廳ニ於テ雇員トナリタル者ニシテ事務ニ熟練シタル者ト本屬長官ニ於テ認ムルトキハ試験ヲ要セス直ニ判任官ニ任スルコトヲ得

第三十九條 本令ハ明治二十一年一月ヨリ施行ス
〔二〕文官試補及見習ヲ命セラレタル者待遇方 公布
朕試補及見習ノ待遇並ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽
明治二十年十一月五日
内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第五十七號
本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則ニ據リ試補見習ヲ命セラレタル者ノ待遇ハ試補ヲ奏任トシ見習ヲ判任トス
同則ニ據リ試補及見習ヲ本官ニ任用スルニハ試補ハ奏任官四等以下トシ見習ハ判任官五等以下トス

〔二〕學務及學術技藝ニ關スル行政官任用ノ件 公布
朕教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ行政官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽
明治二十年十一月五日
内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第五十八號

各般ノ學務及特別ノ學術技藝ニ關スル行政官ハ教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ之ニ任用スルコトヲ得

〔三〕陸海軍士官並同等官以上試験ヲ要セス文官ニ任用方明治二十年十二月二十六日公布

朕陸海軍士官並同等官以上ノモノ文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年十二月二十五日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第六十三號

陸海軍士官並同等官以上ノモノハ更ニ試験ヲ要セス文官ニ任用スルコトヲ得

〔四〕判任官高等試験ヲ受ケ本官ニ任スルノ件明治二十年十二月二十六日公布

朕判任官高等試験ヲ受クルコトヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年十二月二十五日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第六十四號

本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則施行ノ後五箇年間又ハ五箇年以上官務ニ従事シ判任官五等以上ニ叙セラレタル者ハ同則第十七條第五項ニ準シ高等試験ヲ受クル

〔五〕海軍准士官並服役滿期ノ下士試験ヲ要セス判任官ニ任用方明治二十年十二月二十六日公布

コトヲ得其當選シタル者ノ本官ニ任スルハ同則第二十九條ニ據ル

朕海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年十二月二十五日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第六十五號

海軍准士官並服役滿期ノ下士ハ普通試験ヲ要セス海軍省遞信省鐵道局ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

〔六〕三等郵便局長採用方法明治二十年十二月二十六日公布

朕三等郵便局長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年十二月二十五日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第六十六號

三等郵便局長ハ其地ニ在住シ相當ノ資産アル者ヲ選任スルノ必要アルヲ以テ遞信大臣別ニ採用規則ヲ定メテ之ヲ選任スヘシ但該規則ニ依リ選任シタル三等郵便局長ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

〔七〕營林主事補及森林監守任用方

明治二十年十二月二十九日公布
勅令第八十二號

朕營林主事補及森林監守任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年十二月二十八日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第八十二號

林區署所在地ニ居住シ近接森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習ニ通曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スルノ必要アルトキハ農商務大臣定ムル所ノ採用規則ニ依リ之ヲ選任スルコトヲ得但該規則ニ依リ選任シタル營林主事補及森林監守ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

〔八〕陸軍下土文官採用規則

明治二十年十二月二十九日公布
勅令第八十三號

朕陸軍下土文官採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年十二月二十八日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第八十三號

陸軍下土文官採用規則

第一條 陸軍下土ニシテ左ニ掲グルモノハ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得
一 戰役若クハ公務上ノ傷痕疾病ニ因リ免官シ尙文官ノ勤務ニ堪ル者

二 再服役以上滿期ノ下土ニシテ精勤證書ヲ所持スル者

第二條 陸軍下土ハ本人ノ請願ニ因リ試験ヲ要セスシテ判任官トナルコトヲ得

第三條 海軍省ヲ除クノ外各官廳ニ於テ判任官ヲ任用スルニハ少クモ五人ニ付一人ハ陸軍下土ノ文官請願者ヲ以テヌ可キモノトス

第四條 文官タランコトヲ欲スル者ハ服役滿期前六箇月間又滿期若クハ免官後十二箇月

間ニ之ヲ請願スヘシ

第五條 請願者ニ於テ教官技術官タランコトヲ望ム者アルトキハ之ヲ採用セントスル官

廳ニ於テ相當ノ試験ヲ施行スルコトヲ得

第六條 請願者ノ名簿ハ本人請願ノ順序ニ從テ調製シ之ヲ陸軍省ニ備置ク可シ

第七條 請願者ノ採用ハ其同年内ニ係ルモノハ第一條各項ノ順序ニ從ヒ其同項内ニ於テ

ハ服役時日ノ多キ者ヨリ採用シ其服役時日ノ同シキ者ハ請願時日ノ順序ニ從ヒ採用ス

可シ

第八條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用スルハ陸軍省ニ照會シ直ニ本人ヲ其廳ニ呼出ス可

シ

第九條 陸軍省ニ於テハ前條ノ照會ニ依リ第七條ニ照シ請願者ノ氏名及履歷書ヲ其官廳

ニ交付ス可シ

第十條 請願者ニ於テ其請願ヲ取消サント欲スルトキハ陸軍省ニ届出可シ

第十一條 本則施行ニ要スル細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム可シ

〔九〕理事主理試験及試補ノ事務練習方 明治二十一年三月十六日公布
勅令第十號

朕理事主理ノ試験及試補ノ練習ニ關スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十一年三月十五日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第十號

理事及主理ハ高等試験ニ於テ司法官ノ例ニ依リ理事試補ハ陸軍省若クハ陸軍軍法會議主
理試補ハ海軍省若クハ海軍軍法會議ニ於テ二年以上事務ヲ練習セシム

〔十〕二等電信局長選任及手當支給方 明治二十一年六月十四日公布
勅令第四十五號

朕二等電信局長ノ選任及手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十一年六月十三日

内閣總理大臣伯爵黑田清隆
遞信大臣子爵榎本武揚

勅令第四十五號

二等電信局長ハ二等郵便局長ノ例ニ依リテ選任シ手當ヲ支給スヘシ

〔十一〕文官試験試補及見習規則ニ關スル細則ヲ定ム 明治二十年七月二十三日(同廿五日公布)
勅令第三十八號

勅令第三十七號文官試験試補及見習規則ニ依リ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

文官試験試補及見習規則ニ關スル細則

第一條 高等試験ハ左ノ科目中司法官ハ五科目以上行政官ハ三科目以上ヲ以テ試験ヲ行フノ定限トシ試験ノ期日及場
所ト共ニ三箇月以前ニ文官試験局長官報ヲ以テ之ヲ公告ス

司法官ノ試験ハ一二三四五六ノ科目中ニテ試験ヲ行フノ科目ヲ定メ行政官ノ試験ハ二三四ノ科目ヲ除キ自餘ノ科
目中ニテ試験ヲ行フノ科目ヲ定ム

- 一 民法
- 二 訴訟法
- 三 刑法
- 四 治罪法
- 五 商法
- 六 憲法
- 七 行政
- 八 財政
- 九 理財
- 十 國際法

第二條 前條ノ科目中本邦ニ成典アルモノヲ除クノ外ハ受験人ハ豫メ文官試験局長官ノ許可ヲ得タル外國ノ書籍ニ依
リ試験ヲ受クルコトヲ得

第三條 高等試験ハ國語及漢字交リノ文ヲ以テ之ヲ行フ特ニ外國語及外國文ヲ以テ試験ヲ受ケンコトヲ願フ者ハ豫メ
文官試験局長官ノ許可ヲ受クヘシ

第四條 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則第三條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技藝

ヲ要スル者ノ試験ヲ爲ストキハ其試験ノ科目ハ試験ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前ニ文官試験局長官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第五條 高等試験ハ勅任官ニシテ文官試験局長官ノ許可ヲ得タル者ノ外傍聴ヲ許サス

第六條 筆記試験ハ受験人總員ヲ一室又ハ數室内ニ閉鎖シ一室毎ニ試験委員一名監視シテ之ヲ行フヘシ但受験人一名ナルトキハ試験委員二名監視スルヲ要ス

第七條 筆記試験ノ問題ハ試験局長官定ムル所ノ方法ニ依リ各受験人ヲシテ之ヲ知悉セシメ豫定ノ時間内ニ答辨書ヲ提出サシムヘシ

第八條 筆記試験ノ問題ノ數ハ各科目ニ付試験委員ノ議定シタル所ニ依ル

第九條 試験室ニ備ヘ置クヘキ必要ノ參考書類ハ法律類集官報其他公然ノ法律ニ限ル

第十條 口述試験ハ筆記試験ヲ終リタル後試験委員長ノ上席ヲ以テ試験委員總員ノ列席ニ於テ受験人一名毎ニ試問シテ即時答辨ヲ爲サシムヘシ

第十一條 口述試験ハ各受験人ニ付半時間以上一時間以内トス

第十二條 高等試験ハ受験人ノ果シテ學理上ノ原則ニ通曉スルヤ現行ノ法律命令ヲ解得スルヤ又法律命令ヲ實務ニ應用シ及之ヲ口述スルニ確實敏捷ナルヤ否ヲ試験スルヲ以テ目的トスヘシ

第十三條 高等試験ヲ經タル各科目ノ點數及其全體ノ効果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ試験委員ノ議定シタル平均點數ニ依ル

第十四條 當選者ハ各合格者ニ就キ試験委員長ノ具狀スル所ニ依リ各官廳ノ需要ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ之ヲ定ム

第十五條 前條ノ合格者中ヨリ當選者ヲ查定スルハ其試験ヲ行ヒタル日ヨリ四週間以内ニ之ヲ結了シ官報ヲ以テ其姓名ヲ公告スヘシ

第十六條 試験委員長ハ試験委員ノ職務ニ關スル議決ノ數ニ入ラス若シ其議決ニ關シ試験委員ノ説可否相半スルトキハ試験委員長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 受験人ハ其試験ヲ受クルノ際試験手續ニ關スル規則及試験委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ監視ノ試験委員ニ於テ退室ヲ命シタルノ後之ヲ試験委員長ニ報告シ其試験ヲ拒ムコトヲ得

第十八條 高等試験ノ手續ニ關スル細目ハ文官試験局長官ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 普通試験ニ關スル細目ハ文官試験局長官ノ認可ヲ經各官廳ノ普通試験委員ノ定ムル所ニ依ル

〔十二〕高等試験及實務練習ヲ要セス司法官ニ任スルノ件 明治二十年七月二十三日(二十五日公布) 閣令第十九號

〔十三〕郡區長ノ試験科目ハ内務大臣指定スル所ニ依ル 明治二十年七月二十五日(同二十五日公布) 閣令第二十號

〔十四〕在職判任官ニテ直ニ本官ニ任スル年限 明治二十年十一月七日(同月八日公布) 閣令第二十三號

〔十五〕文官試験補見習規則中司法省舊法學校正則部卒業生ニ適用方 明治二十年十二月二十一日 閣令第二十五號

明治二十年七月勅令第三十七號文官試験補及見習規則第一條第三條及第二十三條中舊東京大學法學部卒業生ニ關スル

規定ハ司法省兼注學校正副部卒業生ニモ適用スルモノトス

〔十六〕技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者任用方 明治二十年十二月二十八日(同廿九日公布) 閣令第二十八號

本年七月勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則第二十條ニ據リ別段ノ試驗法ヲ定ムルマテハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者ヲ任用スルニハ左ノ例規ニ依ルヘシ

一 委任官ハ本則第三條ニ準シ各種ノ學術技藝ニ就キ一定ノ資格アル者又ハ第十七條ニ準シ其經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認ムヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書ノ寫身分年齡等豫メ文官試驗局長ノ銓衡ヲ經テ後各省大臣ヨリ奏明ノ手續ニ及フヘシ

一 判任官ハ本則第四條ニ準シ各種ノ學術技藝ヲ修メ一定ノ資格アル者ヲ命シ其他ノ者ハ經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認ムヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書ノ寫身分年齡等豫メ普通試驗委員長ノ調査ヲ經テ之ヲ命スヘシ

本年七月勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則其他之ニ關スル法令中試驗ニ關スル條項ノ外道則試補判任官見習ニ就キ規定シタルモノハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スルモノニモ適用スルモノトス

〔十七〕北海道郡區長試驗ヲ要セス判任官ヨリ任用方 明治二十二年一月二十五日 同二十六日公布 閣令第三號

北海道郡區長ハ當分ノ内三箇年以上北海道郡區ノ官務ニ從事シ判任官五等以上ニ叙セラレ現ニ在官セル者ニ限リ試驗ヲ要セス郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ郡區長ニ任スルコトヲ得

〔十八〕高等商業學校卒業證書ヲ有スル者判任官見習ニ任用方 明治二十二年三月二十一日公布 閣令第十號

高等商業學校主計專修科ノ卒業證書有スル者普通試驗ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命スルコトヲ得

〔十九〕郡區長ノ試驗ニ關スル條規ヲ定ム 明治二十年十二月二十九日 內務省令第五號

第一條 郡區長ノ試驗ハ左ノ科目ヲ以テ內務省ニ於テ之ヲ行フ

- 一 就職スヘキ地方ノ風土慣例及物産
- 一 郡區長職務ニ必要ナル法令
- 一 郡區長職務ニ關スル公文ノ立案

第二條 郡區長ノ試驗ヲ受クルハ滿三十年以上ノ者タルヘシ但該地方ニ於テ五箇年以上委任官又ハ郡區長ノ職ヲ奉シタル者ハ此限ニアラス

第三條 試驗出願者ハ願書ニ就職スヘキ地名ヲ記スシ履歷書ヲ取添ヘ北海道廳又ハ府縣廳ヲ經テ試驗委員長ニ差出スヘシ

第四條 試驗委員ハ內務大臣內務省ノ高等官若クハ他官廳ノ高等官ヨリ選テ之ヲ命シ又ハ囑託シ內務省總務局長ヲ以テ委員長トス

第五條 試驗委員ハ必要アル場合ニ於テハ問題ヲ選定シテ北海道廳長官府縣知事ニ送付シ該地方高等官三名以上ノ列席ニ於テ其應答ヲ爲サシムルコトヲ得

第六條 試驗ノ手續ニ關スル細目ハ試驗委員長ノ定ムル所ニ依ル

〔二十〕陸軍下士官採用細則 明治二十一年二月二十三日 陸軍省令第二號

陸軍下士官採用細則

第一條 本則トアルモノハ陸軍下士官 第一條ニ因リ文官奉職ヲ請願セント欲スル者ニシテ第一項ニ該當スル者ハ官採用規則ヲ云フ以下倣之

第一書式第二項ニ該當スル者ハ第二書式及第三書式ニ據ルヘシ
第一書式 料紙美濃紙 以下倣之

其儀

其戰役公務上ノ傷疾疾癒ニ因リ過ル年月日免官相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書ニ記載シテ正並ニ診斷書ヲ附シテ提出スルモノヲ云フ
相成度別紙履歷書ニ記載出スヘシ以下履歷書トアルモノノ做之
道廳府縣郡區町村落籍
元何官
姓名印
年號月日生
年號月何年何箇月

年月日

陸軍大臣爵姓名殿

年月日

第二書式

某儀

來ル(過ル)年月日現役滿期相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書並ニ精勵證書寫相添此段奉願候也
兵種隊數(所管)豫備役後備軍(職員)
官姓名印
年號月日生
年號月何年何箇月

年月日

(所管長官)

職官姓名殿

廿一年法律第
一號市町村制
施行ノ地ハ戶
長消滅ス

第三書式

某儀

過ル年月日現役滿期相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書並ニ精勵證書寫相添此段奉願候也
道廳府縣郡區町村落籍
元何官
姓名印
年號月日生
年號月何年何箇月

年月日

陸軍大臣爵姓名殿

前書之趣調査候處相違無之候也

道廳府縣郡區町村落籍

姓名印

年月日

第二條 本則第五條ニ因リ教官技術官タラントヲ望ム者及其官廳ニ限リ奉職センコトヲ望ム者ハ其志願ノ廳名ヲ願書中ニ記載シ又教官技術官志願ノ者ニ在テハ其習得セシ學術ヲ履歷書中ニ記載シテ提出ス可シ
但教官技術官タルノ志願ヲナシ合格セサル者ハ更ニ普通判任官タルヲ請願スルコトヲ得

第三條 本則第一條ノ資格ヲ有スト雖モ服役以來左ノ項目ニ觸ル、者ハ請願スルヲ得ヌ又既ニ請願ノ者ハ其請願無効ニ屬ス
一 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者
一 賭博犯ニ付懲罰ニ處セラレタル者

第四條 本則第一條ニ因リ請願スル者アルトキハ所管長官又ハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ其請願書類ヲ審査シ陸軍

第一類 第六章 官吏任用

大臣ニ進達ス可シ

第五條 本則第五條ニ因リ各官廳ニ於テ試験ヲ爲セシトキハ其試験ノ科目及ヒ合格不合格ノ旨ヲ直ニ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第六條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用セシ上ハ直ニ其官等ヲ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第七條 教官技術官クランコトヲ望ム者受験ノ爲メ官廳ニ往復スル旅費ハ總テ自辨タルヘシ

第八條 本則第十條ニ因リ其請願ヲ取消サント欲スルトキ又ハ請願者ノ身上ニ異動ヲ生シ或ハ轉居轉籍若クハ感刑等ニテ履歴上改正ヲ要スルコトアルトキハ其旨ヲ詳記シ最初願出ノ手續ニ因リ届出ツ可シ

〔廿一〕營林主事補及森林監守特別採用規則ヲ定ム

明治二十一年四月二十日 農商務省令第三號

明治二十年勅令第八十二號ニ據リ營林主事補及森林監守特別採用規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

營林主事補及森林監守特別採用規則

第一條 林區署所在地方ニ居住シ近接森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習ニ通曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スヘキ必要アルトキハ左ノ科目ニ就キ試験ヲ行フ

- 一 作文 公文類
 - 二 筆寫 楷行ノ内
 - 三 算術 加減乘除
 - 四 就職スヘキ林區署所在地方ノ地理慣例及森林ノ狀況
 - 五 圖畫 地圖但受験者ノ望ニ依リ之ヲ試験ス
- 第二條 試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ丁年已上ノ男子ニシテ就職スヘキ林區署所在地方ニ適當ノ期間間居住シタル者ニ限ル
- 第三條 當選者ハ先ツ見習ヲ命シ缺員アルヲ待テ本官ニ任スルモノトス

但見習ヲ命シタル者ニハ十圓已下ノ月俸ヲ給スルコトアルヘシ

第四條 試験ハ大林區署ニ於テ大林區署長ノ指定シタル署員二名已上ヲシテ之ヲ行ハシム

第五條 試験ノ期日ハ大林區署長之ヲ定メ試験期日一箇月前ニ當該林區署所在地ノ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第六條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験期日七日前マテニ履歴書ヲ添へ願書ヲ當該大林區署ニ差出スヘシ其願書履歴書ハ第一號及第二號書式ニ據ルヘシ

第七條 試験ノ問題及試験日時ハ大林區署長方法ヲ一定シテ各受験人ニ知悉セシムヘシ

第八條 試験ハ筆記及口述ノ二様トス筆記試験ハ豫定ノ時間内ニ答辨書ヲ差出サシメ口述試験ハ即時ニ答ヘシム

第九條 試験各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ最上點トシ各科目ノ點數ヲ通計シ得ル所ノ和ヲ試験科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ諸科目平均點數トス諸科目平均點數ハ六十點ヲ以テ最下限トシ一科目ノ點數五十點未滿ナルトキハ合格者トスルコトヲ得ス

第十條 試験ヲ經タル各科目ノ點數及其全體ノ效果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ大林區署長上席ヲ以テ試験ニ列席シタル署員ノ議定シタル平均點數ニ據ル

第十一條 大林區署長ハ試験ノ終リタル後二週間已内ニ各科目試験ノ成績ヲ取調ヘ其需要ニ應シ人員ヲ限リ合格者中ヨリ選拔シテ當選者ヲ定メ應答ノ書類ヲ添付シテ上申スヘシ

第十二條 此規則ニ掲グルモノノ外試験ニ關スル手續ハ大林區署長ノ定ムル所ニ據ル

第一號書式

試験願書式

用紙美濃紙字體楷行ノ内(一通)

受験願

族籍戸主又ハ何某嗣子二三男兄弟等ノ別

私儀(營林主事補)(森林監守)志願ニ付御試験被下度別紙履歴書及兵役ニ關スル證明書相添へ此段奉願候
年月日
職業 姓名
生年月

現任所
姓名印

第二號書式
履歴書(用紙美濃紙一通)
(何)大林區署長誰某殿

何府縣華士族平民
姓名
生年月

本籍
一何府縣何國何郡何町村何番地戸主又ハ何其男兄弟伯叔父等 現ニ本籍地ニ居住スルトキハ(現今本地ニ居住)ノ
現今寄留地
一何府縣何國何郡何町村何番地(何其方)寄留
住所ノ移動
一何年何月何日何地ニ生レ何年何月マテ居住
一何年何月何地ニ移轉シ何年何月マテ居住
右ハ居住ヲ移轉スル毎ニ之ヲ記スヘシ

學事

一何年何月ヨリ何地何某ニ就キ又ハ官公私立何學校ニ於テ何學ヲ修メ何年何月ニ至ル所修ノ科目大略何々
一何年何月ヨリ何地官公私立學校ニ入り何學科ヲ修業シ何年何月卒業ス其證書ノ寫別紙ノ如シ修業何年何月間ニシテ
其科目ハ何々
一何年何月何地何學校若クハ其他ニ於テ何々ノ試験ヲ受ケ及第ス其證書若クハ免許狀ノ寫別紙ノ如シ受験ノ科目ハ何
々

職業

一何年何月何日官公私立何學校何科教員トナリ教授ニ從事シ何年何月辭職其間何々ヲ兼勤シ何々ノ事務ニ從事ス以上
ノ辭令左ノ如シ
此所ニ辭令ノ全文ヲ各通トモ掲クヘシ又私立學校等ニテ辭令ナキモノハ其俸給等ヲ本文ニ記スヘシ
一何年何月何官廳ニ於テ何々拜命何年何月マテ何々ノ事務ニ從事シ何年何月辭職以上ノ辭令左ノ如シ

辭令ノ全文ヲ掲クヘシ

一何年何月ヨリ何地會社ニ備ハレ(給料何圓)何々ノ業務ニ從事シ何年何月ニ至テ解僱其間給料ノ増減
一何年何月ヨリ何年何月マテ何業ニ從事
一何年何月ヨリ何々ノ著譯ニ從事シ何年何月ニ至ル其著譯スル所ノ書名左ノ如シ
著譯書名ヲ掲クヘシ但洋書ハ其原名ヲモ記スヘシ

賞罰

一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ノタメ賞ヲ受ケ其辭令左ノ如シ
辭令全文ヲ掲ケ辭令ナキモノハ本文中ニ受賞ノ事由ヲ記スヘシ
一何年何月何地ニ於テ何々事由ノタメ罰ヲ受ク

第一類 第六章 官吏任用

辭令アルモノハ各其全文ヲ掲ク辭令ナキモノハ本文中ニ其事由ヲ記シ又裁判所ノ宣告書ハ其要ヲ記スヘシ總テ罰
ハ其受罰ノ日收料罰金ノ額等ヲ記スヘシ
身代限ノ有無

一何年何月何地ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケ(身代限ノ處分ヲ受ケタルコトナシ)
右ノ處分ニ付裁判所ノ申渡ヲ記スヘシ

年月日

右
姓 名 印

履歷書ハ楷書又ハ行書ニテ明瞭ニ記スヘシ

〔廿二〕三等郵便局長採用規則ヲ定ム 明治二十一年四月二十七日
逓信省令第二號

明治二十年 勅令第六十六號ニ據リ三等郵便局長採用規則左ノ通之ヲ定ム

三等郵便局長採用規則

第一條 三等郵便局長ハ左ノ各款ヲ具備スル者ヨリ之ヲ採用スヘシ

第一款 其三等郵便局所在地ニ在在スル者

第二款 實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者

第三款 日常ノ算筆ニ通スル者

第四款 別ニ定ムル三等郵便局長服務規約ヲ遵奉スル者

第五款 年齢滿二十年以上ノ男子

第二條 該實ニ職務ヲ奉シタル三等郵便局長老年又ハ疾病其他ノ事故ニ依リ其職ヲ辭スルカ或ハ在官中死亡セシトキ
其嗣子又ハ相續人タル男子年齢滿十六年以上ニ及ブモノハ第一條第五款ノ制限ニ拘ハラズ特ニ採用スルコトアルヘ
シ

第三條 非戸主ニシテ其戸主實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者保證スルニ於テハ其本人ノ資産第一條第二
款ニ適合セサルモ特ニ之ヲ採用スルコトアルヘシ

〔廿三〕東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者逓信技手ニ任用方 明治二十一年五月二十八日(同二十
九年第八號)

東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ逓信技手ニ任スルコトヲ得

〔廿四〕二等郵便局長採用ニ關シ郡區長戶長處辨方 明治二十一年五月一日
逓信省訓令第三號北海道廳府廳

三等郵便局長ノ採用ニ關シ郡區長戶長ハ逓信管理局長ノ照會又ハ依託ニ應ジ便宜處辨候補豫メ郡區長戶長ニ達示スヘシ

〔廿五〕三等郵便局長採用手續 明治二十一年五月一日
逓信省訓令第四號逓信管理局

三等郵便局長ヲ採用スルトキハ左ノ手續ニ依リ之ヲ執行スヘシ

第一條 三等郵便局長ノ採用ヲ要スルトキ逓信管理局長ハ三等郵便局長採用規則ニ合格スルモノ、中ニ就キ郵便事務

ニ適當ナリト認ル者ヲ撰出シ被撰人ノ諸否及身元引受人ノ有無ヲ取調履歷書(書式)ヲ添ヘテ之ヲ推薦スヘシ

但辭職出願者又ハ死亡者若クハ犯罪ニ依リ官職ヲ失ヒタル者アルトキ後任ヲ要スル場合ヲ除ク外ハ本大臣ノ指揮ヲ

待テ後選出スヘシ

第二條 逓信管理局長ハ時宜ニ依リ三等郵便局長ノ選出ヲ郡區長ニ囑托スルコトヲ得

第三條 逓信管理局長ニ於テ三等郵便局長ノ任官辭令書ヲ傳達スルトキハ受書(書式)及身元引受人證書(書式)本人非戸

主ナルトキハ戸主ノ保證(書式)ヲ差出サシメ之ヲ本大臣ニ報告シ且採用ノ旨ヲ其地方長官及郡(區)長ニ通知スヘシ

其免官ノトキ亦同シ

第四條 三等郵便局長ヲシテ爲替又ハ貯金ヲ取扱ハシムルトキハ逓信管理局長ニ於テ別ニ定ムル規程ノ保證品ヲ徵收

スヘシ

第五條 被選人ヨリ差出シタル書類及前條ノ保證品ハ逓信管理局ニ保管スヘシ

第一類 第六章 官吏任用

書式第一號

履歴書

道府縣華士族平民

姓名印

生年月日

本籍

道府縣何國何郡區何町村何番地戸主又ハ何某男兄弟伯叔父等ノ數字ヲ本項ニ加ヘ次項ノ現今寄留地ヲ省クヘシ

住所ノ移動

一何年何月何日何地ニ生レ何年何月何日マテ居住

戸籍ノ異動

一何年何月何日道府縣何郡區何町村何番地族籍某方ヘ養子入籍附籍等

兵役

一何年何月何日道府縣何郡區何町村何番地族籍某方ヘ從轉等異動アル毎ニ之ヲ記スヘシ

學事

一何年何月何日何地何某ニ就キ又ハ官公私立何學校ニ於テ何學ヲ修メ何年何月何日ニ至ル所修ノ科目大略何々

職業

一何年何月何日ヨリ何地官公私立何學校ニ入り何學科ヲ修業シ何年何月何日卒業ス其證書ノ寫別紙ノ如シ修業何年月間ニシテ其科目ハ何々

著譯

一何年何月何日ヨリ何業ヲ管ム(何業ヲ兼テ管ム)

官職

一何年何月何日ヨリ何業ヲ管ム(何業ヲ兼テ管ム)

賞罰

一何年何月何日ヨリ何業ヲ管ム(何業ヲ兼テ管ム)

身代限

一何年何月何日何地ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケ何年何月何日負債辨償(身代限ノ處分ヲ受ケタルコトナシ)

第一類 第六章 官吏任用

右ノ處分ニ付裁判所ノ申渡ヲ記スヘシ

年月日

何逕信管理局長姓名殿

書式第二號

御請書

(此ニ辭令書ノ通リ記載ス)
右御請仕候以上

年月日

逕信大臣姓名殿

書式第三號

印紙

身元引受證書

何國何郡區何町村何某三等郵便局長ニ御採用ニ付身元引受ニ相立候ニ付テハ三等郵便局長身元引受人御規則ニ從ヒ誠實ニ其責任ヲ盡シ可申候仍テ證書差上候也

年月日

道府縣何國何郡區何町村何番地在

戶主

族籍職業

姓名印

右 姓名印

三等郵便局長 姓名印

書式第四號

何逕信管理局長姓名殿

印紙

保證書

今般私長次明何某三等郵便局長拜命候ニ付テハ本人奉務中御局ニ對シ万一上納金其他官物等ニ付辦償可仕願相生候節ハ本人ハ勿論私ノ財産ヲモ盡シ辨納可仕候仍テ證書差上候也

道府縣何國何郡區何町村何番地在

戶主

族 職業

姓名印

年月日

何逕信管理局長姓名殿

● 同指令

● 巡查雇員ヨリ警部補又ハ判任官ニ採用方何指令 明治二十年十一月二日 長野縣令

第一條 本年勅令第三十七號第三十八條ニ依ルトキハ本令施行ノ前二箇年以上各官廳ニ於テ雇員トナリタルモノニシテ事務ニ熟練シタル者ト本廳長官ニ於テ認ムルトキハ試験ヲ要セス直ニ判任官ニ任スルコトヲ得ル義ニ有之候處警察官吏中巡查ノ如キハ無論雇員以上ノ資格ニシテ執ル處ノ事務モ亦警察官ヲ補佐スルモノナレハ本職ニ從事スル二箇年ヲ經タルモノハ雇員同様判任官(警部警部補)ニ採用不審哉
第二條 前條勅令明文中單ニ二箇年以上云々ト有之候處一日雇員タリシモノニシテ退職後數年間ヲ經タリト雖モ事務熟練ノ者ト見込トキハ試験ヲ要セス採用不審哉又雇員タリシ者中途職ヲ停メ一期二箇年ニ及ハサルモ前後

ノ就職併セテ二箇年ニ至ル者ハ前同様資格アルモノトシ可然哉
 第三條 第一條巡査ヨリ警部補已上ニ採用不著者トセハ例ヘハ巡査タルコト一年又ハ警部警部補タルコト一年雇員タルコト一年併テ二箇年ニ滿ソルモノハ該資格アルモノト認メ可然哉
 第四條 明治十九年内閣達第十三號ニ巡査奉職滿九年已上十二年已下八月俸十二圓滿十二年已上八月俸十五圓ヲ給スルコトヲ得ト有之候處最初巡査ヨリ警部補ニ昇進シ再ヒ巡査ト相成タルモノ又ハ他ノ判任官例ヘハ檢事補又ハ看守長タリシ者爾後巡査ヲ奉職シ前後併セテ九箇年若クハ十二箇年ノ勤續ニ至リタルモノモ矢張前同様ノ資格アルモノト認メ可然哉

内務省指令 明治二十年十一月二十九日

- 第一條 伺ノ道
- 第二條 三十八條ヲ適用スヘキモノニアラス
- 第三條 現ニ就職スルモノハ伺ノ道
- 第四條 他ノ職務ヲ奉シタル年月ハ算入スヘキモノニアラス

第三十四 舊海陸軍刑律ニ依リ文武及武官等ニ補スルヲ禁セラレタル者解禁ノ年限ヲ定ム
明治十八年六月十三日 太政官布達第十二號
 舊海陸軍刑律ニ依リ奪官及ヒ回籍ノ刑ニ該リ文武大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレ又ハ武官大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレタル者宣告ノ日ヨリ五年ヲ過クルノ後悔改ノ情狀ニ因リ禁ヲ解クコトアルヘシ
 右布達候事

(一) 官吏辭職後再就職ノ年限ヲ定ム
明治二十年四月十九日 閣令第九號各官廳
 各官廳ニ奉仕スル官吏ニシテ辭職シタル者ハ辭職後滿一年ヲ經過シタル後ニ非サレハ再ヒ就職スルヲ許サス且官等俸給共ニ前官ニ超越スルヲ得ス
(二) 辭職ノ官吏再就職ノ制限適用方
明治二十一年四月二十六日 閣令第九號發布當日以前ニ辭職シタル官吏ハ本令ヲ適用スルノ限ニアラス

第三十五 陸軍武官進級條例改正
明治十九年七月二十六日公布 勅令第五十八號

朕陸軍武官進級條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年七月二十四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
 陸軍大臣伯爵大山 巖

勅令第五十八號

陸軍武官進級條例

第一章 軍級

第一條 凡軍級ノ最モ高キ者ヲ將官ト云ヒ之ニ次ク者ヲ佐官或ハ上長官ト云ヒ又之ニ次ク者ヲ尉官或ハ士官ト云フ而シテ三官各分テ三級トナス即チ大將中將少將大佐中佐少佐大尉中尉少尉是ナリ之ヲ總稱スルトキハ將校ト云フ

第一類 第六章 官吏任用

第二條 其將校ニ次ク者ヲ下士ト云フ即チ曹長一等軍曹二等軍曹是ナリ
第三條 其下士ニ次ク者ヲ兵卒ト云フ即チ上等兵一等卒二等卒是ナリ

第二章 進級

第四條 凡軍人ノ進級ハ決シテ超級ノ陞進ヲ許スコトナク又缺員ナキ時ハ除任ヲ行フコトナシ

第五條 逐級歷進ノ法上ノ級次ニ從フト雖モ出身又ハ陞級ノ後其月日猶淺キ者ハ遽ニ昇進スルヲ許サス之カ爲メニ最下ノ期限ヲ定メ以テ歷進ノ道ヲ律ス即チ左ノ如シ

上等兵ヨリ二等軍曹ニ二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ進ムハ實役停年半年以上一等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ實役停年一年以上曹長ヨリ少尉ニ進ムハ實役停年一年以上

少尉ヨリ中尉ニ中尉ヨリ大尉ニ進ムハ實役停年二年以上大尉ヨリ少佐ニ進ムハ實役停年四年以上

少佐ヨリ中佐ニ進ムハ實役停年二年以上中佐ヨリ大佐ニ大佐ヨリ少將ニ進ムハ實役停年二年以上

少將ヨリ中將ニ進ムハ實役停年三年以上
第六條 中將ノ大將ニ進ムハ歴戰者ニ就キ特旨ヲ以テ親任スルヲ例トス故ニ最下ノ期限ヲ定ムルコトナシ

第七條 戰時ニ在テハ各官ノ實役停年ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第八條 進級ノ法ニアリ一ヲ停年補除ト云ヒ一ヲ拔擢補除ト云フ參互之ヲ用フ其法左ノ如シ

上等兵ヨリ二等軍曹ニ二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ二等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ皆拔擢ヲ以テス

少尉ヨリ中尉ニ進ムハ停年三分二拔擢三分一ヲ以テス
中尉ヨリ大尉ニ進ムハ停年拔擢相半ス

大尉ヨリ少佐ニ少佐ヨリ中佐ニ中佐ヨリ大佐ニ大佐ヨリ少將ニ少將ヨリ中將ニ進ムハ皆拔擢ヲ以テス

第九條 監督軍吏軍醫獸醫部ノ上長官士官下士並砲工兵監護陸軍諸工長同下長及ヒ諸卒モ亦本令ニ照シ其等級ニ準シテ進級ヲ律ス

第十條 平時少尉ノ進級ニ停年補除三分ノ二ヲ用フルノ例戰時ニ在テハ拔擢停年相半スルノ格ヲ用ヒ中尉以上ハ概シテ拔擢ノ例ヲ用フルコトヲ得

第十一條 左ニ掲グル場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ據ルコトナク進級セシムルコトヲ得
一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將ノ命令ヲ以テ之ヲ全軍ニ布告セシモノ

一 戰時敵前ノ軍隊ニ在テ人員多ク缺耗シ補除定規ヲ履ム能ハサル時
第十二條 將校敵ノ捕虜トナルモ正當ノ理由アルモノハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第三章 會議

第一類 第六章 官吏任用

第十三條 上長官士官ノ進級順序ヲ定ムル爲メ毎年定期檢閲畢ルノ後陸軍大臣ハ同次官參謀本部長會計局長醫務局長陸軍省ニ會同シテ決定候補名簿ヲ作ルモノトス

第十四條 此名簿ヲ作ルノ法其上長官ニ在テハ候補名簿ニ就キ陸軍大臣之ヲ決シ停年順序ヲ以テ其列序ヲ定メ其士官ニ在テハ各兵科毎ニ同級合格者ヲ合シ停年順序ヲ以テ其列序ヲ定ム

第十五條 下士ノ進級順序ヲ定ムル爲メ毎年定期檢閲畢ルノ後各長官ハ委員ヲ會同シ之ヲ審議シ決定候補名簿ヲ作ルモノトス

第十六條 此名簿ヲ作ルノ法各隊毎ニ同級合格者ヲ合シ優劣ヲ比較シ以テ其列序ヲ定ム

第四章 補除

第十七條 教導團生徒ニシテ卒業試驗ニ合格ノ者ハ二等軍曹ニ任スルヲ例トシ團長ハ豫メ陸軍大臣ノ認可ヲ得テ之ヲ補除スルモノトス

第十八條 上等兵ノ二等軍曹ニ二等軍曹ノ一等軍曹ニ一等軍曹ノ曹長ニ任スヘキ者ハ該隊長決定候補名簿ノ列序ニ從ヒ其長官ニ除任ノ事ヲ申請スヘシ

第十九條 士官學校生徒ニシテ卒業試驗ニ合格ノ者ハ少尉ニ任スルヲ例トス校長ハ名簿ヲ陸軍大臣ニ呈シ大臣ヨリ除任ノ事ヲ奏上スヘシ

陸軍大學校卒業者ニシテ參謀職務適任證書ヲ有スル者拔擢セラルハトキハ決定候補名簿ニ登載スル候補者ニ先チ進級セシム但此特例ハ大尉ニ進ム迄ヲ限トス十九年十二月十五日(同十六日公布勅令第七十

八號ヲ以テ本項ヲ追加ス

第二十條 曹長ノ少尉ニ進級スルハ特例トス故ニ其功績拔群ニシテ士官タルノ學術ヲ有スルモノニ非サレハ此撰ニ當ルヲ得ス

第二十一條 將校ノ決定候補名簿ハ陸軍大臣ヨリ奏上シ置キ補除ヲ要スル毎ニ其列序ニ從ヒ士官ニ在テハ停年進級者ヲ參互シ除任ノコトヲ奏上スヘシ

第二十二條 將官ノ進級ハ上裁ニ出ツルト雖モ先ツ内旨ヲ陸軍大臣ニ諭シ然ル後除任スルヲ例トス

第二十三條 興軍ノ日ニ方リテ戰地ニ臨ムノ首將ニハ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシト雖モ其權限ハ上旨ニ出ルヲ以テ之ヲ本條例ニ掲ケス

第三十六條 海軍高等武官進級條例ヲ改正ス 明治二十二年三月七日公布 勅令第二十二號

朕海軍高等武官進級條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十二年三月五日

内閣總理大臣伯爵黑田清隆
海軍大臣伯爵西鄉從道

勅令第二十二號

第一類 第六章 官吏任用

海軍高等武官進級條例

第一條 海軍高等武官トハ海軍少尉以上及其同等官ヲ云フ而シテ其少尉以上ヲ總稱シテ將校ト云ヒ其同等官ヲ總稱シテ准將校ト云フ

第二條 凡ソ進級ハ超級ノ陞進ヲ許スコトナク而シテ左ニ掲クル實役停年海上勤務ヲ經タル者ニアラサレハ陞進スルコトヲ許サズ又缺員ナキトキハ除任ヲ行フコトナシ

將校	准	將	校	實役停年 海上勤務中
少尉	少尉	少尉	少尉	三年以上
大尉	大尉	大尉	大尉	三年以上
少佐	少佐	少佐	少佐	三年以上
大佐	大佐	大佐	大佐	三年以上
少將	少將	少將	少將	三年以上

海上勤務トハ艦船ニ乗組ミ服務スルヲ云フ但機關大監軍醫大監主計大監大技監少技監大技士少技士及大藥劑官少藥劑官ハ海上勤務ヲ要セス

第三條 中將ノ大將ニ進ムハ歴戰者或ハ遠征ニ從事シタル者ニ就キ特旨ヲ以テ親任スルヲ例トス故ニ最下ノ期限ヲ定ムルコトナシ

第四條 大尉及同等官ノ奏任五等ヨリ四等ニ進ムハ實役停年最下期限ノ半數ヲ過キタル者

ニ就キ進等セシム大佐及同等官ノ奏任二等ヨリ一等ニ進ムモ亦同シ
奏任四等大尉及同等官竝ニ奏任一等大佐及同等官現役者ノ數ハ各官現員ノ半數ヲ過クルコトヲ得ス

第五條 初メテ大尉又ハ同等官ニ任シ奏任四等ニ叙セラレタル者實役停年海上勤務ノ各半數ヲ過キタルトキハ少佐又ハ同等官ニ進級セシムルコトヲ得初メテ大佐又ハ同等官ニ任シ奏任一等ニ叙セラレタル者ノ少將及同等官ニ進級スルモ亦同シ

第六條 大尉及同等官大佐及同等官ハ實役停年海上勤務最下期限ヲ超エタル者ト雖モ大尉及同等官ハ奏任四等ニ大佐及同等官ハ奏任一等ニ進ミタル後ニ非レハ進級セシムルコトヲ得ス

第七條 戰時ニ在テハ各官ノ實役停年海上勤務最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第八條 前諸條ノ進級進等ハ總テ拔擢ヲ以テス但停職中ノ者ハ進級進等セシムルコトヲ得ス

第九條 左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ラス進級進等セシムルコトヲ得

- 一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者
- 二 戰地ニ在テ人員缺乏ヲ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十條 海上勤務ノ者ニシテ公務ニ原因セサル傷痍疾病其他公務ニ非サル事故ニ依リ陸上ニ在ルノ日數ハ海上勤務ニ算入セス

第十一條 休職停職收禁及刑罰中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス但陸海軍將校分限令第四條
 第二項ノ第二第三第四及第六ニ因リ休職ニ入ル者ハ一箇年限リ算入スルコトヲ得
 第十二條 敵ノ捕虜ト爲ルモ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得
 第十三條 海上勤務最下期限ヲ終ラサレハ進級スルヲ得サルノ諸官ニシテ陸上勤務必要ナルヲ以テ海上勤務ヲ命セサル者ニ限り實役停年最下期限ヲ超ヘタルトキハ進級セシムルコトアルヘシ但陸上勤務ヲ要セサルニ至リ海上勤務ヲ命セラレ海上勤務最下期限ヲ終ラサル者モ亦同シ
 第十四條 海軍大臣ハ上長官士官進級順序ヲ定ムル爲メ各所管長官ヲシテ候補名簿ヲ出シシメ之ヲ將官會議ノ調査ニ付シ決定候補名簿ヲ作ルモノトス
 決定候補名簿ヲ作ルノ法ハ候補名簿中ヨリ進級セシムヘキ者ヲ撰拔シ停年順序ヲ以テ其列序ヲ定ム
 第十五條 海軍高等武官決定候補名簿ハ海軍大臣ヨリ奏上シ置キ補除ヲ要スル毎ニ其順序ニ從ヒ除任ノ事ヲ奏上スヘシ
 第十六條 准士官ハ士官ニ進級スルヲ得サルヲ例トスト雖モ志操確實士官タルニ堪ヘ且學術技藝拔群ノ者ハ臨時檢査ノ上士官ニ進級セシムルコトヲ得
 第十七條 進級ノ資格ヲ備ヘタル者ニシテ現役ヲ退キタルトキハ其際豫備又ハ後備ノ位置ニ於テ進級進等セシムルコトヲ得

第十八條 將官及其同等官ノ進級ハ上裁ニ出ルト雖モ先ツ内旨ヲ海軍大臣ニ下シ然ル後除任スルヲ例トス
 第十九條 典軍ノ日ニ方リ戰地ニ臨ムノ首將ニハ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシト雖モ其權限ハ上旨ニ出ルヲ以テ之ヲ本條例ニ掲ケス

●官吏服務紀律ニ係ル沿革要領

明治三年十二月二十日新律綱領ヲ頒布ス綱領中職制律ニ於テ官吏職務上ノ過失及私罪等ノ件ヲ掲ク○六年六月第二百六號布告ヲ以テ改定律例ヲ頒布ス○八年四月第六十五號達ヲ以テ官吏並其家族トモ前買ノ營業ヲ禁ス○九年四月第四十八號布告ヲ以テ新律綱領改定律例中職制律ヲ廢ス○十五年七月第四十四號達ヲ以テ行政官服務紀律ヲ定ム○同月第四十五號達ヲ以テ行政官服務紀律ハ司法官吏ニ適用セシム○二十年七月勅令第三十九號ヲ以テ更ニ官吏服務紀律ヲ改正ス

第三十七 官吏服務紀律ヲ改正ス 明治二十年七月三十日公布 勅令第三十九號

朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

御名 御璽

明治二十年七月二十九日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第三十九號

官吏服務紀律

第一類 第六章 官吏任用

第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得

第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹慎懇切ナルコトヲ務ムヘシ

第四條 官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ亦同様トス

裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限り供述スルコトヲ得

第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス

第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ルヘコトヲ得ス

第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得ス

第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其饗燕ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 官廳ノ工事ヲ受負フ者
- 一 官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者
- 一 官廳ノ補助金ヲ受クル起業者
- 一 官廳ノ用品ヲ調達スル者
- 一 官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス

第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 浪費シテ産ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ

第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乗船無賃乗車切符ヲ受クルコト

ヲ得ス
 第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レス

第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

官吏懲戒例沿革要領

明治九年四月第四十八號布告ヲ以テ新舊綱領改定律例中職制律ヲ廢シ自今官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ任シテ懲戒セシム○同月第三十四號達ヲ以テ官吏懲戒例ヲ定ム○十三年一月第四號達ヲ以テ前令中第四條ヲ改正ス

第三十八條 官吏懲戒例ヲ定ム 明治九年四月十四日 太政官達第三十四號院省使廳府縣

今般官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏懲戒例

第一條 自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ

第二條 懲戒ノ法三種トス第一誹責第二罰俸第三免職

第三條 誹責ハ懲戒ノ輕キモノトシテ本屬長官ヨリ誹責書ヲ付ス

第四條 罰俸ハ一月分拾分ノ壹ヨリ少カラス三月分ヨリ多カラサル俸ヲ奪フ

俸ヲ追スルノ法其一月俸給半額以下ハ一月俸中ニテ追了シ其以上ハ毎月給俸ノ半額ヲ領置シ數滿テ大藏省ニ送付ス十三年一月二十一日太政官達第四號ヲ以テ本條ヲ改正ス

第五條 懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本屬長官ノ意見ニ從ヒ其奏任ハ具狀奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム

但懲戒ニ由ルニアラスシテ免職スル者ハ長官旨ヲ諭シ本人ヨリ辭職ノ願ヲ差出サシメ然後ニ免許スヘシ

第六條 諸省長官ハ所屬奏判任官ヲ懲戒ス

第七條 府縣奏任官ハ〔太政大臣〕之ヲ懲戒ス〔府縣官判事ヲ兼ル者ノ其所屬判任官ニ於ケルハ他ノ奏任以上府縣官ノ協議ヲ得タル後之ヲ懲戒ス〕

第九條 府縣長官警視長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其誹責ヲ專行スルコトヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ內務卿ヘ届出ヘシ

〔府縣官判事ヲ兼ル者其所屬判任官ノ罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ司法卿ニ届出ヘシ〕

第十條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ本屬長官等ニ處スルコトヲ得ス

〔一〕官吏懲戒例ニ附屬ノ達明治九年六月八日 太政官達番外院省使廳府縣 本年四月第三十四號達官吏懲戒例ノ儀ニ付尚又左ノ通相達候事

文部省所轄
校教官給支
給方(第十七
ノ十八)ヲ定

第七條 優恩ニ由リ賜暇休養及ヒ暑中休暇ハ第五條及ヒ第六條ノ限ニアラス
第八條 兼官ノ増俸ハ其兼任廳經費ノ内ヨリ支給スルモノトス
第九條 各廳俸給ノ支給ハ左ノ日割ニ依ルモノトス但休日ニ當ルトキハ順延トス

四日 内閣 外務省 大藏省

五日 陸軍省 海軍省 文部省

六日 農商務省 逓信省 元老院

第十條 轉任ノ場合ニ於テハ發令ノ日マテ前任廳ヨリ其俸ヲ支給スルモノトス
第十一條 轉任ノ時前任廳ニ於テ俸給ノ過渡アルトキハ新任廳ヨリ直チニ之ヲ前任廳ニ返付ス

第十二條 降等減俸賜暇旅行病氣其他ノ事故ニ由リ俸給ヲ追徴スヘキモノアルトキハ次期ノ俸給ヨリ差引計算スルモノトス
第十三條 非職ノ時其追徴スヘキ金額ハ大藏省ヨリ裁キニ支給シタル官廳ニ返付シ大藏省ハ次期ノ俸給ヨリ差引計算スルモノトス

第十四條 會計ヲ異ニスル廳ヨリ官吏ヲ借用スルトキハ其間ノ俸給ハ日割ヲ以テ借用廳ヨリ該官吏所屬ノ廳ニ返付ス
第十五條 第五條ノ場合ト第六條ノ場合ト相續テ起ルトキ其第五條ニ始マリ第六條ニ終レハ其間通算シ九十日ノ後俸給ヲ減シ第六條ニ始マリ第五條ニ終レハ其間通算シ三十日ノ後俸給ヲ減ス

第十六條 日割計算ノ法ハ年俸十二分ノ一ヲ以テ一箇月分トシ其月ノ現日數ニ割合計算スルモノトス
第十七條 高等官俸給支給細則附則 明治十九年四月十四日 大藏省令第十五號

高等官俸給支給細則附則左ノ通相定ム
一新官制ニ依リ本年四月一日以前ニ任官ノモノハ總テ四月一日ヨリ起算シテ年俸ヲ支給ス同日以後任官ノモノハ其當日マテ其月ノ現日數ニ依リ日割ヲ以テ該官俸給ノ額ヲ支給シ其翌日ヨリハ新官ノ俸給ヲ支給スルコト本則第二條ニ

據ル但シ前官ナキモノハ總テ任官ノ翌日ヨリ起算シテ年俸ヲ給スルモノトス
一他所在勤又ハ出張ノ官吏ニシテ非職ヲ命セラレタルモノハ年俸ハ命令到達ノ日マテ在職俸ヲ支給ス
一他所在勤又ハ出張中廢官退官ノ時其命令到達ノ月マテハ尚ホ從前ノ俸ヲ給ス
一思引ニ由リ上廳スル能ハサル場合ニ於テハ本則第五條及第六條ノ日數ニ算入セス
一優恩ニ由リ賜暇休養暑中休暇及思引等ノ場合ト本則第五條第六條ノ場合ト相續スルトキハ其賜暇休養休暇又ハ思引ノ日數ヲ除キ前後ノ日數ヲ計算シテ減俸スルモノトス

判任官俸給支給細則 明治十九年五月四日 大藏省令第二十號

判任官俸給支給細則
第一條 判任官ノ月俸ハ毎月左ノ日割ニ依リ支給スルモノトス但休日ニ當ルトキハ順次繰上トス

二十六日 内閣 外務省 大藏省

二十七日 陸軍省 海軍省 文部省

二十八日 農商務省 逓信省 元老院

右ニ應セザル諸廳

第二條 増俸減俸(非職減俸共)ハ發令ノ翌日ヨリ起算シ其當月分ハ日割ヲ以テ計算スルモノトス
第三條 新任ノトキハ職務ニ就キタル當日ヨリ新官ノ俸給ヲ支給スルモノトス
第四條 轉任ノトキハ前任廳ノ事務ヲ終リタル翌日ヨリ新官ノ俸給ヲ支給スルモノトス
第五條 公務ニ由リ旅行スルモノニハ第一條ノ日割ニ拘ラス翌月マテノ俸給ヲ給與スルコトヲ得
第六條 右ニ掲ル者ノ外ハ總テ高等官年俸支給法ノ例ニ據ル

附則
第一類 第七章 俸給支給 旅費

四百二

十九年勅令
三十七號
官俸給支
給方(第十七
ノ十八)ヲ定

十九年勅令
三十七號
官俸給支
給方(第十七
ノ十八)ヲ定

第一類 第七章 俸給支給 旅費

四百二

一新官制ニ依リ本年五月一日以前ニ任官ノモノハ總テ五月一日ヨリ起算シテ俸給ヲ支給シ同日以後任官ノモノハ其月ノ現日數ニ依リ日割ヲ以テ舊官俸給ノ額ヲ支給シ新官ノ俸給ハ其翌日ヨリ起算スルモノトス

〔四〕非職官吏俸給支給方 明治二十年三月二十四日 大藏省令第五號

客年當省令第十七號ハ本月限リ廢止シ非職官吏俸給 奉任官以上ニシテ月俸ノ者ハ十ノ儀ハ總テ客年當省令第十二號及ヒ第二十號高等官及ヒ判任官俸給支給細則ニヨリ支給ス 二箇月分ヲ積算シ年俸ニ準ス
但非職俸給渡日ハ高等官ハ一箇年ヲ四期ニ分チ毎期中ノ月四日 當日休暇ナリハ時ハ順延 判任官ハ毎月十五日ヨリ五日以内ト定ム

〔五〕郡區吏員給料殘額處分方 明治二十二年二月十六日 內務省訓令第四號府縣(沖繩縣ヲ除ク)(大藏大臣連署)

郡區吏員給料殘額ノ儀據置不苦相違置候府縣モ有之候處右ハ二十二年度限リ廢止候條二十二年度及累年ノ殘額ハ翌々年度ノ雜收入ニ編入セラルヘシ

● 同指令

● 官吏俸給支給日割ノ 同指令 明治十九年七月二十九日 靜岡縣同

御省令第十二號高等官俸給支給細則及ヒ第二十號判任官俸給支給細則ノ中地方廳官吏俸給支給ノ日割明文無之右ハ高等官及判任官并雇員トモ俸給支給ノ日割如何相心得然ルヘキヤ

大藏省指令 明治十九年八月三日

同ノ趣經費所管ノ廳下同日ニ支給スル儀ト心得ヘシ

但雇員俸給支給日ハ適宜指定スヘシ

● 高等官俸給支給細則ノ 照會回答 明治十九年六月二日 農商務省照會

高等官俸給支給細則第十四條ニ會計ヲ異ニスル廳ヨリ官吏ヲ借用スルトキハ其間ノ俸給ハ日割ヲ以テ借用廳ヨリ該

官吏所屬ノ廳へ返付ストアリ右ハ通常經費ヲ以テ支辨スル則チ各者及ハ各府縣廳等ノ間ニ借用スルモノハ正條ノ限ニアラスシテ通常經費ト作業費ノ如キヲ指稱セラレタルモノニ之アルヘキヤ

大藏省回答 明治十九年六月四日

高等官俸給支給細則第十四條中會計ヲ異ニスル廳トアルハ御見解ノ通

● 旅費規則沿革要領

明治二年八月滿國路費規則ヲ定ム○同年十月前令中ヲ改正ス○四年五月布告ヲ以テ旅費支度料並滞在宿代月手當等ヲ改正ス○五年二月旅費定則更正ヲ布告ス○同年三月第九十六號布告ヲ以テ旅費定則中第三章ヲ改正ス○同年五月第百五十七號布告ヲ以テ旅費定則第四章第八章ヲ更正ス○同年十月第三百九十九號布告ヲ以テ本年二月以後ノ指令ヲ廢止シ更ニ旅費定則ヲ定ム○同年十一月第三百四十八號布告旅費定則條款中ヲ改正ス○六年七月布告第二百四十三號ヲ以テ五年第三百九十九號布告旅費定則第十章但書中へ増補ス○六年十月布告第三百四十三號ヲ以テ前令第三章中北海道日當ヲ改正ス○同年十一月第三百七十四號達ヲ以テ旅費定則中ニ増加ス○七年二月第二十一號達ヲ以テ旅費定則中當後日當表及第十二章第廿一章ヲ廢シ更ニ滞在日當表及第三章以下ヲ改正ス○同年三月第二十九號達各府縣官員管内並旅行並滞在日當表ヲ定ム○同年第三十八號達ヲ以テ旅費定則中第十四章ヲ改正ス○同年四月第四十四號達ヲ以テ前令ヲ改正ス○六年第七十二號達ヲ以テ第五百二十四號達ヲ廢シ旅費定則附錄ヲ定ム○同年五月第六十七號達ヲ以テ定則第十章但書ヲ増補ス○同年六月第七十五號達ヲ以テ第五百九十九號布告ヲ廢シ自今一般ノ規則ニ依ラシム○同年第七十七號達ヲ以テ本年第廿一號旅費定則改正第四章中へ但書ヲ追加ス○同年第八十號達ヲ以テ本年第廿一號達旅費定則改正第五章但書ヲ改正ス○同年七月第九十號達ヲ以テ同上改正中第三章但書ヲ更正ス○同年第九十一號達ヲ以テ證人トシテ裁判所ニ呼出シタル者旅費日當支給方ヲ定ム○同年第九十七號ヲ以テ定則第九章并日當表中改定ノ旨ヲ達ス○同年第百一號達ヲ以テ六年第三百四十三號布告第三章ノ內權太日當一日五里詰ノ廉ヲ

廢シ一般ノ日當ヲ賜フ○八年一月第七號達ヲ以テ旅費定則第三章第四節第十一條中ヲ改定ス○同年四月第四十五號達ヲ以テ定則第七章但書ヲ改正ス○八年八月第百三十九號達ヲ以テ旅費定則ニ外國行ノ部ヲ増補ス○九年一月第三號達ヲ以テ七年第二十九號達中ニ追加ス○同年六月第六十四號達ヲ以テ旅費定則ヲ更定ス○同年九月第八十八號達ヲ以テ八年第四十九號達中ヲ改正ス○同年十二月第百十三號達ヲ以テ本年第六十四號達旅費定則中ヲ改正増補ス○同月第百二十號ヲ以テ定則中内國ノ部へ第廿一章增加ノ旨ヲ達ス○十年二月第二十四號ヲ以テ前令中へ但書追加ヲ達ス○同年八月第五十五號達ヲ以テ旅費定則第二章へ增加ス○同年十月定則第八章第二項ヲ刪除ス○十一年一月第三號達ヲ以テ定則第八章中神官旅費等級ヲ改正ス○同年十月第四十三號達ヲ以テ定則第十九章へ但書ヲ追加ス○十二年十一月第四十三號達ヲ以テ定則第十六章第十七章へ追加ス○同年十二月第四十七號達ヲ以テ定則第二章第六項ヲ改正ス○十四年十二月第百十號達ヲ以テ旅費定則外國ノ部第一章ニ一項ヲ追加ス○十六年二月第七號布告ヲ以テ郡區長旅費支辨方ヲ定ム○同年十二月第五十四號達ヲ以テ旅費定則第七章第十四章中ヲ改正ス○同月第五十六號ヲ以テ定則第八章中神官旅費等級改正ヲ達ス○十七年一月第六號達ヲ以テ定則第五章第七章第九章中ヲ改正ス○同年二月第十九號達ヲ以テ定則第九章ヲ改正ス○十九年六月閣令第十四號ヲ以テ内國旅費規則ヲ定ム○同月内務省令第一號ヲ以テ警察官同職官吏神官及等外吏員内國旅費規則ヲ定ム○同年九月同省令第十五號ヲ以テ郡區書記ノ旅費支給方ヲ定ム○二十年五月閣令第十二號ヲ以テ外國旅費規則ヲ定ム

第四十 内國旅費規則 明治十九年六月八日(同月九日公布)

内國旅費規則ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治九年太政官第六十四號達旅費定則中内國ノ部ハ廢止ス

内國旅費規則

第一條 内國旅費ハ官吏公務ニ依リ本邦内ヲ旅行スルトキ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ

之ヲ支給ス

第二條 内國旅費ハ各官等ニ依リ分テ六等トシ別表ノ定ムル所ニ從ヒ順路ノ路程ニ依リ瀛車瀛船賃車馬賃及日當ヲ支給ス但車馬賃及日當ハ管内外ニ區別シ之ヲ支給ス

第三條 瀛車賃ハ瀛車旅行、瀛船賃ハ瀛船旅行、車馬賃ハ陸路旅行、日當ハ休泊料及其他ノ諸費ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第四條 官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入備入タル舟車馬等ニテ旅行シ若クハ旅行ノ性質ニ依リ特ニ舟車馬等ノ實費拂ヲ許可シタルトキハ本令ノ瀛車賃瀛船賃及車馬賃ヲ支給セ

第五條 瀛車賃ハ哩數、瀛船賃ハ海里數、車馬賃ハ里數、日當ハ日數ニ應シ之ヲ支給スヘシ

第六條 赴任又ハ管外旅行ノ爲メ其管内ヲ通過スルトキハ其路程ハ管外ニ準シ又管内巡回ノ際其便宜ニ依リ管外ヲ通過スルトキハ其路程ハ管内ニ準スヘシ

第七條 日當ハ陸路六里未滿、瀛車十哩未滿及瀛船十海里未滿ノ旅行ニハ支給セサルモノトス但公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要スルトキハ宿泊ノ數ニ應シテ日當ヲ支給スヘシ

第八條 瀛車賃瀛船賃及車馬賃ハ其種類毎ニ經過セシ路程ノ總數ヲ合算シテ之ヲ支給スヘシ但其一位未滿ノ端數ハ計算セサルモノトス

第九條 旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ各年度毎ニ之ヲ區別シ旅費ヲ計算スヘシ但瀛車賃

第一類 第七章 俸給支給 旅費

及瀛船賃ハ會計年度ニ係ハラス瀛車瀛船ノ到達地ニ著シタル日ヲ以テ之ヲ區別シテ計算スヘシ

第十條 檢田測量及土木工事等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ車馬賃ヲ給セス日當額ニ三割ヲ増給スヘシ

第十一條 赴任旅費ハ舊任地ヨリ新任地ニ至ルマテ本官相當ノ車馬賃瀛車賃若クハ瀛船賃ノ二倍ヲ支給スヘシ

第十二條 廢官若クハ退官ノ際事務引繼殘務取調其他公務ノ爲メ旅行セシムルトキハ前官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十三條 新ニ任用スル爲メ召喚スルモノハ其新任官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十四條 旅行中歸省其他私事ノ爲メ許可ヲ得テ迂路ヲ通過スルトキハ順路ノ路程ニ應シ旅費ヲ支給スヘシ

第十五條 旅行中廢官死亡又ハ諭旨退官シタルモノハ前官相當ヲ以テ舊任地マテノ旅費ヲ支給スヘシ

第十六條 前二條ノ場合ニ於テ日當ヲ支給スル爲メ其日數ヲ計算スルハ瀛車旅行ハ一日二百哩詰瀛船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰トス但距離接近シテ數種ノ旅行ニ跨ルトキハ各其路程十二分ノ一ヲ以テ一時間ノ行程トシ一日ノ旅行時間ハ十二時間トシ其日數ヲ計算スヘシ

第十七條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ平常旅行ヲ要スル官吏ニ對シ特ニ其旅費額ヲ定メ月額ヲ以テ之ヲ支給スルコトヲ得

第十八條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得

第十九條 二十年六月二十三日閣令
第十七號ヲ以テ削除ス

第二十條 陸海軍武官文官及警察官ノ旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ別ニ之ヲ定ムヘシ

二十年三月二十一日閣令第六號ヲ
以テ(武官)ノ下文官ノ二字ヲ加フ

第二十一條 神官及雇員其他本令ニ明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

別表

旅費額		等	級	瀛車賃	瀛船賃	管外車馬賃	管内車馬賃	管外口當	管内口當
一等	勅任	官	一哩	每二	一海里	每二	一里	每二	一里
二等	任	官	每二	一里	每二	一里	每二	一日	每二
三等	任	官	每二	一日	每二	一日	每二	一日	每二
奏任	任	官	每二	一日	每二	一日	每二	一日	每二
奏任	任	官	每二	一日	每二	一日	每二	一日	每二
奏任	任	官	每二	一日	每二	一日	每二	一日	每二
奏任	任	官	每二	一日	每二	一日	每二	一日	每二

第一類 第七章 俸給支給 旅費

四等	奉任試補五等官金	九錢金	九錢金	拾貳錢金	拾貳錢金	壹圓
五等	判任四等以上金	六錢金	六錢金	拾四錢金	八錢金	九拾錢金
六等	判任五等以下金	六錢金	六錢金	八錢金	六錢金	七拾錢金

〔一〕 內國旅費規則附則ヲ追加ス
明治十九年十二月二十三日
 閣令第三十四號各官廳

明治十九年六月
閣令第十四號內國旅費規則ニ附則ヲ追加スルコト左ノ如シ

內國旅費規則附則

第一條 北海道廳沖繩縣東京府小笠原島廳長崎縣對馬島廳鹿兒島廳大島島廳所轄地及東京府管轄伊豆七島内ハ管内
 巡回ト雖モ管外旅行ニ準シ旅費ヲ支給スルコトヲ得

第二條 北海道廳沖繩縣管轄内ハ車馬賃ニ限リ管外限リ五割以内ヲ増給スルコトヲ得

但北海道廳管轄内ハ毎年十一月ヨリ翌年三月マテ五箇月間車馬賃ニ限リ管外限リ二倍以内ヲ増給スルコトヲ得

第三條 各省大臣ハ前二條ニ據リ旅費額ヲ定メタルトキハ大藏大臣ニ通知スヘシ

〔二〕 警察官吏司獄官吏神官及等外吏雇員內國旅費支給方第五類第七
 十二ニ掲ク

〔三〕 郡區書記ノ旅費支給方明治十九年九月六日
 內務省令第十五號北海道府縣(沖繩縣ヲ除ク)

郡區書記ノ旅費ハ閣令第十四號內國旅費規則ニ據リ六等旅費ヲ支給スヘシ

但地方ノ情況ニ據リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルコトヲ得

〔四〕 地方官內國旅費支給心得方明治十九年六月十二日
 大藏省訓令第二十三號北海道府縣

閣令第十四號ヲ以テ內國旅費規則ヲ定メラレタルニ付左ノ通心得ヘシ
 一 府縣大少書記官ハ三等旅費收稅長ハ四等旅費船官判任御用掛ハ月俸四十圓以上五等旅費月俸四十圓未満六等旅費ヲ

給スヘシ

一 北海道廳長官府知事縣令ハ旅行ヲ命スルトキハ豫メ事務ノ便宜路程ノ近便等ヲ量リ經過ノ路筋旅行日數ヲ定ムヘシ

一 海灣河湖等ノ海里ヲ以テ路程ヲ算セサル場合ハ里數ニ應シテ車馬賃ノ額ヲ支給スヘシ

一 非常急行上り隨行等ノ如キ場合ニ於テ定額ノ車馬賃ヲ以テ支辨シ難キト見認ルトキハ北海道廳長官府知事縣令ノ見
 込ヲ以テ臨時實費拂フ可スヘシ

一 海里ノ距離ハ明治五年第百三十號布告ニ據ルヘシ

一 赴任旅費ハ在官者ニシテ在勤地ヲ轉シタル時ニ限リ之ヲ支給スヘシ

一 新任用ノ者ハ在勤地マテ規則第十三條ノ旅費ヲ支給スヘシ

一 兼官者ハ兼官ノ用務ニ據リ旅行スルトキハ兼官相當ノ旅費ヲ給シ本官兼官ノ用務ヲ兼ルトキハ本官相當ノ旅費ヲ給
 スヘシ

但兼官無給ナルトキ其旅費額ハ本官ノ給額ニ依ル

〔五〕 內國旅費支給心得方明治十九年六月二十六日
 大藏省訓令第二十八號北海道府縣

閣令第十四號ヲ以テ定メラレタル旅費支給方左ノ通心得ヘシ

一 北海道廳集治監典獄ハ內國旅費規則四等旅費ヲ給ス

一 內國稅徵收費支辨ニ係ル府縣等外出任等外御用掛及備員ノ旅費額ハ左表ニ據ル

汽車	汽船	管外車馬賃	管内車馬賃	管外日當	管内日當
一哩毎ニ	一海里毎ニ	一里毎ニ	一里毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ
金五錢	金五錢	金七錢	金五錢	金五十錢	金三十錢

一 北海道廳府縣ノ判任官并ニ準判任官 新官制ニ據リ官等ハ廳官御用掛ノ外ト雖總テ當省訓令第二十三號第一項ニ據リテ旅費ヲ給ス但地方稅支辦ノ官吏ト雖國庫ヨリ旅費ヲ給スルトキ亦同シ

一 支給上新舊旅費規則相跨リタル場合ニ於テハ新規則施行期日後直ニ到着セシ御用地ヲ以テ打切り又巡迴中ノ者ハ該期日ヲ押へ新舊支給方ヲ區分スヘシ

〔六〕 租稅檢査員旅費支給額 明治十九年八月二日 大藏省訓令第三十六號府縣(沖繩縣ヲ除ク)

- 一 租稅檢査員旅費月額ハ府縣廳下ノ檢査區内金拾五圓廳下外ノ檢査區内金拾九圓五拾錢トス
- 一 檢査員本廳ヨリ檢査區へ往復シ及ヒ甲乙郵區スル途中旅費ハ旅費規則第二條ニ依リ支給スヘシ
- 一 旅費月額ハ檢査區著ノ月ハ其翌日ヨリ出發ノ日ハ其前日マテ本額三十分一ノ割合ヲ以其日數ニ應シ支給スヘシ
- 一 廳下ノ檢査區内ニ於テ檢査ニ從事セサルコトアルトキハ其日數ヲ除キ前項ニ依テ支給スヘシ
- 一 府縣知事ハ大藏大臣ノ允可ヲ請フテ月額ヲ減スルコトヲ得

〔七〕 學校職員郡區書記戶長旅費支給方 明治二十年六月十四日 內務省訓令第三十七號府縣

明治十九年勅令第六十五號同年閣令第三十五號ノ學校職員及ヒ郡區書記戶長等國庫費支辦ニ屬スル用務ヲ以テ旅行セシムルトキ學校職員ハ其奉任待遇ヲ受クルモノ年俸千圓月俸八百圓已上ハ三等旅費年俸千圓未満ハ四等旅費判任待遇ヲ受クルモノ月俸四十圓年俸八百圓已上ハ五等旅費月俸四十圓未満ハ六等旅費郡區書記戶長ハ其官等準官相當旅費ヲ同年閣令第十四號內國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

〔八〕 私設鐵道條例第廿一條第二十二條警察官吏囚徒護送官吏ニ內國旅費支給方 明治二十一年二月七日

內務省訓令第二號廳府縣集治假留監
 明治二十年五月勅令第十二號私設鐵道條例第二十一條公務ヲ以テ往復スル警察官吏及第二十二條囚徒護送ノ官吏ニシテ

半價ヲ以テ乘車スル場合ニ於テハ明治十九年六月閣令第十四號及同年六月內務省令第十一號內國旅費ニ屬スル汽車貨半額ヲ支給スヘシ

● 伺指令

● 檢田測量巡視等ノ旅費及規則第五條里程計算方ノ伺指令 明治十九年六月二十五日 神奈川縣伺

- 一 檢田測量其他巡視ノ旅行ハ規則第十條ニ據リ車馬賃ヲ給セサル儀ニ付里程ノ遠近ニ關セス日當額ニ三割ヲ増給スヘキヤ果シテ然ラハ測量等ノ爲メ日々一旦上廳ノ上廳下ヲ巡迴スルモノ、如キモ亦同様支給スヘキ儀ナルヤ
- 一 規則第五條ニ據リ路程ヲ計算スルハ渾テ其到着地里程基點マテノ距離ニ據ルナレトモ横濱ヨリ東京ニ出張スルニ當リ汽車旅行ヲナスモノ、如キハ横濱新橋間ノ哩數ニ依リ汽車賃ヲ給スルノ外別ニ一市内旅行ニ係ル車馬賃ヲ給スルニ及ハサル儀ナルヤ或ハ右汽車賃ノ外東京市内奔走ノ里程ニ係ハラテス横濱里程元標ヨリ停車場迄及新橋停車場ヨリ日本橋元標迄ノ里程ヲ通算シ別ニ車馬賃ヲ支給スヘキ儀ナルヤ
- (大藏省) 指令 明治十九年七月一日
- 伺ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一項 規則第十條ノ日當ハ廳下ト然ラサルトハ間ハサル勿論ナリ尤其給否ハ第七條ノ制限ニ據ル儀ナリ

第二項 里程ハ原標ヲ押へ計算スヘシト雖モ汽車汽船陸路旅行相跨ル時一市街ノ内ニテ下車上車或ハ上陸上船セシカ如キ場合ニ於テ原標ト停車場及ヒ波止場間ノ里數ハ算セサル儀ナリ

● 內國旅費支給方ノ伺指令 明治十九年七月十三日 石川縣伺

- 一 規則第十條ニ現場巡視スルトキハ車馬賃ヲ給セス日當額ニ三割ヲ増給スヘシトアリ然レハ里程六里未満ノ巡視ト雖モ本條ニ據リ支給スヘキモノニシテ第七條ニ比準スヘキ限リニ之レナキヤ
- 一 諸稅檢査員ニシテ現場巡視スルトキ甲地ヨリ乙地へ移ル里程數里ニ亘ルモ其日ハ現場巡視ナルヲ以テ車馬賃ヲ給セス日當額ニ三割ヲ増シ支給スヘキヤ

一諸稅檢査員ニシテ派出所所在地ノ市街ヲ檢査スルモノモ現場巡視ノ例ニヨリ増日當ヲ支給スヘキヤ果シテ然ラハ廳下ヲ巡視スルモノ、如キモ同上支給シ然ルヘキヤ

(大藏省)指令 明治十九年七月二十三日

伺ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一項 規則第十條ノ日當ハ里程六里未滿ノ旅行ニハ之ヲ支給セス本廳出張所等ノ所在地ヨリ往返一里以上

ノ地ニ至ルモノハ車馬賃ノミヲ給スルヲ得

但六里未滿ト雖モ宿泊ノトキハ日當ヲ給ス

第二項 現場ヲ巡視スルモノニ規則第十條ニ據リ三割増日當ヲ給スルニ當リ數箇ノ現場ヲ巡視スルトキハ甲

現場ヨリ現場ニ至ル間ハ里程ニ應シ車馬賃ヲ支給スルヲ得且其當日日當額ノ如キハ三割増日當ヲ給スル

ト否トハ適宜タルモノトス

第三項 前二項ノ精神ニヨリ支給方取計フヘシ

●管内赴任旅費日當支給方ノ照會回答 明治二十年二月 栃木縣照會

栃木縣照會

官吏管内赴任ノ節旅費及日當支給方ノ儀ハ内國旅費規則第六條赴任又ハ管外旅行ノ爲メ其管内ヲ通過スルトキハ其路程ハ管外ニ進シ云々ト有之ニ付管内中ノ赴任ハ無論管内ノ車馬賃汽車賃若クハ汽船賃ノ二倍ヲ支給シ可然ヤ

大藏省主計局回答 明治二十年二月五日

御見解之通

●内國旅費第七條ノ件ニ付伺指令 明治二十年三月十九日 神奈川縣伺

神奈川縣伺

内國旅費規則第七條ニ日當ハ陸路六里未滿海路十哩未滿及汽船十海里未滿ノ旅行ニハ支給セスト有之候處右各種ノ旅行相跨リ其行程各日當支給ノ定限ニ滿タサル場合ニハ汽車汽船ノ行程ハ之ヲ陸里ニ換算シ通算六里ニ滿ルトキハ日當ヲ支給シ然ルヘキヤ

大藏省指令 明治二十年二月二十四日 伺ノ通

●非職任用旅費支給方ノ照會回答 明治二十年四月一日 北海道廳照會

北海道廳照會

非職ノ者ハ赴任旅費ハ規則第十一條ニ據ルカ又ハ第十三條ニ據リ支給シ然ルヘキヤ

大藏省主計局回答 明治二十年四月四日

非職官吏ハ客年開令第一號第三條ニヨリ任所ニ居住スヘキ資メナキヲ以テ復任若クハ他廳へ轉任ノ場合モ旅費規則第十一條ニ據ラス本人現任地ヨリ單ニ通常旅費ヲ支給スル儀ナリ

第四十一 外國旅費規則 明治二十年五月六日(同七日公布) 閣令第十二號各官廳

外國旅費規則左ノ通相定本年七月一日ヨリ施行ス

外國旅費規則

第一條 外國旅費ハ官吏公務ニ依リ外國ニ旅行スルトキ其行程日數ニ應シ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第二條 外國旅費ハ船舶料、汽車料、客舍料、食卓料、日當及支度料ノ六種トス

第三條 客舍料、食卓料、日當、支度料ハ各官等ニ依リ分テ五等トシ第一號表ニ照シ船舶料、汽車料ハ勅奏判任官ハ一等、備員ハ二等ノ額ヲ以テ第二號表ニ照シ之ヲ支給ス

第四條 表面外ノ地ニ旅行スルトキ勅奏判任官ハ汽船、汽車賃ノ一等定價、備員ハ二等定價ヲ支給ス其ニ等ナキ場合ハ一等ヲ支給ス

汽船、汽車ノ設ナキ地方ヲ旅行スルトキハ舟車、馬賃ノ實費ヲ支給ス

定價及實費ヲ支給スル場合ニ於テハ私屬ノ荷物二十五貫目マテノ運賃ハ官費支給スルコトヲ得

第五條 前條ノ場合ニ於テハ旅行者ヨリ旅行日記、受取書等精確ナル證明書ヲ出サシメ之ニ基キ支給スヘシ

旅行者ハ精密ナル旅行日記ヲ作り毎日ノ行程、宿泊ノ場所、旅店名稱、船名、賃銀等ヲ記入スヘシ

旅行者ハ成ルヘク運輸會社或ハ運輸營業人ノ受取書其他舟車馬賃ノ證明トナルヘキモノヲ取置ヘシ

第六條 船舶料、汽車料ハ官ヨリ船、車ヲ供スルトキハ之ヲ支給セス

第七條 食卓料ハ官ヨリ船舶ヲ供スルモ斯ク爲サ、ルトキニ限り航海ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

食卓料ハ客舍料ト重複ニ支給セス

第八條 客舍料ハ陸地宿泊ノ數ニ應シ之ヲ支給ス

航海途中汽船ノ寄港シタル場合ニ於テ自己ノ便宜ヲ以テ上陸宿泊スルトキハ客舍料ヲ支給セス

第九條 日當ハ本邦出發港拔錨ノ日ヨリ本邦歸着港ニ投錨ノ日マテ日數ニ應シテ支給ス

第十條 支度料ハ各省大臣ニ於テ豫メ旅程ノ遠近、日數ノ多少、公務ノ性質等ヲ斟酌シ第一號表ニ掲クル範圍内ニ於テ相當ノ額ヲ定メ支給スヘシ

支度料ハ本邦ヨリ外國へ旅行ヲ命シタルトキ之ヲ支給シ其外國ニ在テ甲國ヨリ乙國へ旅行ヲ命スルトアルモ之ヲ支給セサルモノトス

第十一條 奏任官四等以上ノ者從者ヲ伴ヒ外國ニ旅行スルトキ從者一人ニ限り願ニ依リ表面二等ノ船舶料、汽車料^{表面外ノ地}及五等ノ食卓料ヲ支給スルトアルヘシ

第十二條 外國へ旅行ヲ命セラレタル者出發前死去又ハ官ノ都合ニ由リ旅行ヲ免シタルトキハ支度料ノ半額ヲ支給ス

第十三條 外國旅行中退官ノ者ハ其地ヨリ本邦出發地マテ舊官相當ノ旅費ヲ支給ス但自己ノ便宜又ハ刑事裁判ニ由リ退官ノ者ハ此限ニアラス

外國旅行中死亡ノ者ハ其地ヨリ本邦出發港マテ舊官相當ヲ以テ第二號表汽車料、船舶料ノ一割増ヲ支給シ第一號表ノ旅費ハ支給セス

第十四條 外國旅行中許可ヲ得テ公務ヲ終ルノ後尙私事ノ爲メ滞在スルトキ其間ハ一切旅費ヲ支給セス但病氣ハ此限ニアラス

許可ヲ得テ私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ就キタル日若クハ場所ヨリ其再ヒ順路ニ就クノ日若クハ場所マテハ順路ニ應スル船舶料、汽車料ノ一割増ヲ支給シ日當、客舍料ハ支給セス

第十五條 第十三條及第十四條ニ據リ死亡者及許可ヲ得テ迂路ヲ經過スル者ニ順路船舶料、汽車料ヲ支給スルトキ表面外ノ地ニ於テハ陸地ハ一英里ニ付金七錢、海路ハ一海里ニ

付金六錢ノ割ヲ以テ支給ス
 表面外ノ地ノ里程ハ各地運輸會社或ハ各國政府ノ公認セル里程表ニ基キ旅行者或ハ遺族ヨリ精確ノ證明書ヲ出サシムルモノトス
 第十六條 僱員中特別ノ取扱ヲ要スル者(僱外國人等)及其他本則ニ明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ之ヲ定ムヘシ
 第十七條 交際官、領事等別段ノ旅費規則アルモノニハ本則ヲ適用セズ
 第十八條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得

附則

外國旅費ハ內國旅費ト重複ニ支給スルコトナシ
 外國旅行ノ爲メ本邦内ヲ通過シ及出發港ニ滞在スルキハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス
 出發港拔錨ノ後郵船ノ都合ニ由リ本邦内ニ寄港シ上陸滞在スルトキハ其間ハ內國旅費規則ニ據リ日當ヲ支給ス
 歸朝ノ際目的ノ港ニ達スヘキ直航船ナキカ爲メ一旦本邦内ニ寄港シ其地ヨリ汽船ヲ乗替ルトキハ其寄港シタル日以後ニ起ル旅行ハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス

第一號

官級	旅費		客舍		料	
	等級	諸外國支那國朝鮮國	食卓料	日當	支度料	

親任官一	等八	圓七	圓四	圓	壹圓七拾錢	四	圓六百圓以內
勅任官二	等七	圓六	圓三	圓	壹圓五拾錢	三	圓四百圓以內
奏任官三	等六	圓五	圓	貳圓五拾錢	壹圓貳拾錢	貳圓三拾錢	貳百五拾圓以內
判任官四	等五	圓四	圓貳	圓	九拾錢	壹圓三拾錢	百三拾圓以內
備員五	等四	圓三	圓	壹圓五拾錢	六拾錢	六拾錢	六拾圓以內

第二號表ノ甲

汽船賃表

橫濱 香港間	百四圓	一	等	二	八拾三圓貳拾錢
同 柴根間	百九拾五圓				百五拾六圓
同 新嘉坡間	百九拾五圓				百五拾六圓
同 マニラ間	貳百五拾三圓五拾錢				貳百貳圓八拾錢
同 バタアイヤ間	貳百四拾七圓				百九拾七圓六拾錢
同 カルカツタ間	三百五拾壹圓				貳百八拾圓八拾錢
同 ボンデテュリ マドラス間	三百三拾壹圓五拾錢				貳百六拾五圓貳拾錢
同 錫蘭 コロンボ間	三百拾貳圓				貳百四拾九圓六拾錢

第一類 第七章 俸給支給 旅費

同 亞丁間	三百九拾圓	三百拾貳圓
同 蘇西間	五百七圓	四百五圓六拾錢
同 ボルトサイト間	五百貳拾圓	四百拾六圓
同 那不雷間	五百三拾九圓五拾錢	四百三拾壹圓六拾錢
同 メルボルン間	四百六拾八圓	貳百八拾六圓
同 プリンデッセン間	五百拾三圓五拾錢	貳百九拾貳圓五拾錢
同 ウエニス間	四百六拾八圓	貳百八拾六圓
同 シドネー間	三百貳拾五圓	貳百圓
同 サンフランシスコ間	六拾五圓	三拾九圓
同 上海間	九拾七圓五拾錢	五拾七圓貳拾錢
同 天津間	八拾四圓五拾錢	四拾九圓四拾錢
同 芝罘間	七拾圓貳拾錢	四拾壹圓六拾錢
同 元山間	五拾五圓貳拾錢	三拾貳圓五拾錢
同 釜山間	七拾圓貳拾錢	四拾壹圓六拾錢
同 仁川間	八拾八圓四拾錢	五拾貳圓
同 浦潮斯德間	九拾七圓五拾錢	三拾貳圓五拾錢
米國桑港ホル、間		

第二號表ノ乙

歐米各所汽車賃表

米國紐育英國リバプール間	百三拾圓	五拾貳圓
橫濱英國リウスマンプトン間	五百四拾六圓	三百貳拾五圓
佛國馬耳塞リオン間	拾壹圓貳拾錢	八圓三拾錢
佛國馬耳塞巴里間	貳拾七圓六拾錢	貳拾圓五拾錢
佛國リオン巴里間	拾六圓四拾錢	拾貳圓貳拾錢
佛國巴里英國倫敦間	拾九圓五拾錢	拾四圓六拾錢
佛國巴里和蘭海牙間	拾三圓八拾錢	拾圓拾錢
佛國巴里澳洲維也納間	四拾七圓八拾錢	三拾五圓九拾錢
佛國巴里伊國羅馬間	五拾五圓七拾錢	四拾圓
佛國巴里伊國ナール間	六拾圓六拾錢	四拾三圓四拾錢
佛國巴里瑞西國メルン間	拾七圓七拾錢	拾三圓三拾錢
佛國巴里瑞典國ストックホルム間	五拾九圓三拾錢	四拾四圓七拾錢
佛國巴里丁林國コペンハーゲン間	四拾貳圓九拾錢	三拾貳圓

第一類 第七章 俸給支給 旅費

佛國巴里白耳義國アラセル間	拾圓拾錢	七圓五拾錢
佛國巴里西班牙國マドリット間	五拾壹圓	三拾八圓七拾錢
佛國巴里荷蘭國リスボン間	七拾六圓七拾錢	五拾八圓
佛國巴里那威國クリスチヤンナ間	六拾六圓八拾錢	四拾九圓七拾錢
佛國巴里荷蘭國伯林間	三拾三圓	貳拾四圓貳拾錢
佛國巴里土國コンスタンチノール間	百三拾壹圓六拾錢	九拾八圓
佛國巴里露國彼得堡間	八拾三圓七拾錢	六拾貳圓拾錢
露國彼得堡モスコー間	貳拾貳圓四拾錢	拾壹圓七拾錢
露國彼得堡オデッサ間	七拾九圓	五拾四圓六拾錢
露國彼得堡アボー港間	貳拾壹圓四拾錢	拾貳圓七拾錢
露國彼得堡濱國クラコー間	四拾八圓七拾錢	三拾六圓拾錢
露國彼得堡露國エードクネン間	三拾圓貳拾錢	貳拾貳圓四拾錢
露國エードクネン伯林間	拾九圓貳拾錢	拾四圓三拾錢
獨國伯林濱國維也納間	拾九圓八拾錢	拾四圓九拾錢
獨國伯林白耳義國アラッセル間	貳拾圓八拾錢	拾三圓三拾錢
獨國伯林英國倫敦間	三拾六圓四拾錢	貳拾六圓六拾錢

獨國伯林露國アムステルダム間	拾壹圓四拾錢	八圓四拾錢
伊國ナイブル羅馬間	六圓八拾錢	四圓九拾錢
伊國羅馬ウエニス間	拾七圓四拾錢	拾貳圓
伊國ウエニス濱國維也納間	拾八圓七拾錢	拾三圓八拾錢
伊國ウエニス濱國トリースト間	四圓四拾錢	三圓拾錢
澳國トリースト維也納間	貳拾圓八拾錢	拾五圓六拾錢
澳國維也納クラコー間	拾貳圓三拾錢	九圓拾錢
英國倫敦リバプール間	九圓四拾錢	七圓拾錢
英國倫敦サウサンプトン間	五圓	三圓六拾錢
瑞典ストックホルムマルモ間	拾五圓六拾錢	拾壹圓六拾錢
丁抹國コペンハーゲンコルセル間	貳圓九拾錢	貳圓貳拾錢
米國桑港地盤頓間	貳百〇四圓拾錢	百三拾六圓五拾錢
米國桑港紐育間	貳百〇四圓拾錢	百三拾六圓五拾錢

第二類

第一章 位階 勳章 褒章

●位階沿革要領

明治二年七月八日布告シテ位階四位以下上下ノ稱ヲ廢シ正一位以下從九位ニ至リ正從ヲ以テシ外ニ大初位少初位ノ稱ヲ設ク○同月十一日勅授奏授判授ヲ別チ四位以上ヲ勅授トシ六位以上ヲ奏授トシ七位以下ヲ判授トス○二十年五月勅令第十號ヲ以テ叙位條例ヲ頒布ス

〔第四十二〕叙位條例 明治二十年五月六日公布 勅令第十號

朕叙位條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年五月四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第十號

叙位條例

第一條 凡ソ位ハ華族勅奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰スヘキ効績アル者ヲ叙ス

第二條 凡ソ位ハ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス

第三條 凡ソ位ハ從四位以上ハ勅授トシ宮内大臣之ヲ奉ス正五位以下ハ奏授トシ宮内大臣之ヲ宣ス

第四條 凡ソ位ハ懲戒ニ因リ返上セシムルカ又ハ刑法ニ因リ公權ヲ剝奪セラル、ノ外終身

之ヲ有スルヲ得

第五條 凡ソ位ハ從四位以上ハ爵ニ准シ禮遇ヲ享ク其准例左ノ如シ

公	爵	侯	爵	伯	爵	子	爵	男	爵
從一位	正二位	從二位	正從三位	正從四位					

第六條 爵位ヲ併有スル者ハ高キニ從テ禮遇ヲ享ク

〔一〕位階奉宣ノ手續明治二十年五月九日 内閣訓令各官廳

勅令第十號ヲ以テ位階奉宣ノ事ハ宮内大臣ニ委セラレタル處華族及宮内官吏ノ叙位ヲ除ク外ハ從前ノ如ク内閣總理大臣ヲ經テ上奏スヘシ内閣總理大臣奏明裁可ヲ經タル後之ヲ宮内大臣ニ移シ宮内大臣之ヲ奉宣ス

勳章沿革要領

明治八年四月第五十四號布告ヲ以テ賞牌ヲ定ム○同年十一月第七十一號布告ヲ以テ外國勳章佩用免許願手續ヲ定ム
 ○同年十二月第二百四號布告ヲ以テ賞牌圖式中ニ掲載ノ等級ヲ定ム○九年十一月第四百一十一號布告ヲ以テ自今賞牌ヲ勳章ト改稱シ從軍牌ヲ從軍記章ト改稱ス○十一年六月第十五號布告ヲ以テ前令ヲ改正シ外國勳章佩用願手續ヲ頒ツ○十六年一月第一號達ヲ以テ勳章條例ヲ定ム○同月四日番外達ヲ以テ前令ノ附則ヲ定ム○十六年六月第二十二號布告ヲ以テ勳章年金禮券外國勳章佩用免許狀沒收方ヲ令ス○同年九月第三十九號達ヲ以テ勳章年金禮券及停止取扱手續ヲ定ム○十八年七月第四十三號達ヲ以テ叙勳條例中ヲ改正ス○同月廿七日番外達ヲ以テ前令附則中ヲ改正ス○同年十一月第三十五號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十九年七月間令第十九號ヲ以テ前令ヲ改正ス○二十一年一月詔シテ從軍牌設シ新舊與ニ併行セシム○同月勅令第一號ヲ以テ各種ノ勳章等級製式及大勳位菊花章頭飾ノ製式ヲ公

布ス○同年九月勅令第十五號ヲ以テ十六年第一號達叙勳條例及其附錄ヲ廢ス○二十二年三月勅令第三十八號ヲ以テ勳章進級者上級勳章ヲ賜與セラレタルトキ下級ノ勳章ヲ還納セシム

第四十三 勳章ヲ定ム 明治八年四月十日 布告第五十四號

今般勳章別冊之通被定候條此旨布告候事

別冊

〔括弧内朱字〕

〔朕惟フニ凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者宜ク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ユヘシ仍テ勳等賞牌ノ典ヲ定メ人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス汝有司其斯旨ヲ體セヨ〕

〔明治八年二月〕

勳等賞牌

勳等ハ勳績及功勞アル者ヲ賞スル爲メニ設クル所ノ階級ニシテ位階ト異ナル故ニ各種ノ勳章ヲ佩用セシム

勳等ヲ分ツテ八級ト爲ス

勳一等

右ニ叙スル者ハ一等勳章ヲ賜フ

勳二等

右ニ叙スル者ハ二等勳章ヲ賜フ

勳三等

第二類 第一章 位階 勳章 褒章

- 右ニ叙スル者ハ三等勳章ヲ賜フ
- 勳四等
- 右ニ叙スル者ハ四等勳章ヲ賜フ
- 勳五等
- 右ニ叙スル者ハ五等勳章ヲ賜フ
- 勳六等
- 右ニ叙スル者ハ六等勳章ヲ賜フ
- 勳七等
- 右ニ叙スル者ハ七等勳章ヲ賜フ
- 勳八等
- 右ニ叙スル者ハ八等勳章ヲ賜フ

從軍記章

從軍記章ハ將卒ノ別ナク軍功ノ有無ヲ論セス凱旋ノ後從軍セシ徵ニ之ヲ賜フ

一勳章及從軍記章ハ佩用本人ニ止リ子孫之ヲ用ユルヲ得ス

從軍記章佩用式

一勳章ハ勳一等ニ限リ必ス勳二等ノ牌ト共ニ兩箇ノ牌ヲ佩フヘシ其他二等以下ハ一箇ヲ佩フルヲ規則トス譬ハ三等ノ牌ヲ佩フル者勳二等ニ叙スルトキハ當テ佩フル所ノ三等牌ヲ止メ二等牌ノミ佩フルカ如シ

一勳章ハ禮服ノトキ佩フヘシ平服ニハ佩フヘカラス平服ニハ略綬ヲ左襟見返ノ釦穴ニ掛ケ其表トス

一二等勳章ハ幅廣キ綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ斜ニ佩フ

一二等勳章ハ右肋ノ邊ヘ綬ヲ不用針ニテ挾ミ佩フ

一三等勳章ハ綬ヲ領ニ纏ヒ喉下ニ佩フ

一四等以下ノ勳章及從軍記章ハ左肋ノ邊ヘ左ニ列シ佩フ

勳	一 等	勳	二 等	勳	三 等	勳	四 等
牌	金日章 徑二寸五分 日赤佛鉢 光線白佛鉢 光線二重白佛鉢	金日章 徑一寸八分 日赤佛鉢 光線白佛鉢	金日章 徑一寸五分 日赤佛鉢 光線白佛鉢	金日章 徑一寸五分 日赤佛鉢 光線白佛鉢	金日章 徑一寸五分 日赤佛鉢 光線白佛鉢	金日章 徑一寸五分 日赤佛鉢 光線白佛鉢	金日章 徑一寸五分 日赤佛鉢 光線白佛鉢
鈕	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢	金五七桐 花紫佛鉢 葉綠佛鉢
環	金圓形 無環佩針銀	金圓形	金圓形	金圓形	金圓形	金圓形	金圓形
綬	幅四寸 紅白織無綬	幅一寸 紅白織無綬	幅一寸 紅白織無綬	幅一寸 紅白織無綬	幅一寸 紅白織無綬	幅一寸 紅白織無綬	幅一寸 紅白織無綬
勳	五 等	勳	六 等	勳	七 等	勳	八 等

第二類 第一章 位階 勳章 褒章

一 大勳位菊花章頸飾

頸飾ハ大勳位ニ叙セシ者ニ特別之ヲ賜フ

菊花菊花ノ形ト明治二十一年十一月十七日公布

(三) 勳章佩用式

勳令第七十六號

朕勳章佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十一年十一月十六日

内閣總理大臣伯爵黑田清隆

勳令第七十六號

勳章佩用式

第一條 大勳位菊花章

菊花章ハ頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ其副章ヲ左肋ニ佩フ大綬ヲ以テ佩フル時ハ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ハ左肋ニ佩フ

第二條 寶冠章

一 勳一等寶冠章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ
二 勳二等寶冠章以下ハ結蝶狀ノ綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第三條 旭日章

一 勳一等旭日桐花章並旭日章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ

二 勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ

三 勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ

四 勳四等勳五等勳六等勳七等勳八等桐葉章ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第四條 瑞寶章

一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ

二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ

三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ

四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セム

(四) 勳章進叙者下級勳章ヲ還納セシム 勳令第三十八號

朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十二年三月二十一日

内閣總理大臣伯爵黑田清隆

勳令第三十八號

勳等進叙シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

(五) 勳章及大勳位菊花章頸飾圖樣ヲ示ス

勳令第三十一號

第一類 第一章 位階 勳章 褒章

明治二十一年一月勅令第一號各種勳章及大勳位菊花章頭飾ノ圖樣左ノ如シ
各種勳章及大勳位菊花章頭飾ノ圖樣

勳一等寶冠章		章 金楮圓長徑一寸二分	寶冠金地藍色佛鉢重 廓真珠其間濃紅色佛鉢 枝竹枝綠色佛鉢枝櫻花 紅色佛鉢枝葉綠色佛鉢	鈕 桐	花紫色佛鉢枝葉綠色佛鉢	綬 幅二寸六分	織地黃雙線紅
同副章		章 金徑二寸二分	鳳金地藍色佛鉢重廓 真珠其間濃紅色佛鉢 枝竹枝綠色佛鉢枝櫻花 紅色佛鉢枝葉綠色佛鉢				
勳二等寶冠章		章 金楮圓長徑一寸一分	寶冠金地藍色佛鉢重 廓真珠其間濃紅色佛鉢 枝竹枝綠色佛鉢枝櫻花 紅色佛鉢枝葉綠色佛鉢	鈕 牡丹	花白色佛鉢枝葉綠色佛鉢	綬 幅二寸二分	織地黃雙線紅
勳三等寶冠章		章 金楮圓長徑一寸一分	寶冠金地藍色佛鉢重 廓真珠其間濃紅色佛鉢 枝竹枝綠色佛鉢枝櫻花 紅色佛鉢枝葉綠色佛鉢	鈕 蝶	羽白色佛鉢枝	綬 幅二寸二分	織地黃雙線紅
勳四等寶冠章		章 金楮圓長徑一寸	寶冠金地藍色佛鉢重 廓真珠其間濃紅色佛鉢 枝竹枝綠色佛鉢枝櫻花 紅色佛鉢枝葉綠色佛鉢	鈕 藤	花紫色佛鉢枝	綬 幅二寸二分	織地黃雙線紅

勳一等旭日桐花大綬章		章 金日章徑二寸五分	日赤色佛鉢枝光線二重 紅白色佛鉢枝桐花紫色 佛鉢枝	鈕 金五七桐	花紫色佛鉢枝葉綠色佛鉢	綬 幅三寸五分	織地紅雙線白
同副章		章 金日章徑三寸	日赤色佛鉢枝光線二重 紅白色佛鉢枝桐花紫色 佛鉢枝				
勳二等瑞寶章		章 金徑二寸五分	鏡銀地藍色佛鉢枝連珠 紅白色佛鉢枝金銀八條光 線白色佛鉢枝	勳一等瑞寶章 副章同式			
勳三等瑞寶章		章 金徑二寸二分	鏡銀地藍色佛鉢枝連珠 紅白色佛鉢枝金四條光線 白色佛鉢枝			綬 幅三寸三分	織地淡藍雙線橙黃
勳四等瑞寶章		章 金徑二寸五分	鏡銀地藍色佛鉢枝連珠 紅白色佛鉢枝金銀八條光 線白色佛鉢枝				

第二類 第一章 位階 勳章 褒章

章	金徑一寸八分	鏡銀地藍色佛珠依連珠 紅色佛珠依金四條光線 白色佛珠依
綬	幅一寸二分	織地淡藍雙線橙黃
勳五等瑞寶章		
章	銀徑一寸五分	鏡銀地藍色佛珠依連珠 紅色佛珠依金銀四條光線 白色佛珠依
綬	幅一寸二分	織地淡藍雙線橙黃
勳七等瑞寶章		
章	金徑一寸二分	鏡銀連珠金
綬	幅一寸二分	織地淡藍雙線橙黃
勳八等瑞寶章		
章	銀徑一寸三分	鏡銀地藍色佛珠依連珠 紅色佛珠依銀四條光線 白色佛珠依
綬	幅一寸二分	織地淡藍雙線橙黃
勳六等瑞寶章		
章	金徑一寸五分	鏡銀地藍色佛珠依連珠 紅色佛珠依金四條光線 白色佛珠依
綬	幅一寸二分	彩花ヲ付著ス織地淡藍 雙線橙黃
勳五等瑞寶章		
章	銀徑一寸三分	鏡銀連珠銀
綬	幅一寸二分	織地淡藍雙線橙黃
勳四等瑞寶章		
中央	圓形徑一寸三分菊	花金葉綠色佛珠依
大勳位菊花章頸飾		
連環	楕圓長徑九分	一ハ古紫明ノ字一ハ治 ノ字各金一ハ菊花金葉 綠色佛珠依

(圖樣略ス)

〔六〕勳章還納手續 明治二十二年三月二十一日(同二十三日公布)
勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

勳章還納手續

- 第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ
 - 第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局ヘ送付スヘシ
官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳ヘ送付シ官廳ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ
 - 第三條 外國人ノ勳章進級シ同種上級勳章ヲ受ケタル者モ亦此手續ニ從ヒ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館ヘ送付スヘシ
 - 第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省ヘ送付シ同省ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ
 - 第五條 勳章還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局ヘ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ
- 附則
- 一 從前同種勳章ニ進級シタル者ハ東京ハ二週間以内各地方ハ三十日以内ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ手續第五條ニ依ルヘシ
但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス
- 〔七〕勳章佩用式說明 明治二十一年十一月十九日 賞勳局告示第一號
- 明治二十二年十一月十一日勅令第七十六號勳章佩用式第三條第二項ニアル勳二等旭日章ノ副章ハ其製式勳三等旭日章ニ異ナルコトナシ
- 〔八〕勳章記章佩用心得 明治二十二年二月七日 賞勳局告示第一號
- 勳章記章佩用心得
- 第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花章ト旭日章トハ同種アリ併佩スルコトナシ 後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ
 - 第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級

第二類 第一章 位階 勳章 褒章

若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ

第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ

第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ

第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)着用ノ時佩フヘシ從軍記章及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ

通常禮服着用ノ時ハ大禮服ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フ又大禮章ヲ胸衣ノ下襯衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大禮章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

旭日二等章ヲ有スル者通常禮服着用ノ節ハ其副章ヲ省クコトアルヘシ

第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服着用ノ時佩フヘシ

一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大禮章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大禮章ヲ省キ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒシテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス

第十款 彼我ノ大禮章ヲ有スル者ハ彼ノ大禮章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ
但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大禮章及ヒ其副章ヲ佩フル時ハ我大禮章ヲ省キ我副章ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綴ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及ヒ褒章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

〔九〕略章略綬佩用心得

明治二十二年二月十二日
賞勳局告示第二號

略章略綬佩用心得

- 一 各種勳章ノ略章(凡ソ徑曲尺五六分若クハ其以下ノ大サニシテ)ハ通常禮服着用ノ時或ル場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スルヲ得外國勳章ノ略章モ亦同シ
- 二 略綬ハ通常禮服通常服着用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ
- 三 略綬ハ別種二箇以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル絹ヲ以テ二箇若クハ數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外數箇合併ノ略綬ヲ製シ之ヲ佩用スルコトヲ得
- 四 我略綬ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ

第四十四 外國勳章佩用願規則

明治十八年十一月二十一日
布告第三十五號

明治十一年六月 第拾五號布告外國勳章佩用免許願手續左ノ通改正ス

外國勳章佩用願規則

第一條 外國ノ勳章ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ賞勳局總裁ヘ願出免許狀ヲ受クヘシ

第二類 第一章 位階 勳章 褒章

第二條 佩用願書ニハ勳章勳記其他關係書類ヲ添ヘ勅奏任官ハ直ニ賞勳局總裁ヘ華族ハ宮内卿判任官以下ハ本屬長官士族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局總裁ヘ差出スヘシ

第三條 外國ノ勳章ヲ佩用スル者死亡シタルトキハ三十日以内ニ其旨ヲ遺族又ハ親戚ヨリ華族ハ宮内卿士族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局ヘ届出ヘシ

第四條 外國ノ記章從軍記章人命救助記章博覽會記章ノ類ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ總テ此規則ニ準據スヘシ

右奉 勅旨布告候事

第四十五 勳章年金褫奪外國勳章佩用免許狀沒收方

明治十六年六月二十九日

布告第二十二號

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ヌ又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受クルコトヲ得ヌ

右奉 勅旨布告候事

〔一〕勳章年金褫奪及停止取扱手續改正 明治十九年七月一日 勅令第十九號各府縣

明治十六年九月二十九號勳章年金褫奪及停止取扱手續改正スルコト左ノ如シ

- 勳章年金褫奪及停止取扱手續
- 第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス
- 第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者
- 但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル
- 第二項 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
- 第三項 懲戒例及免罰條例ニヨリ免官セラレタル者
- 第四項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者
- 第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタル者ナルトキハ裁判確定ノ後裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十二條陸軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依リ處分ス
- 第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ
- 第四條 賞勳局總裁ハ其具申ヲ審查シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ於テ其褫奪ノ當否ヲ釐定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス
- 第五條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム
- 褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知スヘシ
- 第六條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ
- 第七條 褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ送納スヘシ但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ルトキハ其宣告書寫ヲ添フヘシ
- 第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

但公訴權消滅シタルトキ若クハ放免ノ旨渡ラ爲シタルトキハ亦其申狀ヲ詳記シテ之ヲ申告スヘシ
第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未ク其罪ヲ受ケスト雖モ現ニ拘留セラレタルトキハ檢察官ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁
（具申スヘシ）

第十條 外國勳章佩用免許狀ヲ沒收スルトキモ亦總テ此手續ニ準據スヘシ

●褒賞沿革要領

明治元年十月廿七日布告御東巡御道筋孝子義僕等ヲ褒賞シ養老ノ典ヲ舉ケ罹災ノ者ヲ賑恤ス仍テ府藩縣ニ令シテ一
般ニ施行セシム○二年七月布告ヲ以テ府縣奉職規則ヲ定メ規則中忠孝節義篤行者賞與施行方ヲ掲ケ○三年十一月八
日布告ヲ以テ府縣限リ賞與スル所ノ金銀ノ制限ヲ定ム○同年十二月前令定限以下タリトモ至急ヲ要セサル分ハ經同
ノ上處分スヘキ旨ヲ辨官ヨリ達ス○五年正月第十二號ヲ以テ庚午一月布告及同十二月辨官達ヲ廢シ輕賞ニ限リ臨機
處分方ヲ達ス○八年七月第二百一十一號達ヲ以テ篤行及奇特ノ者賞與條例及學校病院其他道路橋梁濟貧恤救等ノ費用
ヲ出ス者賞與規則ヲ定ム○九年十一月內務省令第三百三十二號達ヲ以テ一鄉一村一社等ノ名目ヲ以テ學校其他ノ費用
ヘ出金スルモノモ自今賞與ヲ賜與ス○十年十二月內務省令第三百七號達ヲ以テ學校病院其他濟貧等ノ費用ヘ出ケ村又
ハ職人ヨリ出金スル者賞與方ヲ心得シム○十二年六月第廿六號ヲ以テ八年第百廿一號達學校病院其他道路橋梁濟貧
恤窮等ノ爲メ金圓物品等ヲ差出シタル者懲役禁錮ノ刑ヲ受ケタル時ハ賞與セサル旨ヲ達ス○十四年十二月第六十三
號布告ヲ以テ褒章條例ヲ定ム○同月第百三號達ヲ以テ褒章條例取扱手續ヲ定ム○十五年一月廿三日內務省令第五號
達ヲ以テ學校病院道路橋梁濟貧恤救等ノ費用ヘ年賦出金現今年限内ノ者自費ヲ以テ棄兒養育中ノ者ハ十四年年限區
域ヲ立其金高ニ對シ八年第百廿一號達ニ依リ賞與セシム○同年九月內務省令第五十號ヲ以テ本年七月第五號達其他舊
賞與條例ニ據リ可取計分ハ來ル十一月三十日限リ完結シ以後都テ褒章條例ニ依リ可取計旨ヲ達ス○十六年一月第一
號ヲ以テ褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メ金銀財產等ヲ寄附シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ

又ハ褒章ト金銀木盃金圓ヲ賜フアルヘキ旨ヲ布告ス○同年三月第十七號達ヲ以テ金銀木杯又ハ金圓賜與手續ヲ定
ム○二十年五月勅令第十六號ヲ以テ臨時賞給褒章ヲ制定ス

第四十六 褒章條例 明治十四年十二月七日 布告第六十三號

褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉 勅旨布告候事

別紙

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者孝子順孫節婦義僕ノ類又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者疏河築堤修路墾田ノ業或ハ病院學校設立ノ類ヲ云フヲ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フコトアル

第二類 第一章 位階 勳章 褒章

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都
度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラ
レタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セ
ス

(褒章ノ圖畧之)

佩用式

一 褒章ハ左肋ノ邊ヘ佩フヘシ

但勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ヘ列シ帶フヘシ

(一) 褒章ト金銀木杯若クハ金圓賜與 明治十六年一月四日 勅令第一號

明治十四年^{十二}月^{十二}日 第六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金穀
財產等ヲ寄附シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フ
コトアルヘシ

右奉 勅旨布告候事

(二) 黃綬褒章臨時制定 明治二十年五月二十四日公布 勅令第十六號

朕黃綬褒章臨時制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年五月二十三日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第十六號

第一條 私財ヲ獻納シ防海ノ事業ヲ贊成スルモノニ授與スル爲メ黃綬褒章ヲ制定シ分テ
金章銀章ノ二種トス

第二條 黃綬褒章ヲ佩用シ又ハ沒收スルノ事項ハ明治十四年^{十二}月^{十二}日 第六十三號褒章條例ニ
據ル

第三條 黃綬褒章ノ圖式左ノ如シ

(圖式畧之)

(三) 褒章條例取扱手續

明治十四年十二月七日 太政官達第百三號官省院(使)廳府縣

今般第六拾三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事

但明治八年^七月^七日 第百貳拾壹號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事

第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否
ヲ審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒賞ヲ賜フノ限リニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒賞ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ
其申牒ニ據リ勅任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直接シ其他ノ者ハ内務卿又ハ
農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私係ニ係ル者ハ本條ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅任官并ニ從六位以上及ヒ勲六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ內務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ內務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

〔四〕金銀木杯金圓賜與手續明治十六年三月二十六日
太政官達第拾七號官省院(使)府縣

本年第壹號布告ノ旨ニ依リ金銀木盃又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候條此旨相達候事

金銀木盃金圓賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木盃又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ
定例

第一等 木盃三組品格ヲ三等ニ分ツ又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス

第二等 木盃三組品格ヲ三等ニ分ツ又ハ金五圓ヨリ多カラス五圓五拾錢ヨリ少カラス

第三等 木盃壹個品格ヲ三等ニ分ツ又ハ金貳圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ少カラス

但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金銀財產等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

寄附金額又ハ價格

拾圓未満

褒狀

但壹圓未満ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ十七年第二十二號公達ヲ以テ但書追加

拾圓以上百圓未満

木杯壹個

但五拾圓未満ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未満

木杯三組

但三百圓未満ハ五十圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

五百圓以上二千圓未満

銀杯壹個

但千圓毎ニ品格等差アリ

五千圓以上壹萬圓未満

金杯壹個

但貳千五百圓毎ニ品格等差アリ

壹萬圓以上

銀杯三組

第三條 金銀杯又タハ特別金圓又タハ褒章ト金杯又タハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之レヲ管理スルモノトス

褒狀又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事縣令管理施行スルモノトス

但勅任官并從六位以上及ヒ勲六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニ賜フヘキトキハ第四條ニ準據スヘシ

第四條 金銀杯又ハ特別金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルトキハ警視總監府知事縣令ヨリ內務卿又ハ農商務卿ニ具申シ內務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

賞勳局總裁ハ其中牒ニ據テ勅任官從六位以上及ヒ勲六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ內務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム

第五條 金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未タ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ授與セ

ス

未夕適例モ無之ニ付相伺候條何分之御指揮有之度候也

農商務省指令 明治十六年十一月廿二日

伺之揺離破船處分ノ要メニ應シタル地方廳ニ於テ可取扱申

但主管之件ニ付當省及指令候事

●人命救助者賞與及救助ノ爲メ溺死セシ者處分方伺指令 明治十六年十月三日 兵庫縣伺

右甲號五人ノ者本年四月十三日明石沖合字鹿ノ瀬へ漁業稼キ出テ烈風ノ起ルニ遭遇シ船轉覆ニ及ヒ各自船底ニ取付キ漂流セシヲ乙號之者之ヲ視認メ危難ヲ顧ミス該船ニ漕キ付ケ右五人ヲ我カ船中ニ引揚ケ歸路ニ向フ處何分風濤猛烈ニシテ進退自由ナラス其末該船モ亦轉覆ニ及ヒ候ヨリ各船体ニ取付居候モ屢々激浪ノ爲掀翻セラレ内五名ハ終ニ流亡致シ歿ル三人必死ノ處丙號二名ノ者亦危難ヲ顧ミス漕キ付來リ右三人ヲ自分船ニ救揚ケシモ既ニ船楫等破壞ニ及ヒ進退困難處幸ニシテ藤江村近傍へ漂着シ多人救來リ救ニ逢ヒ初テ萬死ヲ免レ候始末即チ別紙略山下松太郎外三名及ヒ堀江千太郎外一名具狀ノ通ニ有之候テ審按候處右乙者ハ甲者ヲ救授シ其末自分モ非常ノ難ヲ受ケシ者ナレハ褒章條例第一條ニ照スヘキハ勿論ニ有之而シテ丙者モ自己ノ危難ナルニ拘ハラス乙者甲者ヲ救授セシハ乙者ノ次キナル者ニシテ自ら優劣ハ有之候得共到底條例第一條ニ外ナラサル者ト相考候ニ付褒賞方可然御詮議相成度候將又右二付爰ニ懸然ナルハ乙號中山下木三兵衛外一名ノ流亡者ナリ彼レ若シ甲者ヲ救授セス全力ヲ盡シ歸路ニ向ハシメハ其性命ヲ全フスルヤモ計ル可カラス然ルニ多人救ヲ救授シ我カ狭小ナル船ニ打乗セ候ヨリ一層ノ艱難ニ陥リ終ニ水死ノ厄ヲ招キシ者ノ如ク相見へ至ク他ヲ救授シタルカ爲メ一命ヲ擲チシ者ト見做サ、ルヲ得ス果シテ然ラハ今其存命者ハ多少ノ賞譽ヲ得テ不幸ナル死者ニ何等追賞無之事實頗ル權衡ヲ得サル者ニ付是亦相當ノ追賞有之様度尤右ノ如キハ適當ナル成規無之候得共客年十二月第六十七號公達ニ照シ一般人民ニシテ巡査同様ノ働ヲナシタル者ト見做シ重傷死ニ至ル者ニ準シ吊祭扶助料ヲ下賜相成可然乎右等ノ如キハ後來儘可有之儀トモ相考候ニ付テハ何分ノ御詮議有之度右具狀勞御裁令ヲ仰候也

農商務省指令 明治十六年十一月二十日

具申之趣人命救助ノ爲メ溺死者處分之儀伺之通

●人命救助者褒賞取扱方ノ伺指令 明治十六年十二月一日 山口縣伺

爰ニ(甲縣)甲某アリ乙縣所管ノ海上渡航中暴風ノ爲メ難船ニ罹リタルヲ(丙縣)乙某之ヲ救授シ(乙縣)ハハ救助被救助者ヨリ何等ノ届出モナサス直ニ(丁縣)ハ甲某ヲ揚陸セシメタリ依テ被救者甲某ヨリ遭難救助セラレタル願末ヲ届出タリ然ルニ元來人命救助者ノ褒賞ハ遭難所々轄ノ縣廳ニ於テ取扱ヘキ者ト雖前陳ノ場合ニ在テハ遭難所ハ乙縣ニ屬スルモ他ニ何等ノ關係モ無之却テ遭難救助ノ願末取調方差支候條右褒賞ハ丁縣ニ於テ取扱候儀ト相心得可然哉此段相伺候也

農商務省指令 明治十七年一月二十四日

伺之通

第二章 恩給 恤救

●恩給沿革要領

明治八年四月第四十八號達ヲ以テ陸軍武官傷病扶助及死亡ノ者祭葬并家族扶助概則ヲ定ム○同年八月第四百十八號達ヲ以テ海軍退隱令ヲ定ム○九年一月第八號達ヲ以テ八年第四十八號達中ヲ改正ス○同年十月第九十九號達ヲ以テ陸軍武官恩給令罷役俸恤金令及將官退職令ヲ定メ前諸令ヲ廢ス○十三年四月第廿六號達ヲ以テ陸軍恩給令第七十六條恩給計算書ハ自今會計檢査院ニ付セシム○十六年五月第三十七號達ヲ以テ陸軍恩給令改正シ陸軍罷役俸恤金令ヲ廢ス○同年九月第三十八號達ヲ以テ海軍恩給令ヲ定メ海軍退隱令ヲ廢ス○十七年一月第一號達ヲ以テ官吏恩

給令ヲ定ム○同年同月第四號達ヲ以テ陸海軍將官同僚官軍人及武官ヨリ文官兼任者恩給特別ヲ定ム○同年二月第十
五號達ヲ以テ十三年第十六號達ヲ廢ス○同年四月第三十七號達ヲ以テ陸軍恩給令中ヲ更正ス○同月第三十八號達ヲ
以テ海軍恩給令中ヲ更正ス○同年六月第六十號達ヲ以テ陸軍恩給令中ヲ更正ス○同年九月第七十六號達ヲ以テ海軍
恩給令第三條第三十二條中ヲ改正ス○十八年一月第四號達ヲ以テ更ニ陸軍恩給令中ヲ更正ス○同月第五號達ヲ以テ
海軍恩給令中改正追加ス○同年三月第十五號達ヲ以テ官吏恩給令附則ヲ定ム○同月第十六號達ヲ以テ官吏恩給令附
則第五條傷疾疾病等ノ特例ヲ定ム○同年十二月第六十四號達ヲ以テ海軍恩給令第三條中ヲ改正ス○二十年五月宮
内省達第二號ヲ以テ宮内省官吏恩給令ヲ定ム○同月閣令第十三號ヲ以テ宮内省ト他ノ官廳ト交互轉スル官吏ノ恩給
年數計算方ヲ定ム○同年九月勅令第四十四號ヲ以テ十七年第四號達第三項以下ヲ改正ス○二十一年七月閣令第九號
ヲ以テ文武官恩給扶助料ヲ受ケタル者權利消絶支給停止ノ時取扱方ヲ達ス○同月閣令第十號ヲ以テ官吏恩給令及同
附則中ヲ改正刪除ス

第四十七 官吏恩給令

明治十七年一月四日
太政官達第一號官省院廳府縣

官吏恩給令

第一條 官吏恩給ハ文官勅任官奏任官判任官其本官奉職ノ年數及ヒ其年齡ニ依リ退官後之
ヲ支給ス但出仕ハ本官ニ準ス
第二條 恩給ハ官吏滿十五年以上奉職シ年齡六十歲ニ至リテ退官ヲ許シタル者又ハ年齡六
十歲ニ至ラスト雖モ滿十五年以上奉職シタル後廢官廢廳若クハ不治ノ疾病ニ罹リ其職ニ
堪ヘサル確證アル者ニ終身之ヲ給ス
大臣(參議各省卿)元老院議長(參事院議長)ハ滿二年以上奉職シタルノ後退官スル時ハ特旨

ヲ以テ終身恩給ヲ支給スルコトアル可シ

第三條 在職滿十五年以内ト雖モ公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重傷ヲ負ヒ其職ニ堪ヘス
退官セシメタル者亦終身恩給ヲ支給ス

第四條 公務ニ依リ重傷ヲ負ヒ若クハ不治ノ病ニ罹リ開業醫ノ診斷書ヲ具ヘテ其職ニ堪ヘ
サル旨ヲ證明スルコトヲ得ル時ハ其退官ヲ許シ在職年數ニ拘ハラヌ終身恩給ヲ支給ス

第三條及ヒ前項ノ場合ニ於テ盲聾或ハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ不治ノ症ニ罹リタル者ハ其退
官ヲ命シタルト又ハ退官ヲ許シタルトニ拘ハラヌ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ現官相當恩給
ノ外ニ猶其最下金額十分ノ七迄ヲ増給スルコトアル可シ

開業醫ノ診斷書ニ就キ疑フヘキモノアルトキハ本廳長官ハ更ニ醫員ヲ派遣シ其診斷ニ依
リ事實ノ當否ヲ判定ス可シ

第五條 恩給ハ退官現時ノ俸額ニ依ル其給額ハ奉職滿十五年ニシテ俸給年額ノ四分ノ一即
チ二百四十分ノ六十トシ爾後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿三十五年ニ至リ二百四
十分ノ八十即チ俸給年額ノ三分ノ一ニ至ツテ止ム但非職中退官スル者ト雖モ恩給ハ其在
職俸給ノ年額ニ照シテ之ヲ支給ス

第二條ノ第二項并ニ第三條第四條ニ掲クル所ノ十五年未滿ノ奉職者ニ恩給ヲ支給スルコ
トアルトキハ其給額ハ俸給年額二百四十分ノ六十ニ當ルノ額ヲ以テス
進級後一年未滿ニシテ退官シタル者ハ前官ノ俸給ニ依リ恩給ヲ支給ス但公務ニ起因スル

傷痍疾病ノ爲メ退官シタル者ハ此限ニ在ラス

第六條 奉職滿十五年ニ超ル者ト雖モ年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及ヒ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ハ恩給ヲ支給セズ

第七條 奉職年數ノ計算ハ明治四年八月ヨリ起算ス其以後任官ノ者ハ其拜命ノ日ヨリ起算ス但年齡二十歳未滿ノ奉職年數ハ算入セズ

明治四年八月以前ヨリ奉職シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ別ニ一時賜金トシテ給與ス第十七年五號達ヲ以テ(金額ヲ以テ)ノ下(恩給支給ノ際)ノ六字ヲ刪ル

第八條 武官ヨリ文官ニ轉シ若クハ退官後再ヒ任官シタル者ハ前官後官ノ奉職年數ヲ通算ス但御用滯在中ノ年月及ヒ嘗テ滿年賜金若クハ退官一時賜金ヲ受ケタル者ノ前官年數ハ算入セズ

第九條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ爾後退官ノ節其俸額前官ヨリ少キトキハ仍ホ前官ノ俸額ニ依リ恩給ヲ支給ス

第十條 勅奏任官奉職中既ニ恩給ヲ受ク可キ期ニ至リタル者及ヒ其退官恩給ヲ受クル者死去セシトキ又ハ其期ニ至ラスト雖モ公務ニ依リ死去セシトキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ其寡婦ニ扶助料トシテ死者生存中ノ恩給年額四分ノ二以内ヲ終身支給スルコトアル可シ

寡婦ナケレハ其繼嗣ノ孤兒男女并ニ實子滿二十歳ニ至ル迄之ヲ給スルコトアル可シ但寡婦ハ其本夫ノ在官中ニ入籍シタル者ニ限ル

判任官ハ公務ニ依リ死去セシトキニ限リ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ本條及第十二條第十三條第十四條ニ準スルコトアルヘシ但其扶助料ハ轉給セズ十八年七月第四十一號達ヲ以テ本項ヲ改正ス

第十一條 寡婦復籍若クハ再嫁シ又ハ死去シタルトキハ其扶助料ハ更ニ繼嗣ノ孤兒二十歳未滿ノ者ニ給ス

扶助料ヲ受クル孤兒既ニ嫁娶シ若クハ官廳ヘ奉職シ俸給ヲ受ケ又ハ諸官立學校ノ官費生徒ニ爲リタルトキハ其扶助料ヲ給セズ

第十二條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケタル寡婦復籍若クハ再嫁シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキトキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二以内ヲ終身支給スルコトアル可シ

第十三條 其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スルトキハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ其恩典ヲ失フコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡五十歳以上其未滿ハ廢疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及祖母ハ夫ナキ者孰レモ本人死歿ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戶籍ニ在リシ者ニ限ル

第十四條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セル二十歳未満又ハ二十歳以上ト雖モ癱疾不具ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラヌ五箇年分ヨリ多カラサル額ヲ一時限リ支給スルコトアル可シ

第十五條 恩給ハ在官者退官ノ翌月ヨリ支給ス扶助料ハ恩給ヲ受ケ又ハ受ク可キ者死去ノ翌月ヨリ支給ス其轉給スル者亦同シ

第十六條 恩給及ヒ扶助料ノ給否ハ本屬長官若クハ其所管地方長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ太政大臣之ヲ裁定ス

恩給及ヒ扶助料ノ給與ニ關シ若シ穩當ナラサル廉アルコトヲ覺知シタル者ハ之ヲ其本屬長官若クハ地方長官ニ請願シ而シテ猶ホ穩當ノ指令ヲ得サルトキハ本人ヨリ直ニ之ヲ太政官恩給局ニ請願スルコトヲ得但之ヲ裁判所ニ訴フルコトヲ許サス

第十七條 恩給若クハ扶助料ヲ給スル本人ニハ太政官ヨリ其證書ヲ下付ス

第十八條 恩給ヲ受クル者公權ヲ剝奪セラレタルトキハ全ク之ヲ止メ又左ノ各項ニ該ルトキハ其時間ノミ之ヲ停ム

一 公權ヲ停止セラレタル時

二 再ヒ官ニ就キ俸給ヲ受クル時

三 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

四 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラルトキ又ハ第十八條ノ第三項若クハ第四項ニ該ルトキハ之ヲ止ム

第二十條 恩給ヲ支給ス可キ退官者アルトキハ本屬長官ハ本人ノ履歷書其傷痕疾病ニ起因スルモノハ其證書ヲ具シ且事實ヲ證明シテ之ヲ太政官へ進達シ以テ恩給ノ下付ヲ請求ス可シ

第二十一條 扶助料ヲ願ハントスル者ハ本人主名ヲ以テ親族二名後見人アリハ其親族ナキトキハ同郷ノ戸主二名連署セシ願書ニ其戶籍ノ寫ノ恩給若クハ扶助料給與又公務ニ依リ死亡セル者ハ其原因症候等照査ニ供ス可キ證據書ヲ添ヘ之ヲ所管地方廳ニ出願ス可シ地方長官ハ其事實ヲ證明シテ之ヲ太政官ニ進達シ以テ扶助料ノ下付ヲ請求ス可シ但一箇年經過ノ後出願スル者ハ之ヲ受理セス

第二十二條 二十一年七月閣令第十號ヲ以テ本條ヲ刪除ス

第二十三條 恩給及ヒ扶助料ノ金額ハ毎年六月十二月ニ於テ其前半年分半年ニ滿タサルモ八月ヲ以テ計算スヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經由シテ之ヲ交付ス

第二十四條 恩給若クハ扶助料ノ金額ヲ受領セントスル者ハ其證書及ヒ本人生存證書ヲ表證シ別ニ受領證書ヲ差出ス可シ

第二十五條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスルトキハ金額交付

期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第二十六條 恩給並ニ扶助料ハ一箇年以上其受領ヲ請求セサルトキハ其時間ノ金額ハ支給セズ

第二十七條 恩給並ニ扶助料ニ關スル願書ハ郡區長戸長證書ハ戸長ノ奥印ヲ要ス

第二十八條 盜難若クハ水火災等ニテ恩給若クハ扶助料給與ノ證書ヲ失ヒタルトキハ速ニ所管地方廳ヲ經テ恩給局ニ其旨届出可シ

第二十九條 官吏滿五年以上奉職ノ者十一年未滿ニシテ退官セシ時ハ現俸給三ヶ月分ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ同上ノ者ニハ現俸給四ヶ月分ヲ給ス但恩給ヲ受ル者并ニ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ニハ總テ之ヲ給セス十八年七月第四十一號達ヲ以テ本條以下ヲ追加ス

第三十條 官吏在官中死去ノ者ハ現俸給三ヶ月分ヲ給ス

〔一〕陸海軍將官同等軍人及武官ヨリ文官兼任ノ者恩給支給方明治十七年一月四日 大政官達第四號官省院廳府縣 陸海軍大將滿二年以上在官ノ者退職若クハ死亡スル時ハ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアルヘシ 陸海軍中將少將并ニ同等ノ軍人ニシテ特別ノ功績アル者ハ服役實期十一年未滿ト雖特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ 陸海軍武官ヨリ文官ヲ兼任スル者武官ニシテ文官ノ職ヲ兼現役十一年以上ニハ未滿ニシテ退官若クハ從軍年ヲ合算ス武官現役十一年以上ニハ未滿ニシテ退官若クハ從軍年ヲ合算ス

ハ死亡スルトキハ陸海軍恩給令ニ依リ恩給ヲ支給シ其現役滿十五年從軍年以上ノ者ニハ本兼官ノ内其恩給額ノ多キ方ニ就テ之ヲ支給ス但文官ノ恩給ヲ支給スルトキハ官吏恩給令第五條ニ依ル勅令第四十七號ヲ以テ本項以下改正 文官ノ恩給ヲ受ケ若クハ之ヲ受ケヘキ權ヲ有シテ死歿シタルモノト雖モ其寡婦孤兒扶助料ハ總テ陸海軍恩給令ニ依ル

〔二〕官吏恩給令附則明治十八年三月二十七日 大政官達第十五號官省院廳府縣 官吏恩給令附則左ノ通相定候條此旨相違候申

第一條 本令第二條第三條及第四條ニ該ル者退官スルトキハ同時ニ其恩給願書第一及證據書類ヲ本廳長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ係ル者ハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル長官ニ之ヲ差出スヘシ

第二條 本令第十條第十一條第十二條第十三條及第十四條ニ該ル者ハ其扶助料願書第二及證據書類ヲ居住地ノ地方長官ニ差出スヘシ二十一年七月四日附令第十號ヲ以テ(ヲ)官ニ差出スヘシ(本籍)トアルヲ(居住地)ト改ム

第三條 恩給願書若クハ扶助料願書ヲ受領セシ長官ハ査覈ノ上轉給願書ヲ除クノ外其計算書第三ヲ製シ本令第二十條ニ據リ該書類ヲ大政官ニ進達スヘシ

第四條 恩給願書ニ添フヘキ證據書類ハ左ノ如シ

- 一 履歷書
 - 二 戸籍寫負傷若クハ罹
 - 三 診斷書病者ニ要ス
 - 四 見証證書第四 公務ニ依リ負傷
- 第五條 本令第四條ニ掲クル最下金額十分ノ七迄ノ増給等ハ左ノ如シ
- 一 二肢ヲ亡シ或ハ兩眼ヲ盲スル者 十分ノ七
 - 二 前項ニ等シキ傷痍或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ六
 - 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フ者 十分ノ五

第二類 第二章 恩給 恤救

十八年十二月
內閣達第七十
二號ヲ以テ從
前大政官所轄
ノ事務ハ當分
內閣ニ於テ管
轄ス(第八ノ
十二項)

四 前項ニ等シキ傷痕或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ四
 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者 十分ノ三
 六 前項ニ等シキ傷痕或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ二
 第六條 本令第三條ニ掲グル公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重傷ヲ負フトハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ失フニ等シキ者ニ限ル
 第七條 公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ負傷シ恩給ヲ受ケタル者仍ホ重症ニ趨キシトキ左ノ期限内ニ出願スレハ査服ノ上更ニ増加恩給ヲ下賜スヘシ
 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ二箇年
 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者及之ニ等シキ者ハ三箇年
 第八條 前條ニ當該シ増加恩給ヲ願ハントスル者ハ其願書^{第五}ニ診斷書及恩給證書ヲ添ヘ之ヲ居住地ノ地方長官ニ送^{書式}出スヘシ同上
 第九條 年齡六十歳未満ト雖モ滿十五年以上奉職シ服務紀律違犯ノ故ニ非スシテ諭旨退官ノ者若クハ非職滿期免官ノ者ハ本令第二條廢官廢職ノ例ニ依ル
 第十條 官吏滿五年以上奉職ノ後本官ヲ免シ直ニ御用掛或ハ准官吏等ニ採用ノ者ハ其際恩給或ハ本令第二十九條ノ一時賜金ヲ給セス其御用掛或ハ准官吏退職ノトキニ於テ前官ニ對スル恩給若クハ一時賜金ヲ下賜ス但御用掛或ハ准官吏奉職中自己ノ便宜ニ依リ其職ヲ辭スル者及服務紀律ニ違ヒ諭旨退職ノ者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免職ノ者ハ恩給或ハ一時賜金支給ノ限ニ在ラス
 第十一條 奉職年數八月ヲ以テ計算スヘシ但退官同月内ニ再任セシ者ハ其月ヲ二箇月ニ算スルヲ得ス
 第十二條 非職中ノ年月ハ奉職年數ニ算入スヘシ但官吏非職條例第七條ニ該ル者ニシテ非職俸ヲ受ケサルノ年月ハ之ヲ除算ス

第十三條 本令第七條第二項ニ掲グル月俸トハ明治四年六月東京淺草米蔵ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一箇月分ニ相當スル金額ヲ云フ
 第十四條 本令第二十九條及第三十條ノ一時賜金ハ非職中退官或ハ死去スル者ト雖モ其本俸ノ額ニ照シテ之ヲ支給ス
 第十五條 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ服務紀律ニ違ヒ諭旨退官ノ者及懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官ノ者再ヒ任官スルコトアルモ其前官年數ハ之ヲ通算セス
 第十六條 公務ニ依リ死去ノ者アルトキハ其事實ヲ保證シタル書面^{見証人アレハ}及履歷書又恩給ヲ受クルノ期ニ達シタル者死去セシトキハ其履歷書ヲ本廳長官ヨリ遺族ニ下付スヘシ
 第十七條 扶助料願書ニ添フヘキ證據書類ハ左ノ如シ
 一 死者履歷書 在官中死去シタ
 二 戸籍寫
 三 恩給證書 轉給ノトキニ要ス
 四 醫師ノ死亡届書若クハ檢案書 公務ニ依リ死去シタルトキニ要ス
 五 本廳長官保證書 公務ニ依リ死去シタルトキニ要ス
 第十八條 本令第十三條及第十四條ニ掲グル廢疾又ハ不具ノ者扶助料ヲ願ハントスルトキハ前條書類ノ外仍ホ其診斷書ヲ添フヘシ
 第十九條 本令第十條ニ掲グル恩給年額四分ノ二以内ノ差等ハ公務ニ依リ死去セシ者ノ寡婦ニハ四分ノ二其他ノ寡婦ニハ四分ノ一トス
 第二十條 本令第十條ニ掲グル恩給ヲ受ケヘキ期ニ至ルトハ奉職滿十五年以上ヲ云フ
 第二十一條 扶助料ヲ受ケタル寡婦其支給ヲ止メラルトキハ轉シテ之ヲ繼嗣ノ孤兒ニ給ス
 第二十二條 扶助料ヲ受ケタル寡婦死去シテ孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケタル孤兒死去シ仍ホ其亡夫或ハ亡父ノ父母又

第二類 第二章 恩給 恤救

ハ祖父母アルトキハ本令第十二條ノ例ニ依ル

第二十三條 本令第十三條ニ掲クル母及祖父母癡疾又ハ不具ニシテ産業ヲ管ムコト能ハス他ニ之ヲ奉養スル者ナキトキハ同條但書及祖父ノ例ニ依ル

第二十四條 恩給或ハ扶助料ノ出願ヲ許可シタルトキ恩給許可令ハ本廳長官ヲ經テ直ニ本人ニ下付シ扶助料許可令ハ内務省ヲ經テ本人所在ノ地方廳ヲシテ之ヲ交付セシム

恩給證書ハ大藏省內務省ヲ經テ本人所在ノ地方廳ヲシテ之ヲ交付セシム 同上閣令ヲ以テ本條ヲ改正ス

第二十五條 本令第十六條第二項ニ掲クル請願ノ期限ハ恩給證書受領ノ日ヨリ三箇月トス其期限ヲ過ルモノハ受理セ

第二十六條 本令第二十五條ノ出願ヲ許可シタル地方廳ニ於テハ直ニ其旨ヲ大藏省ニ届出テ且本人移住ノ地方廳ニ通牒スヘシ 同上改正

第二十七條 恩給ヲ受クル者賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルトキハ本令第十八條第一項ニ準シ扶助料ヲ受クル者同上ノトキハ本令第十九條ニ準ス

第二十八條 本令第十八條ニ掲クル再ヒ官ニ就キ俸給ヲ受クルトハ准官吏以上ヲ云フ 同上閣令ヲ以テ本條中第一項ヲ删除ス

第二十九條 同上本條删除 官吏恩給令附則諸書式

第一書式甲

恩給願書

某儀

何年何月何奉職罷在候處(年齢六十歳以上ノ老體ト相成退官出願候ニ付御許可ノ上ハ)(何々)(何々)相當ノ恩給下賜度證據書類相添此段奉願

△廢官廢職免官ノ者ハ元ノ官名職名ヲ記スヘシ

候也

年月日

本廳長官宛

△官氏名印

第一書式乙

恩給願書

某儀

何年何月間奉職罷在候處何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ(何)部ニ何ノ傷疲ヲ負ヒ(何々)爾來治療仕候得共遠ニ(何々)(何々)退官相願候ニ付御許可ノ上ハ(相當ノ恩給)(相當ノ恩給并ニ増加恩給)下賜度證據書類相添此段奉願候也

年月日

官氏名印

本廳長官宛

第二書式甲

扶助料願書

明治何年何月ヨリ恩給下賜相成居候處(何年何月間奉職罷在候處)何年何月何日死亡仕候ニ付某へ相當ノ扶助料下賜度證據書類相添此段奉願候也

夫(父)氏名儀

年月日

何府(縣)國郡(區)町(村)番地

何族(平民)

故何某寡婦(孤兒)

氏名印

同

親族(後見人)

氏名印

同

親族

氏名印

地方長官宛

[戸長]

氏名印

郡(區)長

氏名印

第二書式七

扶助料願書

夫(父)官某儀

何年何月間奉職罷在候處何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ(何ノ部ニ何ノ傷痕ヲ負ヒ)何々何年何月何日死亡仕候就テハ某へ相當ノ扶助料下賜度證據書類相添此段奉願候也

何府縣國郡(區)町村番地

何族(平民)

故何某寡婦(孤兒)

氏名印

同

親族(後見人)

氏名印

同

親族

氏名印

地方長官宛

[戸長]

氏名印

郡(區)長

氏名印

第二書式丙

扶助料願書

故官氏名寡婦

第三書式

地方長官宛

明治何年何月ヨリ扶助料下賜相成居候處何年何月何日(復籍(再婚)(何々)仕候ニ付更ニ某へ扶助料轉給相成度証據書類相添此段奉願候也

某儀

何府縣國郡區町(村)番地
故何某孤兒 氏 名

同 親族後見人 氏 名 印

同 親族 氏 名 印

戸長 氏 名 印

郡區長 氏 名 印

恩給計算書 官 氏 名 明治何年何月何日 何年何月何日

第三書式

第四書式

明治何年何月

何官職 取調主任 官 氏 名 印

滿何年前官現官俸給貳百四拾分ノ若干 此年額若干圓

何年何月何日	任	何官	何年何箇月
何年何月何日	退	何官	何年何箇月
何年何月何日	任	何官	何年何箇月
何年何月何日	任	何官	何年何箇月
何年何月何日	任	何官	何年何箇月
何年何月何日	退	何官	何年何箇月
何年何月何日	退	何官	何年何箇月

通計何年何箇月

見證々書 官 氏 名

右明治何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ何ノ部ニ何ノ傷痕ヲ負ヒ候ヲ某何ノ際見認候也

見證人 氏 名 印

明治何年何月何日

明治何年何月何日

第二類 第二章 恩給 恤救

第五式

增加恩給願書

其儀

何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ何ノ部ニ何ノ傷病ヲ負ヒ候ニ付何年何月何日退官御許可ノ上恩給下賜ノ處該傷病漸次重症ニ變シ(何々)候ニ付增加額下賜變更相成候様御除議ヲ被達度證據書類相添此段奉願候也

何府(縣)國郡(區)町(村)番地

何族

元何官

氏名印

地方長官宛

戸長

郡區長

氏名印

年月日

同 同
同 同

〔三〕官吏恩給令附則第五條傷病疾病等差例

明治十八年三月二十七日
太政官達第十六號官省院廳府縣

交官傷病疾病等差例

公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ官吏恩給令附則第五條ニ掲ケル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルコト概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ盲スル者全盲ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條 咀嚼言語ノ兩機能ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス

第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス

第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス

第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十條 言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十一條 胃腸膀胱等ニ痙攣ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第十二條 腸膀胱尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十三條 陰莖或ハ睪丸ヲ全失スル者ハ第三項トス

第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏莖ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

- 第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
 - 第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス
 - 第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス
 - 第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス
 - 第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒著クハ強硬等ノ爲メニ把握採摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス
 - 第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尚把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス
 - 第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス
 - 第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス
 - 第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
 - 第二十四條 附骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス
 - 第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス
 - 第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス
 - 第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス
 - 第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス
 - 第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス
 - 第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアル者ハ第六項トス
- 〔四〕宮内省官吏恩給例** 明治二十年五月十三日
宮内省達第二號北海道廳府縣
宮内省官吏恩給例左ノ通之ヲ定ム
- 宮内省官吏恩給例

- 第一條 恩給及ヒ扶助料ノ給否ハ其所屬長官ニ依リテハ安頭若クハ其居住地地方長官ノ證明ニ依リ内藏寮ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス
- 第二條 恩給若クハ扶助料ヲ給スル本人ニハ宮内大臣ヨリ其證書ヲ下付ス
- 第三條 恩給ノ願書ハ本人ヨリ其所屬長官扶助料ノ願書ハ其居住地ノ地方長官ニ差出シ其願書ヲ受領セシ長官ハ之ヲ宮内大臣ヘ進達シ其下付ヲ請求ス可シ
- 第四條 恩給及ヒ扶助料ノ金額ハ内藏寮ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經由シテ之ヲ交付ス
- 第五條 宮内省官吏ノ奉職年數及傷痍疾病ニ對スル恩給並ニ其給額奉職年數ノ計算扶助料ノ轉給其他權利ノ停止等ハ總テ一般官吏恩給令ノ例ニ依ル
- 〔五〕宮内省ト他ノ官廳ト交互轉スル官吏ノ恩給年數計算方 明治二十年五月十七日
閣令第十三號各官廳
宮内省ヨリ他ノ官廳ニ轉シ若クハ他ノ官廳ヨリ宮内省ニ轉シタル官吏ノ恩給ハ宮内省ト他ノ官廳トノ奉職年數ヲ通算シテ其金額ヲ定ムルモノトス
- 〔六〕文武官恩給令ニ依リ恩給扶助料ヲ受ケタル者權利消絶又ハ支給停止ノトキ取扱方 明治二十年七月四日
閣令第九號
文武官恩給令ニ依リ恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者權利消絶又ハ一時支給ヲ停メタルトキ其取扱方左ノ通之ヲ定ム
但明治八年^四大政官第四十八號達陸軍武官傷痍扶助死亡ノ者祭葬家族扶助概則及同年^八大政官第四百十八號達海軍退隱令ニ依リ扶助料若クハ退隱料ヲ受ケタル者モ之ニ準ス
- 第一條 官吏恩給令ニ依リ恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者權利消絶シタルトキハ地方廳ニ於テ其支給ヲ止メ且其證書ヲ收メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ内閣ニ還付シ其旨ヲ大藏省ニ報告ス但扶助料ヲ受クヘキ者又ハ扶助料ヲ移轉スヘキ者アルトキ地方廳ハ其證書ヲ收メス扶助料請願ノ証ト爲サシム

前項但書及陸海軍恩給令第四十七條但書ノ場合ニ於テハ地方廳ハ該權利消絶者ノ恩給若クハ扶助料ノ支給ヲ止メタル旨ヲ速ニ大藏省ニ届出ヘシ

第二條 恩給若クハ扶助料ノ支給ヲ停止ムヘキトキ及其停止メタルモノヲ復給スヘキトキハ地方廳ニ於テ其處分ヲ爲シ其旨大藏省ニ届出ヘシ

前項ノ届出アルトキハ大藏省ハ之ヲ内閣會計局及會計検査院ニ通牒スヘシ

第三條 恩給若クハ扶助料ノ支給ヲ止メタルトキハ其止ムル迄ノ金額ハ交付期節ニ拘ラス賍替ト引換ニ交付スヘシ

第四條 各廳ニ於テ左ノ各項ノ處分ヲナシタルトキハ速ニ之ヲ大藏省ニ通知シ大藏省ハ之ヲ内閣會計局會計検査院及本人居住地ノ地方廳ニ通知スヘシ但本人居住地ノ地方廳ニ於テ本條ノ通知ヲ得タルトキハ第一條第二條ノ届出ヲ爲スニ及ハス

第一項 恩給ヲ受ケタル者ヲ再ヒ陸海軍現役ニ就カシメ又ハ之ヲ退カシメ若クハ准官吏以上府縣立學校職ニ採用シ又ハ之ヲ差免シタルトキ

第二項 扶助料ヲ受ケタル者ヲ官廳ニ採用シ俸給ヲ支給シタルトキ

第三項 恩給ヲ受ケタル者ノ公權ヲ剝奪シ若クハ停止シタルトキ

第四項 扶助料ヲ受ケタル者禁錮以上ノ刑ニ該リタルトキ

第五項 恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者ヲ賭博犯處分規則ニ依リ懲則シタルトキ

第六項 恩給ヲ受ケタル者其在職中ノ行爲ニ因リ陸海軍將校免職條例ニ依リ免官シタルトキ

第七項 官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者ヲ官費生徒ト爲シタルトキ

第五條 前條ノ場合ニ於テ大藏省ニ通知スルトキハ左ノ條件ヲ具フヘシ

一本人ノ族籍官氏名

一恩給扶助料退還料等ヲ交付スル官廳名

一任補罷免若クハ官費生徒トナシタル年月日

一就職ノ月日任補ノ月日ト違フトキハ其月日

一第三項第四項第五項ニ該ルモノハ宣告文ノ寫其官費ヲ爲シタル年月日

〔七〕 恩給扶助料ヲ受ケル者受領地轉換轉籍等取扱順序ヲ定ム 明治十八年九月二日 內務省達甲第二十八號府縣

陸海軍恩給令并官吏恩給令ニ依リ恩給若クハ扶助料ヲ受ケル者其受領地轉換又ハ轉籍等ノ時取扱順序左ノ通相定候條此旨相達候事

但明治十二年六月內務大藏兩省ノ第三十號達ハ廢止ス

一恩給若クハ扶助料ヲ受ケル者成規ニ從ヒ其受領地ヲ轉換セントスルトキ現授受ノ管廳ニ於テ其願ヲ受ケタル節ハ開届タル上述ニ其旨轉換先キ管廳ヘ通知スヘシ又轉換先キノ管廳ニ於テ先ツ其願ヲ受ケタル節ハ現授受ノ管廳ヘ照會ノ上開届クヘシ

一寄留地管廳ニ於テ恩給若クハ扶助料ヲ受ケル者其受領ノ權利消絶(死亡者ヲ除ク)ニ至リ又ハ轉籍及改姓名等ノ如キ本人ニ異動ヲ生スルトキハ其旨直ニ本籍(戸長)ヨリ本管廳ヘ届出其管廳ハ之ヲ速ニ寄留地ノ管廳ヘ通知スヘシ

一前各項ニ係ルモノハ其處分ヲ爲シタル管廳ヨリ其族籍姓名金額及開届并異動届出ノ年月日等ヲ詳記シ速ニ內務大藏兩省ヘ届出ヘシ

一明治八年第四十八號公達陸軍武官傷疾扶助概則并同年第四百十八號公達海軍退還令ニ依リ退還料及扶助料ヲ受ケル者モ右同様取扱フヘシ

〔八〕 年金恩給ノ支拂令達ヲ得タル後受給者轉住シ年金恩給及扶助料ヲ受ケル者受領地ヲ

轉シタルトキ交付方 明治十九年十二月十四日 大藏省訓令第五十八號北海道廳府縣

年金恩給請願ノ支拂方令達ヲ得タル後受給者若シ管下隔地ヘ轉住ノ爲メ既ニ指定セシ支拂所ヨリ選隔ナルトキ又年金恩給及扶助料ヲ受ケルモノ出願期限後受領地ヲ轉シ他管下ニ轉住ノモノアルトキハ本年當省訓令第三十五號ニ準シ受取

人ニ交付セシムルコトヲ得

● 伺指令

● 在官中死亡者恩給下賜ノ伺指令 明治十九年十月三日 沖繩縣伺

去ル明治十七年一月四日太政官第一號御達ノ官吏恩給令第三十條ニ「官吏在官中死去ノ者ハ現俸給三箇月分ヲ給ス」トアリ亦本年四月二十九日勅令第三十六號判任官俸給令第七條ニ「官ニ在リテ死亡シタル者ハ月俸三箇月分ヲ其遺族ニ給ス」トアリテ今日尚兩令共存セル以上ハ各別ニ支給シテ然ルヘキヤ

大藏省指令 明治十九年十月十三日

伺ノ趣判任官俸給令第七條ニ據リ支給ノモノヘハ官吏恩給令第三十條ノ賜金ハ支給ノ限ニ之ナキ義ト相心得ヘシ但高等官俸給令ニ據リ支給ノモノモ本文ニ準ス

第四十八 陸軍恩給令 明治十六年九月十一日 太政官達第三十七號官省院廳府縣

陸軍恩給令別冊ノ通改正候條此旨相違候事
但陸軍罷役俸並恤金令ハ廢止ス

陸軍恩給令

第一章 總則

第一條 陸軍恩給ハ陸軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス
一 退職恩給

二 免除恩給

三 寡婦(孤兒)扶助料

四 賑恤金

五 給助金

第二條 退職恩給免除恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ一時限り之ヲ給ス

第三條 軍人ハ定限ノ年齢ニ達スレハ現役ヲ辭シテ恩給ヲ受クルヲ例トス其定限左ノ如シ

會計監督 軍醫監 藥劑監

六十

憲兵大中佐 會計副監督 軍醫正 藥劑正 馬醫監

五十七

步騎砲工輔重兵大中佐 憲兵少佐 會計監督補 會計一等軍吏 一等軍醫

五十四

一等劑官 一等馬醫

五十四

步騎砲工輔重兵少佐 憲兵大尉 會計二等軍吏 二等軍醫 二等劑官 二

五十一

等馬醫 砲工兵上等監護

五十一

步騎砲工輔重兵大尉 憲兵中少尉 會計三等軍吏 三等軍醫 三等劑官

四十八

三等馬醫 軍樂長 砲工兵監護 砲兵監守 砲兵監查 諸工長 諸工下長

四十八

步騎砲工輔重兵中少尉 憲兵下士 會計書記 看護長 馬醫生 軍樂次長

四十五

軍樂手

四十五

步騎砲工輜重兵下士 憲兵卒 雜卒 諸工

四十
三十五

三十七年四月第
三十七號達ヲ
以テ(憲兵卒)
ノ下(會計卒)
看(病卒) (雜卒)
ヲ(刑) (加)
諸工) (加)

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特抜又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトヲ得但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス

第五條 上長官士官准士官未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ士官以上ハ陸軍卿準士官ハ其所管長官旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

一 公權停止ノ時

二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死歿ノ日 陸軍官憲ヨリ報告ノ日ヨリ一箇年間願出サル者ハ其權利消絶ス

恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル年間ノ金額ハ之ヲ給セ

第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領セシ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ陸軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セズ

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ陸軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス

ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ヒ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 免除恩給ハ下士及ヒ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷病若クハ疾病ノ爲メ免官若クハ免役スル者ニ之ヲ給ス

若クハ(或ハ)ノ下(傷病)ノ五字ヲ加

前條第二項ニ掲クルカ如キ傷痕疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據明
亮ニシテ免官若クハ免役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其免除恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙號表面ノ如シ但十一年
未滿者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 准士官以上傷痕ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職スル者ハ現官等ニ依リ
恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候トモ詳細之ヲ開陳ス可シ

第十四條 傷痕疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證證書又ハ公文若クハ查問會議口供書ノ
寫ヲ以テ之ヲ證明スベシ

第十五條 傷痕疾病不治ノ狀ハ陸軍病院長及ヒ主任醫官（地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者
ハ其院長並ニ主任醫師）ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ證ス可シ

其診斷證書ハ傷痕疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ
病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ陸軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷書ヲ要ス

第十六條 傷痕疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサル
ヤ否ヤハ當該所管ニ於テ檢査判定シ所管長官ヨリ之ヲ陸軍卿ニ呈ス可シ陸軍卿ハ更ニ軍
醫本部ニ下シテ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス（十七年四月第三十七號達ヲ以テ（制定シ）下（尚
ニ達ヲ以（尚）本檢閱監軍部長ノ審查ヲ經テ之ヲ陸軍卿ニ呈ス）ニ更ム

第十七條 恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但下士以上其官階ニ進ミ未タ進級條例ノ停
年最下限ノ半ニ至ラスシテ退職免官ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘若クハ公務

ノ爲メ傷痕ヲ受ケ或ハ戰地ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第十八條 准士官以上退職恩給ヲ願フ時所管長官ハ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ
休暇ヲ命ス下士卒免除恩給ヲ願フ時亦該長官同上ノ日ニ於テ直ニ免官若クハ免役ス可シ

第十九條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ
外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シ
キ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者

二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者

四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者

六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

第二十條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キ
タル者左項ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負
傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルノ際其傷痕ノ爲メ服役シ難キ確

定ヲ得タル者ニ限ル

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年
- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者現役ヲ離レシ日

ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十一條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

- 一 戰鬪或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ従事シ爲メニ發病死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シ死歿シタル軍人ノ寡婦
- 二 退職若クハ免除恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料ノ額第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十二條 戰鬪及ヒ公務ノ爲メ傷痕ヲ受クルト雖モ其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死歿シ

タル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十三條 戰鬪中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十

一條第一項ヲ適用ス

第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一ヶ年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セル者ニ限ル

第二十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラズ家名ヲ繼承スル者ニ限ルニシテ其家名繼承ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額ノ三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十七條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十八條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレハ時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス

第二十九條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若ク

ハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終身給スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ且孰レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長(戸長)ノ與印セル願書ヲ以テ之ヲ地方廳ニ呈ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ者ハ見證書若クハ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痕疾病ニ基ク者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷證書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ證明ス可シ

第四章 服役年算則

第三十一條 服役年ノ始期及ヒ終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ總テ同月ヲ以テ始トス但明治四年八月以前ヨリ勤仕シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一ケ年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス
 - 二 下士以上ハ其初任當日ヨリ起算ス
 - 三 徴兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算ス
 - 四 壯兵其他諸種ノ方法ヲ以テ軍籍ニ入りタル者ハ其就役ノ當日ヨリ起算ス
 - 五 上長官士官准士官ハ退職恩給ノ願書該長官ヨリ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ヲ以テ終期トス
 - 六 下士卒ハ免官免役ノ日ヲ以テ終期トス
- 第三十二條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス
 士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス
- 第三十三條 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナル者ハ海軍服務ノ年月ヲ通算ス又文官轉シテ陸軍軍人トナリタル者並ニ陸軍軍人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス

第三十四條 豫備後備ニ在ルノ月日ハ服役實期ニ算セスト雖モ復習ノ外現役ニ徵集スルコトアル時ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十五條 退職免役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其歸營以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セズ

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 日本國外ノ戰地ニ於テ服役スル時ハ二箇年ヲ増加ス
- 二 出征軍ニ編入セラレ或ハ合圍若クハ臨戰地境內ニ於テ服役セシ時又戰時平時ヲ論セ

ス日本國外ノ地ニ於テ鎮戍ノ軍隊ニ在リシ時及ヒ海戰ニ當リ其船中ニ在リシ時ハ一箇年ヲ増加ス

- 三 海戰ニ當リ海岸防禦ニ從事セシ時ハ半箇年ヲ増加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ陸軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セズ但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス十七年第六十號達ヲ以テ(檢閱監軍部長ヲ經テ)ノ九字ヲ削ル

扶助料ノ願書ハ居住地地方廳ヨリ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス十八年十二月十六號達ヲ以テ本項ヲ改ム

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏陸軍三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ證トナサシム

恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ陸軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ免除恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル

- 一 准士官以上ハ計算書日附ノ翌日
- 二 下士卒ハ免官免役ノ翌日
- 三 寡婦孤兒扶助料ハ當該軍人死去ノ翌日

第四十六條 恩給及ヒ扶助料ハ一月四月七月十月ニ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所

在ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上(戸長)ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領證書ト引替ニ其金額ヲ交付ス

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスルハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ期日ヲ過クル者ハ尙ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ收メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省陸軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メス更ニ扶助料請願ノ證トナサシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ失亡スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

一 下士卒戰闘或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痕疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官除隊スト雖モ
モ第十九條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痕疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷痕疾病ヲ受ケ全

ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ陸軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス十七年四月第三十七號達ヲ以テ(恩給)下(若クハ扶助料)ノ六字ヲ削ル

陸軍恩給金額表

甲號	退職恩給表																					
	年	官	等	一	等	二	等	三	等	四	等	五	等	六	等	七	等	八	等	九	等	十
	數	官	等	一	等	二	等	三	等	四	等	五	等	六	等	七	等	八	等	九	等	十

十一年	千五百四十	千二百四十	千五百四十	千七百五十四	六百	四百五十	三百	二百二十五	百八十四	百五十四
十二年	千五百三十九	千二百三十九	千五百三十九	千七百四十九	六百十	四百四十五	二百五十五	二百二十四	百八十三	百五十四
十三年	千五百三十四	千二百三十四	千五百三十四	千七百四十四	六百二十	四百四十	二百五十五	二百二十三	百八十二	百五十四
十四年	千五百二十九	千二百二十九	千五百二十九	千七百三十九	六百三十	四百三十五	二百五十五	二百二十二	百八十一	百五十四
十五年	千五百二十四	千二百二十四	千五百二十四	千七百三十四	六百四十	四百三十	二百五十五	二百二十一	百八十	百五十四
十六年	千五百十九	千二百十九	千五百十九	千七百二十九	六百五十	四百二十五	二百五十五	二百二十	百七十九	百五十四
十七年	千五百十四	千二百十四	千五百十四	千七百二十四	六百六十	四百二十	二百五十五	二百一十九	百七十八	百五十四
十八年	千五百九	千二百九	千五百九	千七百十九	六百七十	四百一十五	二百五十五	二百一十八	百七十七	百五十四
十九年	千五百四	千二百四	千五百四	千七百十四	六百八十	四百十	二百五十五	二百一十七	百七十六	百五十四
二十年	千五百	千二百	千五百	千七百	六百九十	四百五	二百五十五	二百一十六	百七十五	百五十四
二十一年	千五百五	千二百五	千五百五	千七百五	七百	四百一十五	二百五十五	二百一十五	百七十四	百五十四
二十二年	千五百十	千二百十	千五百十	千七百十	七百一十	四百十	二百五十五	二百一十四	百七十三	百五十四
二十三年	千五百十五	千二百十五	千五百十五	千七百十五	七百二十	四百五	二百五十五	二百一十三	百七十二	百五十四
二十四年	千五百二十	千二百二十	千五百二十	千七百二十	七百三十	四百十	二百五十五	二百一十二	百七十一	百五十四
二十五年	千五百二十五	千二百二十五	千五百二十五	千七百二十五	七百四十	四百五	二百五十五	二百一十一	百七十	百五十四
二十六年	千五百三十	千二百三十	千五百三十	千七百三十	七百五十	四百十	二百五十五	二百一十	百六十九	百五十四

二十七年	千九百四	千五百二十	千三百三十	九百五十四	七百六十四	五百七十	三百八十四	二百八十四	百九十四
二十八年	千九百三十九	千五百一十九	千三百二十四	九百四十九	七百七十四	五百七十四	三百八十四	二百八十四	百九十四
二十九年	千九百三十四	千五百一十四	千三百一十九	九百四十四	七百八十四	五百八十四	三百九十四	二百九十四	百九十四
三十年	千九百二十九	千五百九	千三百一十四	九百三十九	七百九十四	五百九十四	三百九十四	二百九十四	百九十四
三十一年	千九百二十四	千五百四	千三百九	九百三十四	八百	六百	三百	二百	百
三十二年	千九百十九	千五百	千三百	九百二十九	八百一十	六百一十	三百一十	二百一十	百一十
三十三年	千九百十四	千五百	千三百	九百二十四	八百二十	六百二十	三百二十	二百二十	百二十
三十四年	千九百九	千五百	千三百	九百十九	八百三十	六百三十	三百三十	二百三十	百三十
三十五年	千九百四	千五百	千三百	九百十四	八百四十	六百四十	三百四十	二百四十	百四十
三十六年	千八百九十九	千四百九十九	千二百九十九	八百九十九	八百五十	六百五十	三百五十	二百五十	百五十
三十七年	千八百九十四	千四百九十四	千二百九十四	八百九十四	八百六十	六百六十	三百六十	二百六十	百六十
三十八年	千八百八十九	千四百八十九	千二百八十九	八百八十九	八百七十	六百七十	三百七十	二百七十	百七十
三十九年	千八百八十四	千四百八十四	千二百八十四	八百八十四	八百八十	六百八十	三百八十	二百八十	百八十
四十年	千八百七十九	千四百七十九	千二百七十九	八百七十九	八百九十	六百九十	三百九十	二百九十	百九十

乙號 免除恩給表 (十七年第三十七號公達ヲ以テ) (卒)ノ上ニ(詔)ノ一字ヲ加フ

第二類 第二章 恩給 恤救 四百八十九

年	官	等	十	一	二	三	四	五
十	一	等	六十圓	五十四圓	四十八圓	三十六圓	三十四圓	三十二圓
十	二	等	七十五圓	六十七圓	六十圓	四十五圓	四十二圓	四十圓
十	三	等	九十圓	八十一圓	七十二圓	五十四圓	五十二圓	五十圓
十	四	等	百五圓	九十四圓	八十四圓	六十三圓	六十二圓	六十圓
十	五	等	二百二十圓	百八圓	九十六圓	七十二圓	七十二圓	七十圓

四百九十

丙號

負傷增加恩給表

項目	官	等	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	諸	卒
一	項	五	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
二	項	九	百	四	百	七	百	二	百	三	百	三	百	三	百	三	百
三	項	七	百	五	百	六	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
四	項	六	百	四	百	八	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
五	項	四	百	五	百	六	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
六	項	三	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百

丁號

戰鬪及公務ニ因リ死亡者ノ寡婦(孤兒)扶助料表

(十七年第三十七號公達ヲ以テ死亡ノ下者)ノ一字ヲ加フ

項目	官	等	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	諸	卒
一	項	八	百	四	百	七	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
二	項	七	百	四	百	七	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
三	項	六	百	四	百	七	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
四	項	五	百	四	百	七	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
五	項	四	百	四	百	七	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百
六	項	三	百	四	百	七	百	四	百	四	百	四	百	四	百	四	百

第二類 第二章 恩給 恤救

四百九十一

〔一〕舊恩給令ニ依リ恩給扶助料罷役俸罷役恤金ヲ給與シ又ハ給與スヘキ者舊令ニ照シ給與方 明治十六年十一月十九日 陸軍省達達甲第四十號府縣 左ノ通大政官ヨリ達相成候條爲心得此旨相達候事

本年第三十七號達ヲ以テ陸軍恩給令ヲ改正シ陸軍罷役俸并恤金令廢止候處右恩給令改正前ニ舊恩給令ニ依リ恩給扶助料罷役俸罷役恤金ヲ給與シタル者又ハ給與スヘキ資格ヲ備ヘ給與中ニ係ル者ハ舊恩給令ニ照シ給與スヘシ此旨相達候事 明治十六年十一月八日 太政大臣三條實美

〔二〕舊陸軍恩給令ニ依リ恩給扶助料給與ノ者改正令發布後其權利移轉等ニ係ルトキ處分方 明治十七年八月二十六日 陸軍省達達甲第三十八號府縣 別紙之通大政官ヨリ御達相成候條爲心得此旨相達候事 別紙

舊陸軍恩給令ニ據リ恩給或ハ扶助料ヲ給與シタル者改正恩給令發布後ニ於テ其權利移轉若クハ停止及其他ノ事故生ゼシトキハ總テ改正令ニ據リ處分スヘシ此旨相達候事 明治十七年八月十八日 太政大臣三條實美

〔三〕陸軍恩給取扱規則同諸書式ヲ定ム 明治十九年九月七日 陸軍省令甲第三十六號北海道府縣 陸軍恩給取扱規則 陸軍恩給取扱規則 第一條 此規則ハ陸軍恩給令ニ基キ取扱ノ規程ヲ定ムルモノナリ 第二條 令第七條ニ掲ケタル武官トハ准官吏以上令第二十七條但書官署ニ奉職トハ撤出科同表中俸給ノ部ヨリ支出ス

ル俸給ヲ受クル者ヲ云フ 第三條 令第十條第二項ニ掲ケル流行病トハ陸軍官憲ニ於テ認定シタルモノニ限ル 第四條 令第二十條ノ年限内ニ傷所再感ノ確證アル者ハ情願ニ依リ本人居住近傍ノ陸軍病院ニ於テ官費治療スルヲ許ス 第五條 令第二十六條ニ掲ケタル家名繼襲ノ孤兒ハ令第二十七條ノ順次ニ拘ハラヌ年長者ニ先チテ扶助料ヲ願フコトヲ得又戸主ニアラサル軍人ノ長子(男女ニ論ナク)ハ家名繼襲ノ者ニ準ス 第六條 孤兒扶助料ヲ受クルハ令第二十六條ニ掲ケタルカ如シト雖トモ已ニ他家ノ養子女トナリ當該軍人ノ死後ニ至リ復籍スル兒子ハ扶助料ヲ願フコトヲ得ス 第七條 令第二十九條末項ニ掲ケタル夫ナキ母及祖母癩疾不具等ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ五十歳未滿ト雖トモ父及祖父ノ例ニ準ス 第八條 扶助料ハ當該軍人ノ官階ニ依ルト雖トモ令第二十一條第二項ニ該ルモノニシテ當該軍人其官階ニ進ミ未タ陸軍武官進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラスシテ前官ノ恩給ヲ受ケ或ハ未タ恩給ヲ受ケスシテ死シタル軍人ノ寡婦(孤兒)ハ前官ノ額ニ依ル 第九條 陸軍藥劑監獸醫監一等軍吏一等軍樂長砲工兵上等監職ノ如キ進級停年ノ定メナキ者ノ恩給ハ猶令第十七條ノ但書ニ憑據シ藥劑監獸醫監二等軍吏ハ各其相當官ノ停年ニ二等軍樂長砲工兵上等監職等ハ少尉ノ停年ニ準據ス其寡婦(孤兒)扶助料モ亦前條ト異ナルコトナシ 第十條 寡婦(孤兒)扶助料移轉ノ時並ニ令第二十九條及ヒ第四十九條第四項ニ依リ扶助料若クハ賑恤金ヲ仰カントスル者其出願期限ハ令第八條ノ初項ニ掲ケタル寡婦(孤兒)扶助料出願ノ期限ニ同シ 第十一條 軍人服役實期十一年以上ニシテ文官ヲ兼任シ後備軍職員トナリタル者ノ恩給出願ノ期ハ其兼官罷免ノ時トス 第十二條 服役年並恩給計算書ニハ從軍年ヲ加算シ逃亡又ハ禁錮等ノ刑ニ處セラレ現役ニ服セサルノ日數ハ之ヲ捺除

シテ記載スルモノトス

第十三條 恩給扶助料ヲ受クル者外國ニ寄留シ該地ニ於テ其金額ヲ受領セントスル者ハ豫メ之ヲ願出ヘシ但一年以上寄留スル者ニアラサレハ之ヲ許サス

第十四條 給助金ヲ給スルハ令第五十一條ニ掲ケタルカ如シト雖トモ下士五年以上勤続ノ後豫備役及ヒ後備役ニ入ル者ハ其際之ヲ給スルモノトス

第十五條 下士一旦免官直ニ陸軍ノ生徒トナリ從タ軍人トナリタル者ノ如キハ令第三十五條ニ據リ前後ノ現役ヲ通算スルヲ以テ其免官ノ際ハ給助金ヲ給セス

第十六條 恩給扶助料ハ年々四期ニ下付スルヲ以テ其始期終期ニ端月日ヲ生スル時ハ其年額四分ノ金高ヲ端月日ニ乘シ其期ノ現日數期ハ九十一日第三期第四期ハ九十二日ヲ以テ之ヲ除シ四拾五入ノ算法ニ依ル

第十七條 恩給及扶助料ノ終期
一 死去時クハ再婚復籍シタル者ハ其當日
二 孤兒年滿限ニ依ル者ハ二十歳ニ達スル前月ノ盡日 出生シタル月ノ前月ノ盡日
三 犯罪ニ係ル者ハ刑名宣告ノ前日

第十八條 服役年ヲ算スルニ方リ初任ノ月ニ端日數ヲ生シタル時ハ其月ノ大小ニ依リ積算スルノ注ナルヲ以テ免官ノ月ノ端日數ト合セテ三十日以上ニ及ヒタル時ハ其初任ノ月ノ大小ニ從ヒ一ヶ月ノ區域ヲ定ム

第十九條 令第三十三條ニ掲ケタル恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄トハ武官服役滿十一年ニ及フノ期ヲ指シタルモノニシテ則チ其期ニ至ル迄ハ文官奉仕中ノ年月十六箇月ヲ以テ武官ノ服役年ヲ補充スルモノトス故ニ武官ノ服役年已ニ十二年ニ及ヒタルモノハ文官奉仕中ノ年月八十二箇月ヲ以テ一箇年ト算ス但文官初任ノ月ニ限リ奉仕日數ニ拘ハラズ一箇月ト算ス

第二十條 文官或ハ卒ヨリ下士以上ニ任スル者ハ其前官若クハ前服役ノ年數ヲモ通算ス但士官學校教導團其他生徒ヨリ士官下士ニ採用リ者ハ其生徒中ノ年月ハ算入セス

第二十一條 下士卒又ハ文官ヨリ生徒トナリ下士以上ニ採用ノ者ハ令第三十五條ノ例ニ從ヒ其生徒トナリタル迄ノ服役年ハ之ヲ通算ス

第二十二條 令第三十一條第三項ノ徵兵ニシテ徵兵令第四十二條訓註ニ當ル者ノ如キハ同令ノ起算法ニ依ル

第二十三條 軍人ニシテ一口退身再ヒ現役ニ就ク者ハ令第三十五條ニ據リ前後ノ現役ヲ通算スト雖トモ給助金又ハ嘗テ滿年賜金ヲ受ケタル者ニ在テハ前現役年數ハ通算セス

第二十四條 恩給登錄簿ヲ盜難水火災等ノ爲メ亡失シタル時ハ書面ヲ以テ速ニ地方廳ヘ届出ヘシ地方廳ハ之レニ添書シテ内務省ニ具申シ證明書ヲ下付ヲ請フ可シ

第二十五條 凡ソ恩給ノ願書ハ當該軍人ヨリ順序ヲ經テ其所屬長 聯隊ニアリテハ聯隊長聯隊ヲ爲サ、ル隊若クハ獨立ニ呈ス所屬長ハ之ヲ恩給調査委員ニ付シ第四式ノ書面及第二十八式ノ計算書ヲ作リ順序ヲ經テ所屬長官ニ呈ス

第二十六條 恩給調査委員ハ聯隊ニ在テハ聯隊長 聯隊ヲ爲サ、ル隊若クハ獨立隊ニ在テハ 官廳 近衛鎮守監 官廳長其部下(部員)ニ近衛鎮守監隊外ニ在テハ參謀長其幕僚員ニ其時々之ヲ命スルモノトス

第二十七條 軍醫部獸醫部武庫主管調馬主管軍法會議等ニ在ル者ノ恩給取扱モ亦前條ノ例ニ準ス但陸軍大臣ニ進達シタル時ハ所屬長官ヨリ其旨ヲ本屬長官ニ通報スヘシ

第二十八條 服役年ニ基ク恩給ノ願ハ定限ノ年滿ニ達スルノ前(凡三) 若クハ服役滿期トナルノ前ニ於テ當該軍人ハ第一式ノ願書ニ第三式第四式ノ書類ヲ添ヘ所屬長ニ呈出スルモノトス

第二十九條 所屬長官第二十五條ノ書類ヲ査閲シ意見ナキ時ハ近衛鎮守監ニ在テハ參謀長官廳ニ在テハ次長若クハ課長(若クハ調査委員) 筆ヲシテ服役年並恩給計算書ヲ檢査シ署名捺印セシメ而シテ第二十七式ノ進達書ヲ作リ願書類ヲ併シテ之ヲ陸軍大臣ニ呈ス可シ但令第五條ニ掲ケタル恩給出願ノ順序モ亦前條并本條ニ遵ス

第三十條 傷疾疾病ニ基ク恩給ノ願ハ第二式ノ願書ニ第三式第四式及令第十四條第十五條ニ示シタル所ノ書類ヲ併シ第七二十五條ノ例ニ依リ之ヲ所屬長官ニ呈ス所屬長官ハ其書類ヲ所屬長ニ下付シ軍醫(第十五式ノ證書ヲ作リ) 二

第二類 第二章 恩給 恤救

名ヲシテ所屬長及調査委員ノ面前ニ於テ當該人ヲ實査セシム軍醫ハ其診斷書ニ照シ果テ服役ニ堪ヘスト認メタル時ハ其診斷書ニ署名捺印シ若シ服役ニ堪ユ可クシテ且項差ノ策定不適當ト認メタル時ハ検査意見書(第十)ヲ作リ之ヲ所管長官ニ呈ス可シ所管長官ハ恩給ノ取扱ヲ他日ニ延ハシ更ニ治療セシムルコトアルヘシ

第三十一條 所管長官ハ前條兩軍醫ノ検査ノ後軍醫長ニ移シテ其診斷證書ヲ審査セシメ當該軍人恩給ヲ受クヘキ者ト認タル時ハ第二十九條ノ例ニ依リ願書類ヲ併セテ之ヲ陸軍大臣ニ呈ス陸軍大臣ハ更ニ之ヲ醫務局ニ下シ選取セシメ其證書(第十)ヲ作ラシム(二十年十二月二十二日省令第二十六號ヲ以テ檢)

第三十二條 令第二十條ニ掲クル所ノ恩給願書ハ第三式ノ願書ニ第十五式寫及第二十式ノ診斷證書ヲ添ヘ直ニ之ヲ地方ノ鎮邊ニ呈スヘシ

第三十三條 鎮邊司令官ハ前條ノ願書ヲ受領スレハ之ヲ參謀長ニ下シテ調査セシメ且軍醫二名ヲシテ當該人ヲ検査セシムル等第三十條以下ノ例ニ同シ

第三十四條 非職ノ者退職恩給ヲ願フ時ハ願書及第十三式第十四式ノ書類ヲ直ニ所管鎮邊司令官(他管ニ寄留ノ者ハ)ニ呈ス可シ司令官ハ之ヲ參謀長ニ下シテ調査セシメ且進達書ヲ作ル等第二十九條ノ例ニ同シ

第三十五條 傷痕ヲ受ケタリト雖トモ尙本奉職シ後日傷痕ニ依リ退職恩給ヲ願フ者ハ自傷當時付與シタル軍醫ノ診斷證書類ヲ添フ可シ其傷痕ノ項目ハ恩給出願ノ時ニ於テ第三十條ノ例ニ依リ之ヲ定ム但戰鬪公務ノ爲メ再ヒ傷痕ヲ受ケタル者ハ前後ノ傷痕ヲ合セテ更ニ其項目ヲ定ム

第三十六條 凡ソ扶助料ノ願書ハ令第四十三條第二項ノ順序ヲ經テ陸軍大臣ニ呈スヘシ陸軍大臣之ヲ當該軍人ノ舊所管ニ下シ查覈ノ上服役從軍明細書(第十)ヲ作ラシメ查覈書類ト共ニ再ヒ進呈セシム

第三十七條 寄留地ニ於テ扶助料ヲ願ハントスル者ハ其願書ヲ寄留地ノ地方廳ニ出ス可シ但該廳ヨリ陸軍大臣ニ進達シタル時ハ其趣ヲ本籍地方廳ニ通知スヘシ

第三十八條 若シ前條ノ書類ニ連署ス可キ親族ナキ時ハ令第三十條ニ準シ寄留地ノ同郡(區)内ニアル戸主二名連署ス

ルモ妨ケナシ

第三十九條 令第四十九條第一項第二項第三項ニ掲ケタル賑恤金ヲ請フ者アリタル時ハ所屬長其證據書類中診斷證書(第十)ニ基キ其申請書(第二十)ヲ作リ所管長官ニ呈シ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達シ其日ニ於テ直ニ免官若クハ免役スヘシ

陸軍大臣ハ其進達書ヲ受領スレハ之ヲ醫務局ニ下シ選檢證書(第十)ヲ作ラシム

第四十條 令第四十九條第四項ニ係ル者ノ願書類ハ令第四十三條第二項ノ取扱ニ準ス

第四十一條 令第三十一條第一項但書一時賜金ハ陸軍省ニ於テ調査ノ上金員ヲ大藏省ヨリ受領シ地方廳ヲ經テ本人ニ下付スルモノトス

第四十二條 給助金願書(第三十)ニハ履歷書(第三十)ヲ添ヘ本人或ハ遺族(遺族ナキ者ハ親族)ヨリ直ニ舊所管ニ出願セシメ舊所管ニ於テハ進達書(第三十)ヲ作リ之ヲ陸軍大臣ニ呈ス陸軍省ニ於テ調査ノ上金員ヲ大藏省ヨリ受領シ本籍若クハ寄留地ノ地方廳ヲ經テ本人ニ下付ス

第四十三條 第二十八條ノ恩給願書ニ添フ可キ證據書類

- 一 服役從軍明細書(第十三式)
- 二 戶籍明細書(第十四式)

第四十四條 第三十條ノ恩給願書ニ添フヘキ證據書類

- 一 軍醫診斷證書(第十五式)
- 二 第三十五條ニ掲ケタル者恩給ヲ願フ時ハ自傷當時付與シタル軍醫診斷證書
- 三 見證書(第二十)若クハ公文又ハ査問會議口供書寫ノ内一通
- 四 服役從軍明細書
- 五 戶籍明細書

第二類 第二章 恩給 恤救

第四十五條 令第二十一條第一項ニ該ル扶助料願書ニ添フ可キ證據書類

- 一 公文
- 二 孤兒ハ母死去若クハ離別證書第二十四式
- 三 戶籍明細書第二十五式
- 四 傷痕疾病ニ罹リ治療ノ末死歿セシ時ハ見証證書及軍醫診斷證書(第二十式)若クハ査問會議口供書寫
但軍醫在ラサル地ニシテ地方醫師ノ診斷ヲ受ケシ時ハ地方病院長ノ診斷證書第二十式

第四十六條 令第二十一條第二項ニ該ル扶助料願書ニ添フ可キ證據書類

- 一 夫死去證書第二十四式
- 二 戶籍明細書
- 三 夫恩給ヲ受ケタル後死歿シタル時ハ恩給登錄寫帖
孤兒ハ
- 一 父死去證書母ノ扶助料ヲ繼承ス 第二十四式
- 二 母死去證書(再婚證書)(復籍證書)(離別證書)第十四式 第二十五式 第二十六式
- 三 戶籍明細書
- 四 恩給扶助料ヲ受ケタル後死去或ハ權利消絶セシ時ハ恩給登錄寫帖

第四十七條 令第二十九條ニ該ル父母又ハ祖父母扶助料願書ニ添フ可キ證據書類

令第二十一條第一項ニ該ル者ノ父(母)祖父(祖母)ハ

- 一 公文
 - 二 戶籍明細書
 - 三 五十歳未満ニシテ癱瘓不具ノ者ハ其診斷證書第二十一式
 - 四 傷痕疾病ニ罹リ治療ノ末死歿セシ時ハ見証證書及軍醫診斷證書若クハ査問會議口供書寫
但軍醫在ラサル地ニシテ地方醫師ノ診斷ヲ受ケシ時ハ地方病院長ノ診斷證書令第二十一條第二項ニ該ル者ノ父(母)祖父(祖母)ハ
 - 一 當該軍人死去證書第二十四式
 - 二 當該軍人恩給ヲ受ケテ後死歿シタルトキハ恩給登錄寫帖
 - 三 戶籍明細書
 - 四 五十歳未満ニシテ癱瘓不具ノ者ハ其診斷證書
- 扶助料ヲ受ケシ寡婦權利消絶シ或ハ父ヨリ母ニ母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルトキ父(母)(祖父)(祖母)願書ニ添フルハ
- 一 扶助料ヲ受ケ死去若クハ離別證書又ハ權利消絶ヲ證スル者
 - 二 同上恩給登錄寫帖
 - 三 戶籍明細書
 - 四 五十歳未満ニシテ癱瘓不具ノ者ナレハ 其診斷證書

第四十八條 令第四十九條ニ該ル賑恤金額書ニ添フ可キ證據書類

- 一 軍醫診斷證書第十八式
 - 二 見証證書
 - 三 服役從軍明細書
 - 四 戶籍明細書
- 陸軍 恩給 諸書式

目録

- 第一式 服役停年ニ基ク退職及免除恩給願書
- 第二式 傷痍疾病ニ基ク退職及免除恩給願書
- 第三式 傷痍疾病ノ恩給増加並ニ服役ヲ離レテ更ニ其恩給ヲ願フ恩給増加願書
- 第四式 恩給調査書
- 第五式 戦死或ハ傷痍疾病ニ因リ死去シタル軍人ノ寡婦(孤兒)扶助料願書
- 第六式 夫(父)ノ服役停年ニ基ク寡婦(孤兒)扶助料願書
- 第七式 服役停年及傷痍疾病ニ因リ恩給ヲ受ケテ死シタル軍人ノ寡婦(孤兒)扶助料願書
- 第八式 母ノ死後孤兒扶助料願書
- 第九式 恩給ヲ得ルノ權ヲ有シテ死シタル軍人ノ父母祖父母ニシテ奉養スル子孫ナキ者扶助料願書
- 第十式 恩給ヲ受ケテ後チ死シタル軍人ノ父母祖父母ニシテ奉養スル子孫ナキ者扶助料願書
- 第十一式 扶助料ヲ受ケタル父死去ニ付母扶助料願書
- 第十二式 戦死及傷痍並ニ服役停年ニ因リ恩給ヲ得ルノ權ヲ有シ又ハ其恩給ヲ受ケテ後チ死シタル軍人ノ兄弟姉妹賑恤金願書
- 第十三式 服役従軍明細書
- 第十四式 戸籍明細書
- 第十五式 醫官診断證書
- 第十六式 醫官検査意見書
- 第十七式 醫務局服役證書
- 第十八式 賑恤金ニ係ル醫官診断證書
- 第十九式 醫務局服役證書

- 第二十式 地方病院長診断證書
 - 第二十一式 瘰癧不具ヲ證スル診断證書
 - 第二十二式 死亡診断證書
 - 第二十三式 見證書
 - 第二十四式 死去證書
 - 第二十五式 離別證書
 - 第二十六式 丁年證書
 - 第二十七式 服役停年ニ付退職及免除恩給願書所管長官ヨリ陸軍大臣へ進達書
 - 第二十八式 服役年並恩給計算書
 - 第二十九式 下士以下ニ係ル同前
 - 第三十式 傷痍疾病ニ付退職及免除恩給願書所管長官ヨリ陸軍大臣へ進達書
 - 第三十一式 傷痍疾病ノ恩給増加並ニ服役ヲ離レテ更ニ其恩給ヲ願フニ付鎮臺司令官ヨリ陸軍大臣へ進達書
 - 第三十二式 下士卒賑恤金所屬隊長ヨリ鎮臺司令官へ申請書
 - 第三十三式 給助金願書
 - 第三十四式 給助金願書ニ添ヘキ履歷書
 - 第三十五式 給助金願書並所管長官ヨリ陸軍大臣へ進達書
- 第一式 服役停年ニ基ク退職及免除恩給願書 「用紙美濃紙」 以下諸式中 「アルモノハ朱書ノ印
 恩給願書
 「下士以下モ上式ニ準ス其異
 サル所ハ左ノ如シ」
 何年何月何日教導團生徒被申
 付何年何月何日被任二等軍曹

某 儀

何年何月何日士官學校入學何年何月何日被任何官
爾來別紙服役明細書ノ通勤續仕候處何年何月ニテ
定限ノ年齢ニ相成今般退職願出候就テハ相當ノ恩
給下賜度證據書類何通相添此段奉願候也

何鎮臺

年月日 何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長 官氏名[㊦]
何鎮臺司令官(何長)(爵) 氏名殿

第二式 傷疾疾病ニ基ク退職及ヒ免除恩給願書

〔用紙美濃紙〕

恩給願書

某 儀

何年何月何日士官學校入學何年何月何日被任何官
爾來別紙服役明細書ノ通勤續仕候處何年某地征討
從軍中○何月何日某ノ戰地ニ於テ右足ニ負傷醫療
相加候末竟ニ右下肢ノ用ヲ全廢スルニ至リ服務ニ

〔徵兵ニテ入營何鎮臺何兵第
何聯隊編入〕爾來別紙服役明
細書ノ通勤續(服役)仕候處何
年何月ニテ服役滿期ニ相成候
就テハ〔以下同文〕
何鎮臺何兵第何聯隊第何
大隊第何中隊長
第何號 官氏名印
〔上長官士官並准士官ニシテ
令第五條ニ因ル者ハ何年何月
ニテ定限ノ年齢ニ相成云々
ヲ〕御諭旨ニ基キ退職願出候
云々ニ換ニ

〔下士以下モ上式ニ準ス但服
務ニ堪ヘ難ク今般退職願出候
云々ヲ〕服務ニ堪ヘ難ク候就
テハ〔云々ニ換ニ〕

〔○疾病ナラハ〕何地ニ於テ何
月何日ヨリ何病ニ罹リ租々治

堪ヘ難ク今般退職願出候就テハ〔以下前式ニ同シ〕

療相受候然ルニ何々スルコト
能ハス不具ニ屬シ服役ニ堪ヘ
難ク候就テハ〔以下同文〕

第三式

傷疾疾病ノ恩給増加並ニ服役ヲ離レ
テ更ニ其恩給ヲ願フ恩給増加願書

〔用紙美濃紙〕

恩給増加願書

某 儀

何年何月何日某地ニ於テ實地演習ノ際制兵放火ノ
爲メ兩眼負傷ノ故ヲ以テ第六項ニ策定退職恩給及
ヒ負傷増加恩給共被下置候處爾來漸々○視力衰弱
遂ニ重症ニ變シ候ニ付軍醫何某ノ診察ヲ受ケ療養
相加候得共別紙診斷證書ノ通當何月ヨリ至ク盲目
ニ相成候就テハ相當ノ恩給増加被下度證據書類相
添此段奉願候也

〔下士以下モ上式ニ準ス〕
〔○陸軍病院並ニ軍醫ノアラ
サル地ニテハ〕視力衰弱遂ニ
重症ニ至リ候處近傍ニ陸軍病
院並ニ軍醫モ無之ニ付當地何
郡區何町村病院ニ於テ療養相
加ヘ候得共〔云々ト記ス〕

〔傷疾疾病ニ依リ服役ヲ離レ
タル者其傷疾疾病増進シ更ニ
恩給ヲ願フ者モ上式ニ準ス〕

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族
平民
元何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
年月日
退職 官氏名 ㊤

何鎮臺司令官(爵) 氏名殿

第四式 恩給調査書

〔用紙美濃濠紙〕

右年齢満限(服役満期)傷痕若クハ疾病(傷痕若クハ疾病増進)ニ因リ別紙恩給(恩給増加)出願ノ件調査候處事實相違無之候間相當ノ恩給下賜相成可然者ト存候也
年月日
何鎮臺
何兵第何聯隊第何大隊副官 官氏名 ㊤
同 官氏名 ㊤

〔聯隊ニ在テハ〕
〔上長官 一名〕
〔士官 三名〕
〔聯隊副官一名大隊副官二名以上缺員アルトキハ他ノ同官ヲ以テ之ニ代フ〕
〔聯隊ヲ爲サハル隊若クハ獨立隊ニ在テハ〕
〔上長官 一名〕
〔上長官アラサル時ハ大尉〕
〔士官 三名〕
〔官解及近衛鎮臺隊外ニ在テハ〕
〔上長官 一名〕
〔士官 三名〕

何兵第何聯隊副官 官氏名 ㊤
何兵第何聯隊第何大隊長 官氏名 ㊤
何鎮臺司令官(何長)(爵) 氏名殿

第五式

戦死或ハ傷痕疾病ニ因リ死去シタル軍人ノ寡婦(孤兒)扶助料願書

〔用紙美濃濠紙〕

扶助料願書
何鎮臺
何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長 官氏名
右何年某地ノ役從軍何月何日某地ニ於テ戦死仕候就テハ相當ノ扶助料下賜度證據書類相添此段奉願候也
年月日
何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族
平民
故官氏名寡婦 名 ㊤

〔傷痕ニ依リ死去シタル者ノ寡婦ハ〕
右何年某地ノ役從軍何月何日某地ニ於テ戰爭ノ際負傷漸々重病ニ赴キ竟ニ何月何日死去仕候就テハ相當ノ扶助料下賜度依テ軍醫診斷證書戸籍詳細書類相添云々ト記ス
〔疾病ニ基ク者モ前ニ準ス〕
〔死去ノ節地方醫師ノ治療ニ係ル者ハ第二十二式軍醫ノ診斷證書ニ代フルニ第二十二式地方病院長ノ診斷證書ヲ以テス可シ〕
〔母ノアラサル孤兒ノ願書モ上式ニ準ス但母ノ死去若クハ離別證書ヲ以テス可シ第六式第七式モ之ニ準ス而シテ願主

右之通相違無之候也

同	士族	平民
何某兄弟或ハ伯叔父 從父兄弟等	氏名	名
同	士族	平民
同	氏名	名
何府(縣)何郡(區)何町(村)	[戸長]	氏名
何府知事氏名殿		

ノ署名ハ左ノ如シ
何府(縣)何々 士族
平民
故官氏名長男
「後見人アレ
戸主 氏名ハ無印ニテ
モ妨ケナシ」
同 士族
後見人氏名
同 士族
平民
何某兄弟或ハ伯叔父
從父兄弟等
証人 氏名
同 士族
平民
同 氏名
「其他上ニ同シ」
[戸長]アラサル地ニテハ[區
長]ニ於テ奥書ス可シ以下諸
式之レニ準ス」

第六式 夫(父)ノ服役停年ニ基ク寡婦(孤兒)扶助料願書 「用紙美濃紙」

扶助料願書

何領董 元何兵衛何勝隆何大隊長 故官氏名

「孤兒ヨリ願出ル時モ上式ニ
準ス但署名等ハ前式欄内ニ同
シ」

右何年何月何日士官學校生徒被申付何年何月何日
被任何官爾來十一箇年以上勤続仕候處何病ニ罹リ
何月何日死去仕候就テハ相當ノ扶助料下賜度本人
死去證書戸籍明細書相添此段奉願候也

何府(縣)何郡(區)何町(村) 士族
平民

故官氏名寡婦

年月日 同 士族 平民 氏名 名

証人 同 士族 平民 氏名 名

右之通相違無之候也

何府(縣)何郡(區)何町(村)
[戸長] 氏名

何府知事氏名殿

第七式

服役停年及傷痍疾病ニ因リ恩給ヲ受ケテ死シタル軍人ノ寡婦(孤兒)扶助料願書

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

退職 官 氏 名

右何年何月何日ヨリ退職恩給ヲ賜リ來リ候處當何年何月何日死去仕候就テハ相當ノ扶助料下賜度恩給登錄寫帖並ニ本人死去證書戶籍明細書相添此段奉願候也

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族 平民

故退職官氏名寡婦

年月日

同 士族 平民 名 ㊦

何某兄弟或ハ伯叔父從父兄弟等

証人 氏 名 ㊦

同 士族 平民 氏 名 ㊦

右之通相違無之候也

〔夫(父)ノ傷痍疾病ニ因リ恩給增加ヲ賜リ來リタル者ハ〕
右何年何月何日ヨリ退職恩給及自傷增加恩給ヲ賜リ來リ候處、以下上式ニ同シ〕
〔免除恩給ヲ賜リ來リタル者モ此式ニ準ス〕
〔孤兒ノ願書モ此式ニ準ス但母ノ扶助料ヲ繼承スル時ハ母ノ死去若クハ離別證書ヲ以テス可シ而シテ願主ノ署名ハ第五式欄外ニ同シ〕

年月日

何府(縣)何郡(區)何町(村)

〔戶長〕 氏 名 ㊦

何府知事氏名殿

第八式 母ノ死後孤兒扶助料願書

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

故退職官氏名寡婦

名

右故退職官氏名寡婦某ニ扶助料賜リ來リ候處當何年何月何日死去仕候就テハ某へ扶助料下賜度恩給登錄寫帖本人死去證書戶籍明細書相添此段奉願候也

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族 平民

故退職官氏名長男

年月日

氏 名 ㊦

〔以下前式ニ同シ〕

〔直チニ寡婦ニ扶助料賜リタル者ハ〕
故官氏名寡婦 名

右故官氏名何年何月戰死(公務ノ爲メ自傷後死歿)致候ニ付寡婦某へ扶助料賜リ來リ候處、以下同文〕
〔長男丁年ニ至リ次子之ヲ願フ時ハ〕
故退職官氏名長男 氏 名

〔以上同文長男某ニ扶助料賜リ來候處當何年何月丁年ニ相成候就テハ、以下同文但母ノ死去證書ニ代フルニ長子ノ二十歳ニ達シタルヲ證スル爲メ第二十六式ノ書面ヲ以テス〕

第九式

恩給ヲ得ルノ權ヲ有シテ死シタル軍人ノ父母
祖父母ニシテ奉養スル子孫ナキ者扶助料願書

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮置何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
官 氏 名

右何年某地ノ役從軍何月何日某地ニ於テ戰死仕候
右某ハ私幾男ニシテ本人ニハ妻並遺兒モ無之候然
ルニ私儀從來何某ニ依リ生活致シ來候處同人ニ相
離レ他ニ養ヒ吳候子孫無之困難仕候間前顯ノ情狀
御諒察ノ上御扶助被成下度證據書類相添此段奉願
候也

何府(縣)何國何郡(區)何町(村)士族
故官氏名(父)(母)

年 月 日

氏 名 〇

〔以下前式ニ同シ〕

〔軍人死去直ニ母及ヒ祖父母
ヨリ願フモ上式ニ準ス〕
〔當該軍人ノ死歿傷病疾病ニ
因ル者ハ第二十二式軍醫診斷
證書ヲ添ヘ若シ軍醫ノ在ラザ
ル地ニシテ地方醫師ノ診斷ヲ
受ケタルハ第二十二式地方病
院長ノ診斷證書ヲ添フ可シ〕
〔父母及祖父母五十歳以下ニ
シテ癡疾不具產養ヲ管ムル能
ハサル者ハ第二十一式診斷證
書ヲ添フ可シ〕
〔當該軍人服役停年恩給ヲ得
ルノ權ヲ有シ即チ十一年以上
勤續ノ後死去セシ時モ上式ニ
準ス〕

第十式

恩給ヲ受ケテ後死シタル軍人ノ父母祖父
母ニシテ奉養スル子孫ナキ者扶助料願書

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮置何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
第何號
官 氏 名

右何年何月何日停年ニ依テ免官免除恩給ヲ賜リ來
リ候處當何年何月何日死去仕候中略但前式ト同文
恩給登錄寫帖並ニ本人死去證書戶籍明細書相添此
段奉願候也

〔以下前式ニ同シ〕

〔傷病疾病ニ因リ免除恩給ヲ
受ケテ後チ死シタル時モ上式
ニ準ス〕
〔父母及祖父母五十歳以下ニ
シテ癡疾不具產養ヲ管ムル能
ハサル者ハ第二十一式診斷證
書ヲ添フ可シ〕

〔扶助料ヲ受ケタル寡婦再嫁
若クハ死去シタル時ハ其證書
ヲ添フ可シ〕

第十一式

扶助料ヲ受タル父死去ニ付母扶助料願書

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮置何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
何年何月何日某地ノ役戰死
故官氏名(父)

氏 名

〔母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母
ニ移轉スル時モ上式ニ準ス但
シ母及祖父母ヨリ願出ル時當
人五十歳以下ニシテ癡疾不具
ナル時ハ第二十一式診斷證書
ヲ添フヘシ〕

右ノ者故某戰死ニ因リ自活難致ニ付何年何月何日ヨリ扶助料賜リ來候處當何年何月何日死去仕候然ルニ私儀他ニ養ヒ候子孫無之候間御扶助被成下度恩給登錄寫帖並ニ本人死去證書戶籍明細書相添此段奉願候也

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族
平民
故官氏名母

年月日

〔以下前式ニ同シ〕

第十二式

戰死及傷病並服役停年ニ因リ恩給ヲ得ルノ願ヲ有シ又ハ其恩給ヲ受ケテ後死シタル軍人ノ兄弟姉妹賑恤金願書

賑恤金願書

何鎮齋何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
第何號

故官氏名

右何年某地ノ役從軍何月何日某地ニ於テ戰死仕候處同人ニハ妻並ニ遺兒無之私儀從來故某ニ依リ生

〔用紙美濃紙〕

當該軍人傷病疾病並服役停年ノ恩給ヲ得ルノ權ヲ有シ又ハ其恩給ヲ受ケテ後チ死亡シ上支ノ如キ生活困難ニ因リ願出ル時モ上式ニ準シ作ル可シ但願書ニ添フ可キ證書類ハ前第九式第十式ニ準ス

活致シ來候處同人ニ相離レ他ニ救育致候親戚モ無之困難仕候間前顯ノ情狀御諒察ノ上御扶助被成下度證據書類相添此段奉願候也

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族
平民

故官氏名(兄)(弟)(姉)(妹)

年月日

氏名 ④

〔以下前式ニ同シ〕

第十三式

服役從軍明細書

〔用紙美濃紙〕

服役從軍明細書

何鎮齋何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
第何號
官氏名 ④

明治何年	何月	何日	徵兵ニテ何兵第何聯隊第何大隊第何中隊(入營(任何官廳何官))
同 年	何月	何日	何々ノ科ニ依リ輕禁錮何日
同 年	何月	何日	何兵第何聯隊第何大隊第何中隊(轉ス)
同 年	何月	何日	陸軍何兵一等卒申付
同 年	何月	何日	任陸軍何兵二等軍曹

同	年	何	月	何	日	某地從軍
同	年	何	月	何	日	任陸軍何兵一等軍曹
同	年	何	月	何	日	某地ヨリ歸營
同	年	何	月	何	日	任陸軍何兵曹長

第十四式 戶籍明細書

〔用紙美濃紙〕

戶籍明細書		何年何月何日 〔但出願ノ日〕	
族籍	士族(平民)	何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊	
職業	何々	第何號 官氏名 〇	
戶主	某	〇	
本籍住所	何府何國何郡何町何番地或ハ何某	同	
寄留住所	同	同	

〔寡婦孤兒父母祖父母等ヨリ出ストキハ〕
 故官氏名寡婦(孤兒)(父母)(祖父母) 氏名 〇
 〔其寡婦ヨリスルハ氏名ノ左肩ニ左ノ如ク記ス〕
 何府(縣)士族(平民)氏名長女姉(妹)
 〔而シテ妻ノ區供ヲ除クヘシ但父母祖父母ヨリスルモ亦之ニ準ス〕

誕生年月日	年號何年何月何日生	現年何年何箇月
父(養)	某	年號何年何月何日生 現年何年何箇月
母(養)(繼)	某	同
祖父母	某某	同
妻某	何府士族(平民) 何某長女(姉)(妹) 何年何月結婚	同
嗣子	某	同
次	男女	同
兄	某	同
弟	某	同
姉	某	同
妹	某	同
備考	前戶主何某何年何月何日死去ニ因リ何年何月何日ヨリ其寡婦(孤兒)何某何年何月何日爲ル後何某復籍(死去)ニ因リ何年何月何日ヨリ次切何某更ニ戶主ト爲ル 妻(寡婦)某ハ何年何月何日陸軍大臣ノ許可ヲ得婚姻ヲ整ヘタルモノナリ	

〔〇〕

〔寡婦孤兒父母祖父母等ノ扶助料願書ニ添フヘキモノハ戶長ニ於テ左ノ如ク與書調印スヘシ〕
 右當(區)(町)村ノ戶籍ニ照シ調査候處相違無之候也
 何府(縣)何國何郡(區)何町(村)
 年月日 〔戶長〕氏名 〇

第十五式 醫官診斷證書

〔用紙美濃野紙〕

診斷證書

何鎮臺

何兵第何聯隊何大隊第何中隊長

官 氏 名

右何年(何役)何月何日何地ニ於テ何々ノ際右大腿前下部ヨリ膝腕ニ貫通スル骨傷銃創ヲ受ケ當日直ニ何地縋帶所(何地何病院)ニ於テ治療ヲ施シ爾後何地何病院ニ入院(何地何病院)ヲ經テ何地何病院ニ入院(加療)何々ノ部ニ何術ヲ施シ(傷痕ハ治療スト雖モ服役ニ堪ヘス現今膝關節強直ヲ胎シ該下肢ノ用(右下肢)ヲ失フニ由リ陸軍恩給令第十九條第五項(第三項)ニ策定候也

年 月 日

職官氏名

主任醫官

職官氏名

〔傷痕ノ種類部分淺深骨傷ノ有無及ヒ治療診斷書ヲ書スル現時ニ方テ官能ヲ妨碍スル景況ト其度ヲ殊ニ詳細記載スヘシ〕

〔下士以下モ上式ニ準ス〕

〔疾病ヲラハ〕

右何年(何役)何月何日何地ニ於テ何々ノ際何病ニ罹リ何地何病院ニ入院治療ヲ加該病ハ漸ク恢復ニ至ルト雖モ何々ノ部ニ何症ヲ胎シ(精神錯亂症ヲ胎シ)何々ノ用ヲ妨ク(何々スル能ハス)〔以下同文〕

再檢

職官氏名

職官氏名

審査

近衛(第何師團)軍醫長氏名

第十六式 醫官検査意見書

〔用紙美濃野紙〕

検査意見書

官 氏 名

右ハ官氏名ノ診斷證書ニ照シテ實在スルニ現今何々ノ證アリ猶加療ノ上ナラテハ項差ヲ策定シ難キ者ニ有之候也

年 月 日

職官氏名

職官氏名

第十七式 醫務局受取證書

〔用紙美濃野紙〕

第二類 第二章 恩給 恤救

〔此再檢ハ取扱規則第三十條ニ據リ醫員ハ醫正以上ニ限ル〕
〔但醫正アラサルトキハ古參ノ軍醫ニシテ診斷書ヲ作りタルモノヨリモ上級ノ者タルヘシ〕
〔二十二年十二月二十二日省令第二十六號ヲ以テ(審査)以下ノニ行ヲ加フ〕

罷服證書

何鎮臺

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長官氏名

右ハ官氏名等ノ診斷證書ヲ罷服スルニ傷痍ハ治癒
スト雖トモ右膝關節強直ヲ胎シ該下肢ノ用ヲ全廢
スルニ由リ服務ニ堪ヘサル者ト診斷シ陸軍恩給令
第十九條第五項ニ策定スル者至當ニ有之候也
年月日
職陸軍軍醫總監 氏名 ㊦
同陸軍軍醫監 氏名 ㊧
同陸軍何等軍醫正 氏名 ㊨

第十八式

賑恤金ニ係ル醫官診斷證書

〔用紙美濃野紙〕

診斷證書

何鎮臺

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

第何號

陸軍何兵卒 氏

名

右何年(何役)何月何日(中略)但十五式ノ文言ニ準ス
傷痍ハ治癒スト雖正右示指(右指)示強直其用ヲ失フ
ニ由リ服役ニ堪ヘス該傷痍ハ陸軍恩給令第四十九
條第何項即明治十七年達乙第六十號御達第何款ノ
甲(乙)證ニ屬スル者ト診斷候也
年月日

年月日

職官氏名 ㊦

職官氏名 ㊧

職官氏名 ㊨

審査

近衛(第何師團)軍醫長氏名 ㊩

第十九式

醫務局罷檢證書

〔用紙美濃野紙〕

罷檢證書

何鎮臺

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

陸軍何兵卒 氏 名

右ハ陸軍軍醫監(何等軍醫正)何某陸軍何等軍醫何某
ノ診斷證書ヲ罷檢スルニ傷痍ハ治癒スト雖正右示

〔主任ハ職官氏名ノ肩ニ主任
ト記ス〕

〔二十二年十二月二十二日省
令第二十六號ヲ以テ(審査)
以下ヲ加フ〕

指(右示指強直其用)ヲ失フニ由リ服役ニ堪ヘス該傷
痕ハ陸軍恩給令第四十九條第何項明治十七年達シ
第六十號御達第何款ノ甲(乙)證ト診斷スル者至當ニ
有之候也

年月日

醫務局長 氏

名職印

第二十式 地方病院長診斷證書

〔用紙美濃紙〕

診斷證書

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族 平民

元何鎮置何兵第何隊第何大隊第何中隊

退職 官 氏 名

右何年何月何日ヨリ診察加療候處當時傷處ノ證狀
何々其他ノ諸證何々(何證續)何々ノ治療ヲ施シ(爾
後傷處何々ニ由リ何年何月何日何手術ヲ施シ)傷痕
ハ漸ク治癒スト雖モ何部ニ何々ノ證ヲ貽シ何々ノ
用(何肢)ヲ失フ者ト診斷候也

〔本人死亡シ寡婦等ヨリ扶助
料願ニ添フル診斷證書モ上式
ニ準シ死亡セシ病症ヲ詳記ス
ヘシ〕
〔規則第四條ニ依リ其治療陸
軍病院ニ係ルトキハ尚上式ニ
準シ陸軍軍醫之ヲ作リ地方病
院長以下ニ代ユルニ第十五式
ニ準シタル軍醫ヲ以テス可シ〕
〔但再檢ニ係ルトキハ都テ第
十五式ノ例ニ從フ〕

年月日

何府(縣)何郡(區)何町(村)

病院長 氏 名

名

同

主任醫 氏 名

名

右診斷之儀致實檢候也

何府(縣)何職 氏 名

名

第二十一式 癩疾不具ヲ證スル診斷證書

〔用紙美濃紙〕

診斷證書

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族 平民

何鎮置何兵第何隊第何大隊第何中隊

故官氏名父(母)(祖父母)(兄弟姉妹)

氏 名

右何年何月何日來何病ニ罹リ何部ニ何證ヲ貽シ(何
ノ官能ヲ妨ケ)(生來ノ何々ニシテ)産業ヲ營ムコト能
ハサル者ト診斷候也

年月日

何府(縣)何郡(區)何町(村)

病院長 氏 名

名

〔府縣廳吏員アヲサルモハ〕
何府(縣)何郡(區)何町(村)
郡(區)(戸)長 氏 名

右之通相遺無之候也

何府(縣)何郡(區)何町(村)

〔戸長〕氏名 ㊦

第二十二式 死亡診斷證書

〔用紙美濃野紙〕

死亡診斷證書

何鎮靈

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長 官氏名

右何年(何役)何月何日何地ニ於テ何々ノ際何部ヨリ
何部ニ至ル何傷ヲ受ケ(何病ニ罹リ)何地綑帶所(何月
何日ヨリ何地何病院)ニ於テ施療候處(何々症ヲ繼發)
遂ニ何々ニ由リ本日午前(後)何時何分死亡候也
年月日

何病院長 官氏名 ㊦

主任醫官

職 官 氏 名 ㊦

第二十三式 見証證書

〔用紙美濃野紙〕

見証證書

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長

第何號

官 氏 名

右何役何月何日何地ニ於テ俱ニ進撃ノ節(器械體操
ノ際何運動ニ方リ逆サマニ墮落シ左側ノ桁ニ觸シ)
(何々ニ由リ何物ノ爲メニ)何部ニ何傷痕ヲ受クルヲ
認メ候也

何鎮靈何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長

官 氏 名 ㊦

同

官 氏 名 ㊦

同

卒 氏 名 ㊦

年月日

第二十四式 死去證書

〔用紙美濃野紙〕

死去證書

第二類 第二章 恩給 恤救

官 氏 名
右何年何月何日死去ニ及フ段届ケ出候旨戸籍ニ記
載有之候也

何府(縣)何郡(區)何町(村)
[戸長]氏名 ㊦

第二十五式 離別證書

〔用紙美濃紙〕

離別證書

何府(縣)何郡(區)何町(村)士族
平民

故 官 氏 名

離別當時年齢何年何箇月

何府(縣)何郡(區)何町(村)士族
平民

氏 名 何 女 名

離別當時年齢何年何箇月

右何年何月何日結婚ノ處何年何月何日離別ニ及フ
段届出候ニ付氏名ノ戸籍ヲ削リ氏名ノ戸籍ニ送籍
候也

〔母ノ死去ノ時ハ〕

故官氏名妻

同人孤兒名母

名

〔長子ノ死去證書モ之ニ準ス〕

〔再婚若クハ復籍ナラハ離別
證書ヲ〕

再婚證書或ハ復籍證書ニ作ル

〔離婚ノ事先任地ニ在ラハ〕

何府(縣)何々

故 官 氏 名

右妻ハ當區へ移住前何年何月

何日離別致候由依テ當區戸籍

上妻ハ記載無之候也

但離別ノ妻ニ出生ノ男幾人

女幾人アリ共ニ送籍狀ニ具

シ候也

〔再婚ナラハ〕

右何年何月何日何某ト再婚ニ
及フ段届出以下同文〕

年 月 日

何府(縣)何郡(區)何町(村)

[戸長]氏名 ㊦

〔復籍ナラハ〕
右何年何月何日何某(復籍ニ
及フ段當郡(區)何町(村)戸籍
ニ記載有之候也

第二十六式 丁年證書

〔用紙美濃紙〕

丁年證書

何鎮置何兵第何聯隊第何大隊

故官氏名長男

氏 名

明治何年何月何日生

右當明治何年何月何日二十歳ニ相成候也

何府(縣)何郡(區)何町(村)

[戸長]氏名 ㊦

年 月 日

第二十七式

服役停年ニ付退職及免除恩給願
所管長官ヨリ陸軍大臣へ進達書

〔用紙美濃紙〕

何鎮置

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊長 官 氏 名

右此度年齢滿限ニ因テ別紙ノ通恩給下賜ノ儀願出

〔下士以下免除恩給モ上式ニ
準ス但年齢滿期ニ因テ云々ヲ〕
服役滿限ニ因テ別紙ノ通「云
々ニ換ヘ而シテ本人名前ノ肩
ニ隊號前名番番號ヲ併記スル

同	年三	月七	日任何官	
同	十二年三	月十二	日任何官	八年九月十四日
同	十五年四	月十一	日任何官	
同	十八年十二	月二十	日服役終期	
				總計十年五日
明治十二年三	月十八	日	輕禁錮	十一日 令第三十六條ニ據リ
同	年三	月二十八	日	除ク
				差引九年十一月二十四日
				免除恩給十一年ノ高
				金六拾圓 此四分ノ金額
				負傷増加恩給第五項
				此四分ノ金額五圓
				金貳拾貳圓五拾錢 六拾貳錢
				五厘

「刑期ヲ除クニハ總テ三十日ヲ以テ一箇月ト爲シ之ヲ計算ス」

年月日

何領事參謀長

氏

名

職印

第三十式

傷疾疾病ニ付退職及免除恩給願
所管長官ヨリ陸軍大臣へ進達書

「用紙美濃野紙」

何領事何兵第何聯隊第何大隊第何中隊
第何號
官 氏 名

右何年某地征討從軍中何月何日某ノ戰地ニ於テ右
上肢ノ用ヲ全廢シ服役ニ堪エ難ク別紙ノ通恩給願
出候付調査候處事實相違無之服役年等別紙計算書
之通ニ候就テハ陸軍恩給令ニ依リ恩給下賜相成度
查覈ノ書類相添此段申進候也

年月日

何領事司令官(何長)(爵) 氏

名

職印

陸軍大臣爵氏名殿

第三十一式

傷疾疾病ノ恩給增加並ニ服役ヲ離レテ更ニ其恩
給ヲ願フニ付領事司令官ヨリ陸軍大臣へ進達書

「用紙美濃野紙」

何府(縣)何國何郡(區)何町(村) 士族
平民

元何領事何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

第二類 第二章 恩給 恤救

退職官氏名

「下士以下モ上式ニ準ス」

右何年何月何日某地ニ於テ實地演習ノ際兩眼負傷傷痕第六項ニ策定既ニ恩給並負傷增加恩給下賜候處爾後重症ニ變シタル趣ヲ以テ恩給増加願出候ニ付猶及調査候處事實相違無之服役年等別紙計算ノ通ニ候就テハ陸軍恩給令ニ依リ更ニ傷痕恩給増加下賜相成度查駁ノ書類相添此段申進候也

「服役ヲ離レタル後傷痕疾病ニ基キ更ニ其恩給ヲ願フ時モ上式ニ準ス」
「計算書ハ第二十九式ニ準ス」

年月日

何鎮臺司令官(爵)氏

名 職印

陸軍大臣爵氏名殿

第三十二式 下士卒賑恤金所屬隊長ヨリ鎮臺司令官へ申請書

「用紙美濃紙」

賑恤金申請書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

第何號

陸軍何兵卒 氏

名

右何年某地征討從軍中何月何日某ノ戦地ニ於テ右

上肢ニ負傷シ醫療相加候未竟ニ右示指ヲ失フニ至リ所詮服役ニ堪ヘ難キ旨軍醫診斷相成候條特別ノ御詮議ヲ以テ相當ノ賑恤金下賜相成度證據書類何通相添此段申進候也

何鎮臺

何兵第何聯隊長 官氏名 ㊦

年月日

何鎮臺司令官(爵)氏名殿

第三十三式 給助金願書

「用紙美濃紙」

給助金願書

名 儀

何年何月何日被任何官爾來何箇年勤績本年何月何日服役滿期ニ依リ免官相成(後備軍)候ニ付相當ノ給助金下賜度願書相添此段奉願候也

何縣何國何郡何町何番地士族(平民)

「遺族等ヨリ出願ノトキハ」

何縣士族(平民)

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

故官氏名

右何年何月何日被任何官中略何年何月何日何病ニ罹リ死去任候(以下同文)

故官氏名(寡婦、孤兒)

寄附地ニ於テ金額下付ヲ願

何府何國何郡何町何番地寄留
年月日 官 氏 名 ④

何鎮臺司令官(何長)(爵)氏名殿

第三十四式 給助金願書ニ添フヘキ履歷書 「用紙美濃紙」

履歷

何府何國何郡何町何番地土族(平民)

現何府何國何郡何町何番地寄留

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

官 氏 名
何年何月何日生

明治何年何月何日任何官

同何年何月何日依常備役滿期後備軍願書申付 ⑤
賜下 ⑥

フモノハ左ノ追書ヲ加フヘシ
追テ本文御餘議相成候上ハ寄
留地ニ於テ拜受仕度候也

同何年何月何日任何官
同何年何月何日依服役滿期免本官
同何年何月何日病死

第三十五式 給助金願書所管長ヨリ陸軍大臣ヘ進達書 「用紙美濃紙」

何鎮臺

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊 官 氏 名

右之者今般現役滿期ニ依リ給助金願出候ニ付調査
候處本人儀ハ陸軍恩給令第五十一條ニ適該スル者
ニ付相當ノ給助金下賜相成度別紙願書相添此段申
進候也

年月日 何鎮臺司令官(何長)(爵) 氏 名 職印

陸軍大臣爵氏名殿

「現役中死歿ノ者ナラハ」
右ノ者何年何月以來何病ニ罹
リ何年何月何日死去致候ニ依
リ其遺族何某ヨリ給助金願出
候ニ付調査候處事實相違無之
候間相當ノ給以下同文」

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトアル可シ但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス

第五條 軍人未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ海軍卿旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

- 一 公權停止ノ時
- 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時
- 三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ日(戰地等ニテ死歿ノ者ハ海軍官憲ヨリ報告ノ日)ヨリ一箇年間願出サル時ハ其權利消絶ス

恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠リタル時ハ其怠リタル間ノ金額ハ之ヲ給セス

第九條 恩給及ヒ扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スルトキハ初メテ金額ヲ受領セシ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ海軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之

ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ海軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給スル年(又ハ)ノ下八字ヲ加フ

戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メニ傷痍若クハ疾病ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰時ニ於テ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ヒ勤務ニ従事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス同上(傷痍)ノ下五字ヲ加フ

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルヲ甲號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 退職恩給ハ下士退役恩給ハ卒服役實期十一年以上ニシテ定期ノ年齢ニ對シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痍若クハ疾病ノ爲メ退職若クハ退役スル者ニ之ヲ給ス同上(或ハ)ノ下五字ヲ加フ前條第二項ニ掲グルカ如キ傷痍疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據明亮ニシテ退職若クハ退役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス其退職退役恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙號表面ノ如シ但十

一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 軍人傷痍ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職若クハ退役スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 下士以上ノ恩給願書ハ所管長官ヲ經テ海軍卿へ卒ハ所管長官へ其履歷書ヲ副呈ス可シ

第十四條 傷痍疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候等詳細之ヲ開陳ス可シ

第十五條 傷痍疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證證書又ハ公文若クハ查問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ證明ス可シ

第十六條 傷痍疾病不治ノ狀ハ海軍病院長並ニ主任醫官（地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長並ニ主任醫師）ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ證ス可シ

其診斷證書ハ傷痍疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ
病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ海軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷證書ヲ要ス

第十七條 傷痍疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤヲ當該ノ所管ニ於テ檢査判定シ之ヲ海軍卿ニ呈スヘシ海軍卿ハ臨時調査委員ヲ選定シ更ニ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス

第十八條 下士以上恩給ヲ願フ時ハ所管長官其海軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命シ卒恩給ヲ願フ時亦所管長官同上ノ日ニ於テ直ニ免役ス可シ

第十九條 凡恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但其官階ニ進ミ未タ滿十八箇月ニ至ラヌシテ退職若クハ退役ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰鬪又ハ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ或ハ戰地若クハ航海中ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第二十條 戰鬪及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者

二 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケシ者

三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者

四 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケシ者

五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者

六 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケシ者

第二十一條 傷痍疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ル、ノ際其傷痍ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年

二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ
日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十二條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ
緣故トニ依リテ差アリ

- 一 戰鬪或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地
ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰地ニ於テ非常ノ勞動及ヒ困苦ノ勤務ニ服シ
爲メニ健康ヲ害セラレ發病終ニ死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ
感染死歿シタル軍人ノ寡婦
- 二 退職若クハ退役恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡
婦

其扶助料第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十三條 戰鬪若クハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受クルト雖モ其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死歿
シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十四條 戰鬪中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十
二條第一項ヲ適用ス

第二十五條 寡婦ハ海軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ

嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查驗ヲ要
セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ
發病前ニ婚配セシ者ニ限ル

第二十六條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十七條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人
ノ孤兒嫡子庶子養子ヲ論セス戶籍ニ登記セシ者(但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハ
ラス家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニ
ハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス
第二十八條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年
少ナル者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戶籍ヲ去リ或ハ男女
共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラル、時ハ之ヲ止メ更ニ其俸給ヲ受ク
可キ者ニ之ヲ給ス

第三十條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ
復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養ス
ルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ終身寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ給スルコトアル可
シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スル
コトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ
轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ廢疾及ヒ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能
ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ其孰レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其
戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十一條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親屬二名及ヒ後見人アレハ其後見
人若シ親屬ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡〔區〕長〔戸長〕ノ奥印セシ願書ヲ以テ地方
廳ヘ進達ス可シ但恩給登錄寫帖アレハ之ヲ添附スヘシ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ時ハ死亡報告若クハ死亡證書若クハ他ノ
公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痍疾病ニ起因スル者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫
師ノ診斷書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書
ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ詳細證明ス可シ海軍卿ハ之ヲ調査委員ニ下シ其實事ヲ調査セシメ
以テ決定ス

第四章 服役年算則

第三十二條 服役年ノ始期及終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 准士官以上ニテ三上長三長及樂長ヲ除クノ外ハ初任ノ日三上長三長及ヒ樂長以下ハ
四等卒及ヒ樂生タルノ日ヲ以テ服役年ノ始期トス十七年第七十六號達ヲ以テ(四
上長四長)ヲ(三上長三長)ニ改ム

但准士官以上ハ明治四年八月以前下士以下ハ明治二年五月以前准卒ハ海軍定員ニ
准セサル以前ノ服役年ニ算入セス然レモ其以前ヨリ勤仕シタル者ハ其算入期ノ前
月ニ於ケル現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應
スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ退職恩給ノ願書ヲ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈スル進達書ノ日卒ハ退役ノ日
ヲ以テ終期トス

第三十三條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス
士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事
業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス

第三十四條 陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナル者ハ陸軍服役ノ年數ヲ通算ス又文官轉シテ海
軍軍人トナリタル者並ニ海軍軍人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル
者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算
ス

第三十五條 退職若クハ退役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其復歸以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役

實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 日本國外ノ戰役ニ從事中ハ三箇年ヲ增加ス

二 出征艦隊ニ編入中及ヒ合圍若クハ臨戰地境內ニ服役中ハ一箇年ヲ增加ス

三 戰時平時ヲ論セス外國航海中ハ半箇年ヲ增加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於

テハ海軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セ

ス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス

扶助料ノ願書ハ居住ノ地方廳ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス第十八年十二月

ヲ以テ本項 第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審查シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏海

軍ノ三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ證

ト爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下附スルノ前ニ於テ海軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ

其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ退役恩給并ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 下士以上ハ計算日付ノ翌日

二 卒ハ免役ノ翌日

三 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ翌日

第四十六條 恩給扶助料ハ一月四月七月十月ニ於テ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所

在ノ地方廳ヲ經テ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上〔戶長〕ノ證セル本人生存

書及ヒ金額受領證書ト引替ニ其金額ヲ交付ス可シ

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月

前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ

收メテ內務省ニ出シ內務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省海軍省ニ報告ス但扶助料

移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メス更ニ扶助料請願ノ證トナサシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ亡失スル時ハ速ニ其旨ヲ

届出可シ此場合ニ於テハ內務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

一 下士卒戦闘或ハ戦地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官免役スト雖

モ第二十條末項ヨリ輕傷ニシテ退職非役恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷増

加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス(同上免役)ニ

二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷増加表

第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニ非スシテ傷痍疾病ヲ受ケ全ク

服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ

若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷増加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス

五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ其寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生

活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ救育スルノ親族

ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金

額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ海軍卿之ヲ詮議シ太政官

特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナリ

恩給ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告

ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス(十七年第三十八號達ヲ以テ(恩給)ノ

海軍恩給金額表

甲號 退職恩給表

年	一等	二等	三等	等四	等五	等六	等七	等八	等九	等十
十一年	千五百四十	千二百四十	千五百四十	千七百五十	千四百五十	千四百五十	千四百五十	千二百二十五	千八百四十	千四百五十
十二年	千五百五十	千二百五十	千五百五十	千七百六十	千四百六十	千四百六十	千四百六十	千二百三十	千八百五十	千四百六十
十三年	千五百六十	千二百六十	千五百六十	千七百七十	千四百七十	千四百七十	千四百七十	千二百三十五	千八百六十	千四百七十
十四年	千五百七十	千二百七十	千五百七十	千七百八十	千四百八十	千四百八十	千四百八十	千二百四十	千八百七十	千四百八十
十五年	千五百八十	千二百八十	千五百八十	千七百九十	千四百九十	千四百九十	千四百九十	千二百四十五	千八百八十	千四百九十
十六年	千五百九十	千二百九十	千五百九十	千七百九十	千四百九十	千四百九十	千四百九十	千二百五十	千八百九十	千四百九十
十七年	千六百	千三百	千六百	千八百	千五百	千五百	千五百	千二百五十五	千九百	千五百
十八年	千六百一十	千三百一十	千六百一十	千八百一十	千五百一十	千五百一十	千五百一十	千二百六十五	千九百一十	千五百一十

十九年	千七百四十	千三百六十	千九百四十	八百五十	六百八十	五百十	三百四十	二百五十	二百四十
二十年	千七百二十五	千三百八十	千九百五十	八百六十	六百九十	五百十	三百五十	二百五十	二百四十
二十一年	千七百五十	千四百	千九百六十	八百七十	七百	五百十	三百六十	二百五十	二百四十
二十二年	千七百七十五	千四百二十	千九百七十	八百八十	七百十	五百十	三百七十	二百五十	二百四十
二十三年	千八百	千四百四十	千九百八十	八百九十	七百二十	五百十	三百八十	二百五十	二百四十
二十四年	千八百二十五	千四百六十	千九百九十	九百	七百三十	五百十	三百九十	二百五十	二百四十
二十五年	千八百五十	千四百八十	千九百五十	九百一十	七百四十	五百十	四百	二百五十	二百四十
二十六年	千八百七十五	千五百	千九百六十	九百二十	七百五十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
二十七年	千九百	千五百二十	千九百七十	九百三十	七百六十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
二十八年	千九百二十五	千五百四十	千九百八十	九百四十	七百七十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
二十九年	千九百五十	千五百六十	千九百九十	九百五十	七百八十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
三十年	千九百七十五	千五百八十	千九百五十	九百六十	七百九十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
三十一	千	千六百	千九百六十	九百七十	八百	五百十	四百十	二百五十	二百四十
三十二	千二十五	千六百二十	千九百七十	九百八十	八百十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
三十三年	千五十四	千六百四十	千九百八十	九百九十	八百二十	五百十	四百十	二百五十	二百四十
三十四	千七十四	千六百六十	千九百九十	千	八百三十	五百十	四百十	二百五十	二百四十

乙號

退職及退役恩給表

(十八年一月第五號達ヲ以テ 退役ノ上ニ三字ヲ追加ス)

年	官	等	一	二	三	四	五
三十五年	二千四百	六百八十	千四百	五百十	四百	三百十	二百十
三十六年	二千五百	七百	千四百八十	五百十	四百	三百十	二百十
三十七年	二千五百五十	七百二十	千五百	五百十	四百	三百十	二百十
三十八年	二千六百	七百四十	千五百二十	五百十	四百	三百十	二百十
三十九年	二千六百五十	七百六十	千五百四十	五百十	四百	三百十	二百十
四十年	二千七百	七百八十	千五百六十	五百十	四百	三百十	二百十
三十五年	二千四百	六百八十	千四百	五百十	四百	三百十	二百十
三十六年	二千五百	七百	千四百八十	五百十	四百	三百十	二百十
三十七年	二千五百五十	七百二十	千五百	五百十	四百	三百十	二百十
三十八年	二千六百	七百四十	千五百二十	五百十	四百	三百十	二百十
三十九年	二千六百五十	七百六十	千五百四十	五百十	四百	三百十	二百十
四十年	二千七百	七百八十	千五百六十	五百十	四百	三百十	二百十

第二類 第二章 恩給 恤救

年	級	金額
二十三年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
二十二年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
二十一年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
二十年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十九年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十八年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十七年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十六年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十五年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十四年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十三年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十二年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十一年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
十年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
九年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
八年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
七年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
六年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
五年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
四年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
三年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
二年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓
一年	三級	九十圓八十一圓七十二圓六十六圓六十圓五十四圓四十八圓四十二圓

丙號 負傷增加恩給表

項	等級	金額
一項	一等	九百圓
一項	二等	八百圓
一項	三等	七百圓
一項	四等	六百圓
一項	五等	五百圓
一項	六等	四百圓
一項	七等	三百圓
一項	八等	二百圓
一項	九等	一百圓
一項	十等	五十圓
一項	十一等	三十圓
一項	十二等	二十圓
一項	十三等	十圓
一項	十四等	五圓
一項	十五等	三圓
一項	十六等	二圓
一項	十七等	一圓
一項	十八等	五角
一項	十九等	二角五分
一項	二十等	一角五分
一項	二十一等	一角
一項	二十二等	五分
一項	二十三等	二分五厘
一項	二十四等	一分
一項	二十五等	五分
一項	二十六等	二分五厘
一項	二十七等	一分
一項	二十八等	五分
一項	二十九等	二分五厘
一項	三十等	一分

丁號 戰鬪及公務ニ因リ死亡者ノ寡婦(孤兒)扶助料表 (十七年第三十七號公達ヲ以テ(死亡)ノ下(者)ノ一字ヲ加フ)

等級	金額
一等	千八百圓
二等	千四百圓
三等	千圓
四等	八百圓
五等	六百圓
六等	四百圓
七等	三百圓
八等	二百圓
九等	一百圓
十等	五十圓
十一等	三十圓
十二等	二十圓
十三等	十圓
十四等	五圓
十五等	三圓
十六等	二圓
十七等	一圓
十八等	五角
十九等	二角五分
二十等	一角五分
二十一等	一角
二十二等	五分
二十三等	二分五厘
二十四等	一分
二十五等	五分
二十六等	二分五厘
二十七等	一分
二十八等	五分
二十九等	二分五厘
三十等	一分

戊號 寡婦(孤兒)扶助料表

等級	金額
一等	千五百圓
二等	千二百圓
三等	千圓
四等	八百圓
五等	六百圓
六等	四百圓
七等	三百圓
八等	二百圓
九等	一百圓
十等	五十圓
十一等	三十圓
十二等	二十圓
十三等	十圓
十四等	五圓
十五等	三圓
十六等	二圓
十七等	一圓
十八等	五角
十九等	二角五分
二十等	一角五分
二十一等	一角
二十二等	五分
二十三等	二分五厘
二十四等	一分
二十五等	五分
二十六等	二分五厘
二十七等	一分
二十八等	五分
二十九等	二分五厘
三十等	一分

己號 給助金表

〔一〕海軍恩給令發布前退隱料扶助料ヲ給與セシ者給與方 明治十六年十一月十七日 海軍省達乙第十一號府廳

海軍恩給令發布前ニ海軍退隱令ニ依リ退隱料扶助料ヲ給與シタル者等退隱令ニ照シ給與之我左ノ通御達相成候條此旨相達候事

本年第三十八號達ヲ以テ海軍恩給令ヲ定メ従前ノ海軍退隱令廢止候該恩給令發布前ニ退隱令ニ依リ退隱料扶助料ヲ給與シタル者及ヒ退隱料扶助料賑恤金ヲ給與スヘキ資格ヲ備ヘ支給方除議中ニ係ル者ハ退隱令ニ照シ給與ス可シ此旨相達候事

明治十六年十一月八日 大政大臣三條實美

〔二〕海軍退隱令ニ依リ退隱料扶助料給與ノ者恩給令發布後其權利移轉等ノ處分方明治十七年九月二日

海軍省達第七十二號

左ノ通太政官ヨリ御達相成候條爲心得此旨相達候事

海軍省

海軍退隱令ニ據リ退隱料或ハ扶助料ヲ給與シタル者海軍恩給令發布後ニ於テ其權利移轉若クハ停止及其他ノ事故生
セシトキハ總テ恩給令ニ據リ處分スヘシ此旨相達候事

明治十七年八月十八日

大政大臣三條實美

〔三〕海軍恩給扶助料出願中族籍變換改氏名等届出シ明治二十年八月二十日
海軍省訓令第七十九號海軍一般北海道府縣

海軍恩給令ニ據リ恩給並扶助料出願中本人族籍變換若クハ改氏名等異動アルトキハ速ニ當省へ届出ツヘシ

●恤救沿革要領

明治二年八月廿五日淫雨農事ヲ害スルヲ以テ詔シテ救恤セシム○同年八月廿五日布告ヲ以テ諸官員官祿ヲ減シテ窮民ノ救恤ニ充ントスルノ請ヲ許シ之ヲ兩京ノ救恤ニ充テシム○四年六月二十日布告ヲ以テ棄兒常成ヨリ十五歳マテ年々米七斗ツ、ヲ賜フ○同年十一月廿八日布告ヲ以テ賑治條例ヲ定メ窮民一時救助ノ規則ヲ掲ク○六年三月第七拾九號達ヲ以テ三子出産困窮ニシテ糶養行届キ兼ヌル向ヘ糶養料ヲ給與セシム○同年四月第百三十八號布告ヲ以テ自今滿十三年ヲ限リ年々米七斗ツ、下渡シ年餘見定方ヲ示ス○七年十二月第六十二號達ヲ以テ目下恤救規則ヲ定メ目下難差置無告ノ窮民ヲ救助セシム○八年七月第百二十二號達ヲ以テ賑治條例中窮民一時救助ノ規則ヲ廢シ更ニ窮民一時救助規則ヲ定ム○十三年六月第三十一號布告ヲ以テ備荒儲蓄法ヲ定メ八年第百二十二號達窮民一時救助規則ヲ廢ス

十三年第三十一號布告備荒儲蓄法第六號參照

第五十 恤救規則

明治七年十二月八日 太政官達第百六拾貳號府縣

濟貧恤窮ハ人民相互ノ情誼ニ因テ其方法ヲ設ヘキ筈ニ候得共目下難差置無告ノ窮民ハ自今各地ノ遠近ニヨリ五十日以内ノ分左ノ規則ニ照シ取計置委曲内務省へ可伺出此旨相達候事

恤救規則

- 一 極貧ノ者獨身ニテ癡疾ニ罹リ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一ケ年米一石八斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ
- 一 但獨身ニ非スト雖ヒ餘ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身癡疾ニ罹リ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一 同獨身ニテ七十年以上ノ者重病或ハ老衰シテ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一ケ年米一石八斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ
- 一 但獨身ニ非スト雖ヒ餘ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身重病或ハ老衰シテ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一 同獨身ニシテ疾病ニ罹リ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一日米男ハ三合ノ割ヲ以テ給與スヘシ
- 一 但獨身ニ非スト雖ヒ餘ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身病ニ罹リ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一 同獨身ニテ十三年以下ノ者ニハ一ケ年米七斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ
- 一 但獨身ニ非スト雖ヒ餘ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與シ給